

授 業 科 目	地 域 保 育 基 礎 講 座		単位数	2	担当教員	染谷 哲夫 他
講 義 の 内 容	地域保育学科における３年間の学びを開始するにあたり、様々な基礎事項について学び、地域保育学科の学生として必要な知識、技能、態度等を養成する。授業担当は学科の専任教員が専門分野の話を交えながら分担して行う。 実情に応じて学外講師による講演や校外授業（地域見学等）を予定している。					
到 達 目 標	① 地域保育学科の学生として必要な知識、技能、態度等を養成する。 ② ノートの取り方及びレポート記述や発表の方法を学ぶ。 ③広い視野で自分を見つめ、これからの大学生活・学習に生かせる機会とする。					
授 業 計 画	第 1 回	授業の概要 学科専任教員の紹介				
	第 2 回	学校施設紹介 防災について				
	第 3 回	大学で何を学ぶのか①				
	第 4 回	大学で何を学ぶのか②				
	第 5 回	大学で何を学ぶのか③				
	第 6 回	学外講師による講演				
	第 7 回	グループワーク①				
	第 8 回	グループワーク②				
	第 9 回	グループワーク③				
	第 10 回	グループワーク④				
	第 11 回	校外授業（地域見学等）				
	第 12 回	校外授業（地域見学等）				
	第 13 回	実習の流れと心構え				
	第 14 回	グループワーク発表				
	第 15 回	前期まとめ・後期オリエンテーション				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 準備や振り返り等、自分と向き合う時間が必要である。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（３０％）、発表（２０％）、授業態度（５０％）					
教 科 書	『大学基礎講座 改増版 充実した大学生活を送るために』（藤田哲也ほか、北大路書房）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	学外講師による講演や学外授業の日時および内容等は現在未定である。確定次第連絡するがそれに伴い授業計画も変更になる。					

授 業 科 目	日 本 国 憲 法	単位数	2	担当教員	平田 陽一
講 義 の 内 容	私達の国家は市民の良識により公正な社会を作ることを目指しており、この目的を実現するために考え出された法が憲法である。この視点から憲法の基本的な考え方を説明する。				
到 達 目 標	① 憲法が制定された目的を理解すること ② 憲法が前提としている「自律した市民」としての自覚が持てるようになること ③ 自己の判断により国の政策を選択できるようになること				
授 業 計 画	第 1 回	憲法について（憲法は政府の守るべき法であること）			
	第 2 回	近代立憲主義（憲法が政治権力の濫用を防止するための法であること）			
	第 3 回	近代国家と憲法（政府の役割が国民の人権の保障であること）			
	第 4 回	平和主義（国際紛争を平和的手段で解決するということ）			
	第 5 回	国民主権主義（国家の政策は国民が決めるということ）			
	第 6 回	人権尊重主義（政府は国民の人権を侵害してはならないということ）			
	第 7 回	権力分立主義（政治権力の濫用を防止するため分割するということ）			
	第 8 回	人権（人間が人間として生まれながらに当然有する権利であること）			
	第 9 回	自由権（政府の人権侵害からの国民の自由について）			
	第 10 回	社会権（国民の人権を実現するために政府のなすべきことについて）			
	第 11 回	参政権など（国民の意思の表明などについて）			
	第 12 回	立法機関（国会の役割について）			
	第 13 回	行政機関（内閣の役割について）			
	第 14 回	司法機関（裁判所の役割について）			
	第 15 回	憲法の現代的諸問題			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 予習は困難と思われるので、特に必要としない。		復 習： 単なる復習ではなく、基本的な問題を心に留めて考え続けることが望まれる。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（60％）、授業態度（40％）				
教 科 書	『現代社会の法と民法』（小野幸二編著、八千代出版）				
参 考 文 献					
注 意 事 項	一般教養として憲法を勉強するという意識ではなく、よい社会は自分達で作るという積極的な心構えで勉強すること。				

授 業 科 目	情 報 処 理		単位数	2	担当教員	星 野 治
講 義 の 内 容	授業の前半では、Microsoft Office 2010 に含まれている、文書作成ソフト（Word 2010）および表計算ソフト（Excel 2010）の基礎を習得します。 授業の後半では、Word 2010 や Excel 2010 を応用した課題に取り組みます。また、プレゼンテーションソフト（PowerPoint 2010）の基本的な取り扱いについても、簡単に触れます。					
到 達 目 標	・今日の私たちの日常生活ではコンピュータをはじめとする情報論理システムの活用が常識となりつつあることを念頭におきながら、幼児教育・保育の現場での情報メディア活用法の一端に触れていただきます。 ・パソコン初心者には、「習うよりも慣れること」を実感していただきます。 ・パソコン経験者には、「より賢いパソコン活用の仕方」を考えていただきます。					
授 業 計 画	第 1 回	ガイダンス（第 1 章～第 2 章、第 3 章 1.～9.） コンピュータとインターネット、モラルハザードについて、Windows の基礎知識、日本語入力の練習、その他。				
	第 2 回	Word の学習（第 3 章 10.～14.） やさしいビジネス文書の作成練習、その他。				
	第 3 回	Word の学習（第 3 章 15.～16.） 文書に対する基本的な修飾（フォント、下線、網かけ、etc.）、その他。				
	第 4 回	Word の学習（第 3 章 17.～18.） 表の取り扱いかた、その他。				
	第 5 回	Word の学習（第 3 章 19.） 文書に対するやや高度な修飾（ページ罫線、ワードアート、図形、etc.）、その他。				
	第 6 回	Excel の学習（第 4 章 1.～6.） 基本的な表（数表）の作成、その他。				
	第 7 回	Excel の学習（第 4 章 7.～9.） より見やすい表（数表）の作成（表の装飾、グラフの取り扱い、etc.）、その他。				
	第 8 回	Excel の学習（第 4 章 10.～15.） より高度なデータ処理（条件判定、セル参照、検索、フィルター、etc.）、その他。				
	第 9 回	Word および Excel の総復習 課題の作成を通して、これまでの学習内容の総復習を行います。				
	第 10 回	Word および Excel の応用 幼児教育・保育の現場に即した課題の作成（保護者あて通知、園便り、etc.）、その他。				
	第 11 回	Word および Excel の応用 長文レポート（鑑賞文など）の作成、その他。				
	第 12 回	Word および Excel の応用 Word および Excel を両方とも使用する課題の作成、Excel を利用した数学問題の解答、その他。				
	第 13 回	PowerPoint の基礎（第 5 章 1.～4.） 簡単なスライドの作成、その他。				
	第 14 回	PowerPoint の基礎（第 5 章 5.～13.） より高度なスライドの装飾（ワードアート、アニメーション、etc.）、その他。				
	第 15 回	全体のまとめ 幼児教育・保育の現場での情報メディア活用法について、各自の見解をレポートとしてまとめます。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 上記「授業計画」に示す教科書の章番号・節番号を目安にして、教科書の内容にあらかじめ目を通しておくことを推奨します。			復 習： パソコン操作に慣れていない人は、授業の空き時間を利用するなどして、パソコンに触れる機会を増やしてください。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（80％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『30 時間でマスター Office2010』（実教出版編修部、実教出版株式会社）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	・履修登録すべき曜日・時限が指定されている場合、必ずその指定にしたがうこと。 ・教科書を毎回、忘れずに持参すること。 ・教科書の付録 CD-ROM（授業の際に利用します）を、紛失したり破損したりしないように注意すること。 ・教科書の記載内容の一部を、より up to date な内容に置き換えて説明することがあります。 ・無断欠席、無断遅刻等々、「無断～」な言動は厳禁です。 ・課題については、教科書所収の設問以外からも出題されることがあります。					

授 業 科 目	英 語		単位数	2	担当教員	杉山 早苗
講 義 の 内 容	脳性麻痺というハンディを背負った少女が周りの愛情に支えられて明るく成長する姿を、母親が描いた Marie Killilea の「Karen」を読む。また折に触れ、発音記号や発声法、文法や文化の違いについて述べる。					
到 達 目 標	海外の文学作品に積極的に関わり、辞書を引きながら英文を読みこなせるようになる。 作品の精読と分析を通して、文化の違いを理解する。 発音記号や発声法を意識した音読ができるようになる。					
授 業 計 画	第 1 回	まだ身障者に対する偏見があった時代における本書の成立過程の説明及び授業の進め方。		第 16 週	この種の子供に対する親の叱り方についても学ぶよう注意を促しながら読む。	
	第 2 回	以降の授業については、基礎学力の不足を補う意味で、丁寧に構文や発音の指導を行う。		第 17 週	母親になったつもりで、ある場面を設定して叱る際の言葉を試しに英語で表現させてみる。	
	第 3 回	一人称の「主人公の母」の物語形式になっていることの効果を考えさせながら読む。		第 18 週	前の時間に書いた短文（叱り方）を写して提出させる。出来たら即座にチェックする。	
	第 4 回	脳性麻痺がどういう病気で、世界の現状はどうであるか知るところを話させながら読む。		第 19 週	平易な文章なので試験的に速読を試みる。	
	第 5 回	主人公カレンの家庭環境について今までに学んだことを整理させながら読む。		第 20 週	速読と Q and A	
	第 6 回	障害に関する英語表記の種々の変化について発表させ、その理由を考える。		第 21 週	速読と Q and A	
	第 7 回	カレンのおかげで家族がどう変化したか、具体的に再確認させて読む。		第 22 週	前の章の内容を簡単に発表できる（不足の場合は補充）習慣を徹底させながら読む。	
	第 8 回	カレンを中心とするエピソードの積み重ねを分類してメモさせながら読む。		第 23 週	自分がカレンになったつもりで、その思いを英語の短文にまとめながら読む。	
	第 9 回	両親の苦心とカレンの苦労。各自の単語増法を話し合わせ、助言する。		第 24 週	速読と Q and A	
	第 10 回	人間における「違い」と「差別」という問題を学生自身の問題にひきつけて考え読む。		第 25 週	可能ならば、同じような状況にある英米人の、新聞の人生欄への投書をプリントして読む。	
	第 11 回	これまでのを本文を応用しながら要約する宿題を出す - 先に要約の仕方を簡単に説明する。		第 26 週	ヘレン・ケラーの伝記（The Story of My Life）を紹介し、その一部をプリントして読む。	
	第 12 回	前の時間に出した課題から選んだ幾つかの例を読んで聞かせてから続きを読む。		第 27 週	パール・バックの（The Child Who Never Grew）を紹介し、その一部をプリントして読む。	
	第 13 回	学校や世間での身体障害者に対する姿勢を現実的に考えながら読む。		第 28 週	これまでの重要構文や重要な慣用句の総ざらいをしながら、学生に朗読させる。	
	第 14 回	将来のために甘やかすまい(independence)という両親の決心をどう思うかを考え読む。		第 29 週	読み終わった感想を話し合い、障害者への理解と扶助を誓い合えたら成功である。	
	第 15 回	周囲の目からカレンを守る両親の勇気に注目しながら読む。		第 30 週	これまでのまとめ	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 割り当てた範囲に対して、辞書を活用し自分なりの和訳を作成してくること。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（５０％）、発表（２０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	授業は基本的に指名された人が和訳を発表する。					

授 業 科 目	体 育 実 技		単位数	1	担当教員	岡 芳 郎
講 義 の 内 容	本講義では、身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体の保持増進に努めることによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に授業を実施する。					
到 達 目 標	1）運動・スポーツを通して主体性・協調性・社会性・道徳性などを養う。 2）幼児教育者として必要な身体運動に関する基本的な知識と技能を習得し、自ら動ける身体を作り、体力の維持増強を図る。 3）幼児教育者として適切に動け、子どもを援助指導できるように学生の運動に関する資質の向上を図る。					
授 業 計 画	第 1 回	授業ガイダンス 履修方法、受講上の注意事項についての説明		第 16 回	軽スポーツ① (フリスビー・フラフープを使って)	
	第 2 回	からだほぐし① (なわとび・ボールを使って)		第 17 回	軽スポーツ② (フリスビー・フラフープを使って)	
	第 3 回	からだほぐし② (なわとび・ボールを使って)		第 18 回	卓球① (各種ストロークの練習 簡易ゲーム)	
	第 4 回	バドミントン① (各種ストロークの練習 簡易ゲーム)		第 19 回	卓球② (A・Bブロック総当たり リーグ戦)	
	第 5 回	バドミントン② (ダブルスゲーム リーグ戦)		第 20 回	テニス① (各種ストロークの練習 簡易ゲーム)	
	第 6 回	バドミントン③ (ダブルスゲーム リーグ戦)		第 21 回	テニス② (各種ストロークの練習 簡易ゲーム)	
	第 7 回	バスケットボール① (パス・ドリブル・シュート練習 簡易ゲーム)		第 22 回	ドッチボール① (クラス内対抗マッチ)	
	第 8 回	バスケットボール② (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 23 回	ドッチボール② (クラス内対抗マッチ)	
	第 9 回	バスケットボール③ (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 24 回		
	第 10 回	ソフトバレーボール① (パス・アタック・サーブ練習 簡易ゲーム)		第 25 回		
	第 11 回	ソフトバレーボール② (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 26 回		
	第 12 回	ソフトバレーボール③ (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 27 回		
	第 13 回	フットサル① (パス・ドリブル・シュート練習 簡易ゲーム)		第 28 回		
	第 14 回	フットサル② (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 29 回		
	第 15 回	フットサル③ (A・Bブロック総当たり リーグ戦)		第 30 回		
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 授業で実施する競技について基本技術やルールについて把握しておくこと。			復 習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（１０％）、課題（２０％）、実技（３０％）、授業態度（４０％）					
教 科 書	適宜プリントを配布する。					
参 考 文 献						
注 意 事 項	授業は３つのコースから選択できる。（１．平常コース ２．スケート教室 ３．スキー教室） ※スケート・スキー教室にかかる各諸費用については全額学生負担となる。 指定された体操着を着用すること。 シューズは体育館用・外用を準備すること。 ※欠席回数が全授業の３分の１を超えた場合は評価の対象外となる。					

授 業 科 目	体 育 講 義	単位数	1	担当教員	岡 芳 郎
講 義 の 内 容	本講義では、「健康」「運動」「スポーツ」の実践の基盤となる理論的な事柄について理解を深めていくことを目的に、健康・体力・運動について正しい知識を学び、健康的なライフスタイルを目指せるようにする。 また、さまざまな生活習慣病について学び、運動・栄養・休養との関係について考えていく。				
到 達 目 標	1）健康とは何かについて考える。 2）生活習慣病とその対策について理解する。 3）自らの健康の保持増進方法を考え、実践できるようにする。				
授 業 計 画	第 1 回	授業ガイダンス 性格について（性格の形成・性格の分類・性格検査）			
	第 2 回	血液について（血液の役割・血液の成分・血液型の比率） 血液型の遺伝システム 輸血について			
	第 3 回	人体のしくみ （各器官系の働きについて）			
	第 4 回	運動器系の構造と働き （骨格系・筋肉系・関節の働きについて）			
	第 5 回	神経系の構造と働き （脳の構造・機能 右脳左脳の働きについて）			
	第 6 回	体力・運動能力の定義 （種類・構造・基本的な体力要素について）			
	第 7 回	健康の定義・健康の考え方 （食事・運動・休養との関係について）			
	第 8 回	生活習慣病と健康 （体型・体格の 3 要素 標準体重・BMI について）			
	第 9 回				
	第 10 回				
	第 11 回				
	第 12 回				
	第 13 回				
	第 14 回				
	第 15 回				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 授業で扱うテーマに関連する記事（雑誌・新聞等）をスクラップする。			復 習：	
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（50％）、レポート（10％）、課題（10％）、授業態度（30％）				
教 科 書	適宜プリントを配布する。				
参 考 文 献					
注 意 事 項	授業開始は11月からである。 授業中の飲食禁止。 授業中の携帯電話の使用禁止。 ※欠席回数が全授業の3分の1を超えた場合は評価の対象外となる。				

授 業 科 目	心 理 学 入 門	単位数	2	担当教員	村野 香織
講 義 の 内 容	心理学は、人のこころや行動を客観的・科学的にとらえようとする学問です。本講義では、心理学の基礎的な知識や方法論を学び、人のこころと行動についての理解を深めることを目的とします。本講義をきっかけに、日常生活体験を心理学と結びつけて、自己および他者への理解をより深めることを期待します。				
到 達 目 標	① 心理学の基本的概念や理論について習得すること ② 人のこころと行動について理解を深めること ③ 日常生活に心理学の知識を活かせること				
授 業 計 画	第 1 回	ガイダンス 心理学とは			
	第 2 回	感覚・知覚の心理			
	第 3 回	記憶の心理（１）			
	第 4 回	記憶の心理（２）			
	第 5 回	パーソナリティの心理（１）			
	第 6 回	パーソナリティの心理（２）			
	第 7 回	健康の心理（１）			
	第 8 回	健康の心理（２）			
	第 9 回	社会・集団の心理（１）			
	第 10 回	社会・集団の心理（２）			
	第 11 回	心理臨床（１）			
	第 12 回	心理臨床（２）			
	第 13 回	人間理解（１）			
	第 14 回	人間理解（２）			
	第 15 回	まとめ			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習：	授業ノートおよび配布資料を見直し、講義で興味を持った内容を、自ら調べ、さらに理解を深めることを期待します。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（７０％）、レポート（２０％）、授業態度（１０％）				
教 科 書	特になし。 各講義時間に関連資料を配布する。				
参 考 文 献	適宜紹介する。				
注 意 事 項	通常の講義形式で行います。 学生の皆さんの理解度に応じて、適宜レポート課題を設定します。 授業ごとに、講義を聴いて考えたこと・感想を書いてもらいます。				

授 業 科 目	マ ン ガ ・ イ ラ ス ト 表 現		単位数	2	担当教員	飯 田 耕 一 郎
講 義 の 内 容	マンガは絵と物語の両方を合わせた世界なので、 デッサン、キャラクター、背景、パースなどの基本を複合的に進めていく形になると思います。 イラストもまた物語性を理解することによって創作の幅が広がるものと考えて大きな区別はありません。					
到 達 目 標	人物の顔と表情が描き分けられるようにし、いろんなキャラを描けるようになること。 人物の全身は難しいですが、チビキャラでバランスを理解し描けるようになっていくように進めます。 合わせて背景も描けるためのパースの基礎の理解を深めます。					
授 業 計 画	第 1 回	【○と□を描こう】円と四角をちゃんと描けることが基本の基本。				
	第 2 回	【いろんな表情を描こう】表情が変化するパターンを学ぶ。				
	第 3 回	【喜怒哀楽の表情を描こう】感情表現を理解する。				
	第 4 回	【二頭身キャラを描こう】シンプルなマスコットキャラを描く。				
	第 5 回	【二頭身キャラのアクション】マスコットキャラにアクションを持たせる。				
	第 6 回	【三頭身キャラを描こう】ちびキャラを描く。				
	第 7 回	【三頭身キャラのアクション】ちびキャラにアクションを持たせる。				
	第 8 回	【一点透視図法を学ぼう】パースを理解する。				
	第 9 回	【二点透視図法と三点透視図法を学ぼう】パースを理解するの二回目。				
	第 10 回	【顔の角度を変えて描いてみよう】いろんな角度で顔を描けるようになる。				
	第 11 回	【倒れた瓶を模写してみよう】模写の仕方を学ぶ。				
	第 12 回	【シワの描き方を学ぼう】服などのシワの理屈を学ぶ。				
	第 13 回	【六頭身キャラを描いてみよう】シリアスサイズのキャラを学ぶ。				
	第 14 回	【全身で感情表現してみよう】感情とアクションを全身で描く。				
	第 15 回	【色を塗ってみよう】カラー表現を学ぶ。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： シンプルな課題は自宅で反復練習することによってより上達していきます。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（３０％）、作品（２０％）、実技（３０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	特になし。					
参 考 文 献	特になし。					
注 意 事 項	成績の優劣は技術力の高さではありません。 発想力、オリジナリティ、意欲的に取り組む姿勢によって作品は評価に値するものになります。 課題をこなせばよいのではなく、課題の目的を理解して自分の表現力を高めてください。					

授 業 科 目	日 本 語 表 現		単位数	2	担当教員	宮木 孝子
講 義 の 内 容	社会生活・学生生活に必要な、文章を書くための基礎知識の習得と練習を行う。言葉を意識して使うことの大切さと必要性を学ぶ。よい人間関係をつくるのも言葉やその表現によるところは大きいので、是非、努力し学んでほしい。 (はがき・手紙・履歴書・レポート・小論文・日誌など)					
到 達 目 標	・時と場所、季節時間、他者との社会的関係などを、必要に応じて選択、判断し、良いコミュニケーションができるようになること。 ・日本語の組み立てを理解し、表現できるようになること。					
授 業 計 画	第 1 回	授業の進め方・文章の種類と目的 作文「私の自画像」400 字				
	第 2 回	現代文練習	文章の構成の基本	口語文法の復習 1		
	第 3 回	現代文練習	はがき・手紙の書き方	・挨拶文・依頼文	口語文法の復習 2	
	第 4 回	現代文練習	はがき・手紙の書き方 2	・御礼の葉書・御礼の手紙	口語文法の復習 3	
	第 5 回	現代文練習	敬語トレーニング	(1) 敬語の種類	口語文法の復習 4	
	第 6 回	現代文練習	敬語トレーニング	(2) テスト		
	第 7 回	敬語を使う	書く・話す順序	・メモをとる		
	第 8 回	履歴書の書き方	自分を知るシートを作成	自己紹介 200 字		
	第 9 回	「である体」と「ます体」	実用的文章の種類	記録文の作成		
	第 10 回	文章の要旨をとらえる	1	接続詞と指示語		
	第 11 回	文章の要旨をとらえる	2	文章構成と段落構成		
	第 12 回	「である体」と「ます体」	レポートを書く	1	テーマの選択	
	第 13 回	「である体」と「ます体」	レポートを書く	2	文章構成	
	第 14 回	「である体」と「ます体」	レポートを書く	3	引用表記の方法	
	第 15 回	レポートの文章の推敲				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 問題集や先に配布したプリントは読んでおくこと。課題をかならず行う。			復習：	テキストやノート、課題を振り返り、疑問点を確認する。訂正のあった課題は、書き直す。	
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施 (○) する／ () しない 筆記試験 (70%)、レポート (20%)、課題 (10%) ※授業態度は、悪い場合に減点します。					
教 科 書	『大学生のための日本語表現スキルアップ篇』(橋本修・阿部朋世・福島健伸、三省堂)					
参 考 文 献	授業にて紹介する。					
注 意 事 項	・国語辞典を持ってくること。 ・私語は禁止です。質問や疑問は直接、確かめること。 ・飲食は禁止、持ち込みもできません。					

授 業 科 目	生 命 と 科 学		単位数	2	担当教員	星 野 治
講 義 の 内 容	この授業では、「生命」や「科学」をテーマとするいろいろなドキュメンタリーや文芸作品（科学者が著した文章など）を、できるだけたくさん鑑賞します。そのことを通して、「いのち」を守り育てることの意義や、「いのち」を守るための「わざ」のありかたに関する、各自なりの考察を深めます。					
到 達 目 標	・ 将来的には、倫理的な意味合いでの「生命」や「科学」を考察できるようになることが目標です。 ・ この授業は、上記の目標に到達するための、第一歩という位置づけです。 ・ 第一級の科学者の手になる文章を今のうちから読み慣れておくことは、他の授業におけるレポート作成や、卒業研究遂行の際の一助となるはずです。					
授 業 計 画	第 1 回	ガイダンス 授業全体の流れについての説明。				
	第 2 回	「生命」や「科学」を学ぶ第一歩 科学雑誌『Newton』を読む。				
	第 3 回	災害と科学 「生命」を守るための「科学」。				
	第 4 回	自然災害に関する様々な話題 固体地球科学的な視点からみた「生命」。				
	第 5 回	自然災害に関する様々な話題 流体地球科学的な視点からみた「生命」。				
	第 6 回	人為災害に関する様々な話題 火災、事故などに翻弄される「生命」。				
	第 7 回	人為災害に関する様々な話題 戦争、テロ行為などに翻弄される「生命」。				
	第 8 回	保育者の視点からみた災害 過去の自然災害における被災例。				
	第 9 回	保育者の視点からみた防災 イマジネーションツール『目黒巻（めぐろまき）』の紹介。				
	第 10 回	ネットサーフィン 防災情報の最前線を垣間見る。				
	第 11 回	保育者のための文芸作品紹介 “加古里子（かこさとし）四部作”（『海』『地球』『宇宙』『人間』）の鑑賞。				
	第 12 回	保育者のための文芸作品紹介 「生命」を扱った絵本の鑑賞。				
	第 13 回	保育者のための文芸作品紹介 「科学」を扱った絵本の鑑賞。				
	第 14 回	保育者のための文芸作品紹介 災害を扱った絵本の鑑賞。				
	第 15 回	総括 授業内容全体のまとめを行います。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 予習を必要とする事柄については、担当教員からの指示に従ってください。特に、授業後半の“文芸作品紹介”では、レジュメ作成などの事前作業が必要です。			復 習： 復習を必要とする事柄については、担当教員が指示します。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（８０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	・ この授業では、毎回何らかの形で、レポート提出が求められます。 ・ この種の授業では、ややもすれば映像作品（映画、コミック、その他）に偏りがちになります。そのため、この授業では、できる限り“文字を通した情報理解”を意識するように心がけます。 ・ 災害や防災に関する話題には、精神的にかなり辛くて深刻な内容のものが、少なくありません。その点を十分に考慮したうえで、履修してください。					

授 業 科 目	教 育 原 理	単位数	2	担当教員	越川 葉子
講 義 の 内 容	子どもは生まれた直後から家族をはじめとする様々な他者（社会）との出会いを経験する。本講義では、教育の思想・歴史・制度の基礎的な理解と、受講生が子どもと関わるうえで必要な視点を獲得することを目的とする。講義の後半では、今日的な教育の課題へと視野を広げ、子どもをとりまく現状について理解を深める。				
到 達 目 標	・ 幼児教育の原理を理解する。 ・ 受講者がみにつけてきた教育観や子ども観を再検討する。 ・ 幼児教育の今日的な課題に目を向け、自分なりの見解を述べる。				
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション—講義の受け方・進め方について—			
	第 2 回	教育とは何か—ヒトから人へ—			
	第 3 回	教育の原理①—言語獲得以前の子どもと大人の関わり—			
	第 4 回	教育の原理②—生活形式の共有—			
	第 5 回	教育の思想①—「子ども」の誕生—			
	第 6 回	教育の思想②—幼児教育の思想—			
	第 7 回	教育の歴史①—近代学校教育制度の成立と変遷—			
	第 8 回	教育の歴史②—幼児教育の成立と変遷—			
	第 9 回	教育の制度①—教育法のしくみ—			
	第 10 回	教育の制度②—保育の制度—			
	第 11 回	社会の中の子ども①—保育者の子どもとの関わり方を考える—			
	第 12 回	社会の中の子ども②—学校的社会化—			
	第 13 回	社会の中の子ども③—幼小接続を考える—			
	第 14 回	幼児教育の今日的な課題①—発達障害とは何か—			
	第 15 回	幼児教育の今日的な課題②—ニューカマーをめぐる課題—			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 特になし			復習：	講義で配布したプリントを再読し、疑問点をまとめておくこと。 講義で紹介した資料や参考文献を手にとり、自分の目で再読すること。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、課題（20％）、授業態度（20％）				
教 科 書	特になし				
参 考 文 献	『教育原理』（広田照幸・塩崎美穂・樹村房） 『人間はどこまで動物か』（アドルフ・ポルトマン、岩波新書）				
注 意 事 項	・ 授業中の私語や不要物の持込は認めない。 ・ 授業毎にプリントを配布する。配布プリントはファイルにまとめて保管しておくこと。 ・ 授業内に受講生に意見を求める予定である。受講生が積極的に質問・意見を表明することを期待する。				

授 業 科 目	保 育 原 理 I		単位数	2	担当教員	土屋 由
講 義 の 内 容	保育の制度や現状を理解し、「保育所保育指針」・「幼稚園教育要領」を踏まえて、生活や遊びを中心とした保育内容、子ども理解や保育の計画といった保育の基本的な考え方を学ぶ。					
到 達 目 標	子どもの生活や遊びにかかわる保育者として、必要な知識や基本的な考え方を身につけることを目標とする。保育の場における子どもの育ちだけではなく、そこにかかわる保護者、保育者にとっての保育の意義も含めて理解してもらいたい。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション				
	第 2 回	保育の場 子ども・保護者・保育者、それぞれが育つ場所				
	第 3 回	保育の制度と現状				
	第 4 回	幼稚園の一日、保育園の一日				
	第 5 回	保育の基本的な考え方①子どもの主体性を尊重する				
	第 6 回	②遊びを中心とする保育				
	第 7 回	③環境を通しての育ち				
	第 8 回	④子ども一人ひとりの発達過程を捉える				
	第 9 回	⑤個と集団				
	第 10 回	⑥保育課程・教育課程と指導計画				
	第 11 回	子どもと自然				
	第 12 回	子どもと文化				
	第 13 回	保育における子ども理解				
	第 14 回	保育者に求められるもの				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 次回の授業の範囲について、教科書に目を通すこと。			復 習： 授業で扱った内容について、教科書や配布プリントに記載されている情報についても、ノートに整理して記入しておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、レポート（20％）、課題（10％）					
教 科 書	『よくわかる保育原理』（森上史朗・大豆生田啓友、ミネルヴァ書房）					
参 考 文 献	参考文献は、授業において紹介する。					
注 意 事 項	他の受講生の意見や考えを聞き、自分の考えと相対化することで、学びを深めてほしい。					

授 業 科 目	教 育 心 理 学		単位数	2	担当教員	村野 香織
講 義 の 内 容	教育心理学は、子どもの心理や発達特性を実証的に解明し、教育を効果的に行うための方法を見つけ出そうとする学問です。本講義では、教育心理学の基本的概念や理論について学び、子どものこころや行動を心理学の立場から分析解釈し、保育現場、教育現場、家庭における保育・教育の望ましいあり方について考えていきます。					
到 達 目 標	① 教育心理学の基本的概念や理論について習得すること ② 子どもの心身の発達および学習の過程について理解すること ③ 教育の諸問題を解決するために必要なものの見方・考え方を養うこと					
授 業 計 画	第 1 回	ガイダンス 教育心理学とは				
	第 2 回	発達（１）				
	第 3 回	発達（２）				
	第 4 回	発達（３）				
	第 5 回	学習（１）				
	第 6 回	学習（２）				
	第 7 回	動機づけ（１）				
	第 8 回	動機づけ（２）				
	第 9 回	教育評価（１）				
	第 10 回	教育評価（２）				
	第 11 回	クラス運営（１）				
	第 12 回	クラス運営（２）				
	第 13 回	子ども理解とカウンセリングマインド（１）				
	第 14 回	子ども理解とカウンセリングマインド（２）				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習：		授業ノートおよび配布資料を見直し、講義で興味を持った内容を、自ら調べ、さらに理解を深めることを期待します。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（７０％）、レポート（２０％）、授業態度（１０％）					
教 科 書	特になし。 各講義時間に関連資料を配布する。					
参 考 文 献	適宜紹介する。					
注 意 事 項	通常の講義形式で行います。 学生の皆さんの理解度に応じて、適宜レポート課題を設定します。 授業ごとに、講義を聴いて考えたこと・感想を書いてもらいます。					

授 業 科 目	発 達 心 理 学		単位数	2	担当教員	伊藤 明芳
講 義 の 内 容	保育者が子ども（保護者）の問題や課題に向き合う時、人の心身の発達の基本的、標準的な様相やその概要等を学んでおくことは有益である。それらが、保育者として、さまざまな子どもの問題を考えていく際の大切な基礎となる。 本講義では、発達心理学の必要な基礎的知識の習得と将来現場で活かせる基本的な実践能力の育成を図ることを目的とする。					
到 達 目 標	発達心理学の基礎的知識を習得し、それらを使って、子どもや大人の心の問題理解にどのように活かせるのか考えられるようになること。					
授 業 計 画	第 1 回	イントロダクション [発達心理学を学ぶ意義など]				
	第 2 回	発達を理解するための基礎① [発達を考える]				
	第 3 回	発達を理解するための基礎② [研究方法、子どもの心身発達の基本原理等]				
	第 4 回	発達を理解するための基礎③ [発達の理論とは何か]				
	第 5 回	知的側面の発達① [基本理論の概要]				
	第 6 回	知的側面の発達② [理論の活用を考える]				
	第 7 回	情緒的発達① [情緒的発達の過程]				
	第 8 回	情緒的発達② [基本理論の概要]				
	第 9 回	情緒的発達③ [理論の特徴]				
	第 10 回	情緒的発達④ [理論の活用を考える]				
	第 11 回	発達障害① [発達障害とは何か]				
	第 12 回	発達障害② [発達障害の種類]				
	第 13 回	発達障害③ [理解と対応を考える]				
	第 14 回	まとめ				
	第 15 回	今後へのアドバイス				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 毎回、学んだ知識を正確に習得できるようにすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、レポート（40％）					
教 科 書	特に指定しない					
参 考 文 献	講義の際に随時紹介					
注 意 事 項	講義を中心におこなう。実際の事例などをあげ、受講生にわかりやすい内容を心がけたい。その他、事例研究やビデオ視聴等で理解を深め、それを保育の実践に活かすことを考える。 受講者には自ら学び考える意欲をもって授業に参加する態度が求められる。					

授 業 科 目	社 会 福 祉		単位数	2	担当教員	秋山 展子
講 義 の 内 容	本講義では、現代社会における福祉制度の意義や理念、福祉政策との関係、福祉政策におけるニーズと資源、福祉政策の構成要素やその課題などについて学ぶことを目的としている。					
到 達 目 標	・ 社会の変化を学ぶ。 ・ 福祉政策を理解する。 ・ 現代における福祉課題を理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	社会福祉の新たな展開				
	第 2 回	福祉政策理解の枠組み				
	第 3 回	社会の変化と福祉				
	第 4 回	福祉と福祉政策				
	第 5 回	福祉の思想と哲学				
	第 6 回	社会政策と福祉政策				
	第 7 回	福祉政策の発展過程				
	第 8 回	少子高齢化時代の福祉政策				
	第 9 回	福祉政策における必要と資源				
	第 10 回	福祉政策の理念・主体・手法				
	第 11 回	福祉政策の関連領域				
	第 12 回	社会福祉制度の体系				
	第 13 回	福祉サービスの提供				
	第 14 回	福祉政策の国際比較				
	第 15 回	これまでのまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 配布した資料を再読し、毎回の復習を各自で行い、理解を深めること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（60％）、課題（10％）、授業態度（30％） ※講義の中で必要に応じて小テストをおこなう。					
教 科 書	授業でプリント配布					
参 考 文 献						
注 意 事 項	提出物の期限は厳守すること。					

授 業 科 目	児 童 家 庭 福 祉	単位数	2	担当教員	秋山 展子
講 義 の 内 容	現代社会における児童の成長・発達、生活実態や児童福祉の背景、児童福祉の理念や意義について学ぶ。				
到 達 目 標	・ 児童福祉関係法とサービス体系の供給を理解する。 ・ 専門職のあり方や児童福祉と環境との関わりの問題を理解する。 ・ 相談援助活動や家族支援のための施策等について理解する。				
授 業 計 画	第 1 回	現代社会と子ども家庭			
	第 2 回	子どもの育ち、子育てのニーズ			
	第 3 回	子ども家庭福祉とは何か			
	第 4 回	子どもと家庭の権利保障			
	第 5 回	子ども家庭福祉にかかわる法制度			
	第 6 回	子ども家庭福祉の実施体制			
	第 7 回	子ども家庭福祉の専門職			
	第 8 回	子ども家庭にかかわる福祉・保健			
	第 9 回	児童健全育成			
	第 10 回	ひとり親家庭の福祉			
	第 11 回	児童虐待対策			
	第 12 回	非行児童・情緒障害児への支援			
	第 13 回	子どもと家庭にかかわる女性福祉			
	第 14 回	子ども家庭への援助活動			
	第 15 回	これまでのまとめ			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習：	配布した資料や教科書を再読し、毎回の復習を各自で行い、理解を深めること。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（６０％）、課題（１０％）、授業態度（３０％） ※講義の中で必要に応じて小テストをおこなう。				
教 科 書	『保育者養成シリーズ 新版・児童家庭福祉論』（山崎順子・高玉和子・和田上貴昭編著、一芸社）				
参 考 文 献					
注 意 事 項	提出物の期限は厳守すること。				

授 業 科 目	音 楽 I（基 礎 音 楽）		単位数	2	担当教員	大輪 公彦
講 義 の 内 容	幼児教育者として必要な音楽の基礎知識を学ぶと共に、音楽教育技術を身につけることを目的とする。					
到 達 目 標	ソルフェージュ（音感教育）をベースに、唱歌・童謡における基本的な音楽要素を下記の訓練を通して身につけ、かつピアノ演奏及び歌唱法の上達へと結び付ける。 1. リズム唱、リズム叩き、リズム書き取り 2. 旋律歌唱、旋律書き取り 3. 和音書き取り					
授 業 計 画	第 1 回	楽典 （譜表）		第 16 回	主要 3 和音と調音	
	第 2 回	（音名・階名）		第 17 回	全音符・休符、2 分音符・休符を含む書き取り	
	第 3 回	（楽語・音程・調について）		第 18 回	4 分音符・休符、8 分音符・休符を含む書き取り	
	第 4 回	（音・休符の種類と和音について）		第 19 回	16 分音符・休符、付点音符を含む書き取り	
	第 5 回	リズムの基本(全音符・休符、2 分音符・休符)		第 20 回	3 連符及び他の連符を含む書き取り	
	第 6 回	リズムの基本(4 分音符・休符、8 分音符・休符)		第 21 回	タイを含むリズムの書き取り	
	第 7 回	リズムの基本(16 分音符・休符、付点音符を含む)		第 22 回	タイを含む旋律の書き取り	
	第 8 回	リズムの基本(3 連符及び他の連符)		第 23 回	異なった複数のリズムをもつ旋律の書き取り	
	第 9 回	タイを含むリズム		第 24 回	主要 3 和音の書き取り	
	第 10 回	異なった複数のリズム		第 25 回	主要 3 和音(転回形)書き取り	
	第 11 回	リズムカノン唱		第 26 回	唱歌・童謡中の基本旋律(第 5 回、第 6 回)の書き取り	
	第 12 回	リズムカノン叩き		第 27 回	唱歌・童謡中の基本旋律(第 7 回、第 8 回)の書き取り	
	第 13 回	リズム諸楽器の解説		第 28 回	唱歌・童謡中の基本旋律(第 9 回、第 10 回)の書き取り	
	第 14 回	リズム諸楽器の実践		第 29 回	唱歌・童謡中の基本旋律(第 5 回～第 10 回)の書き取り	
	第 15 回	まとめ		第 30 回	まとめ	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： リズムの名称とその意味及び音名（ラテン・伊・仏によるドレミ読み、日本語読み、英米語読み）を確実に覚える。			復習： 学習したリズムを一定の拍子に基づいて叩く練習を行う。 ピアノ練習曲テキストの両手の旋律のリズムのみを叩く練習を行う。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（２０％）、課題（２０％）、実技（３０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	『新・幼児の音楽教育』（井口太、朝日出版社）					
参 考 文 献	『実用 こどものうた』（田口雅夫・高崎和子、カワイ出版） 『幼稚園教諭・保育士を目指す人のための新しいピアノ教則本』（田口・高崎・大輪編、カワイ出版）					
注 意 事 項	講義内容を理解出来ないまま終わらせたくありません、質問を歓迎します（授業時間外でもかまいません）。尚、授業中の私語・飲食は厳しく注意する。机の上に飲食物を置かないこと。これらの注意に従わない者は学生証を提示の上、退室を命ずることがある。 授業内でレポート・小テスト等を実施する予定です。 各自五線紙付きノートを用意すること。					

授 業 科 目	総 合 演 習 I			単位数	2	担当教員	染谷・宮木・橋本		
講 義 の 内 容	少子社会が進む中様々な対策がなされているが、子どもが安心して育つ環境が十分に整えられているとはいえない。この演習では、3グループに分かれて子どもを取り巻く実状を様々な視点から捉え、理解し、視野を広げるとともに、保育者として適切な対応ができる保育力を養う。また、次年度に開講される総合演習Ⅱ（卒業研究）のテーマや作業方針を決めるためのヒントを習得する。								
到 達 目 標	1. 子どもの造形活動について主体的に学び理解を深める 2. 子どもの感性・言語能力に影響を与える児童文学についての基本知識を学び実践に役立てる 3. 子どもの健康・食生活の現状から、保育者として子どもに必要な食環境について理解する								
授 業 計 画	第 1 週	合同授業 本演習のねらい・進め方などに関する説明				第 16 週	(宮木)	(橋本)	(染谷)
	第 2 週	(染谷) 自然と子どもの造形表現①	(宮木) 児童文学の世界①	(橋本) 子どもの食生活の現状	第 17 週	第 2 週 ～第 9 週 と同じ	第 2 週 ～第 9 週 と同じ	第 2 週 ～第 9 週 と同じ	
	第 3 週	自然と子どもの造形表現②	児童文学の世界②	健康について考える	第 18 週				
	第 4 週	造形表現の発達①	児童文学を考える	文献調査と論文の読み方	第 19 週				合同授業
	第 5 週	造形表現の発達②	レジュメ作成①	文献調査①	第 20 週	(橋本) 第 2 週 ～第 9 週 と同じ	(染谷) 第 2 週 ～第 9 週 と同じ	(宮木) 第 2 週 ～第 9 週 と同じ	
	第 6 週	造形表現の発達③	レジュメ作成②	文献調査①	第 21 週				
	第 7 週	造形教材研究①	研究発表①	研究発表準備	第 22 週				
	第 8 週	造形教材研究②	研究発表②	研究発表①	第 23 週				
	第 9 週	造形教材研究発表	研究発表③	研究発表② 演習まとめ	第 24 週				
	第 10 週	合同授業							第 25 週
	第 11 週	(宮木) 第 2 週 ～第 9 週 と同じ	(橋本) 第 2 週 ～第 9 週 と同じ	(染谷) 第 2 週 ～第 9 週 と同じ	第 26 週				合同授業：総合演習Ⅱ(卒業研究)への準備、その他
	第 12 週				第 27 週				
	第 13 週				第 28 週				
	第 14 週				第 29 週				
	第 15 週				第 30 週	合同授業 全体のまとめ			
	授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習および復習： ラウンド毎に研究発表を行う。授業時間内で準備できない場合、教員の指示にしたがい期日までに課題を済ませておくこと							
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（４０％）、発表（４０％）、授業態度（２０％）								
教 科 書	必要に応じて随時紹介する								
参 考 文 献	必要に応じて随時紹介する								
注 意 事 項	グループ毎の演習 8 回を 1 ラウンドとするオムニバス形式が中心となる。各ラウンドの担当教員の指導にしたがうこと。								

授 業 科 目	総 合 演 習 Ⅱ （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	染谷 哲夫
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成する。講義は、少人数によるゼミナール形式で行われる。また、論文提出後には発表会が行われる。美術・図画工作・造形に関する分野についての研究であり、主なテーマとしては、『絵本や紙芝居の研究・制作』『手作りおもちゃの研究・制作』『教材研究について』『子どもの造形表現活動について』『造形教育の歴史』等である。					
到 達 目 標	各自のテーマに基づいて主体的に研究論文をまとめる。このことを通じ保育者として必要な専門的知識をさらに深める。					
授 業 計 画	第 1 回	授業の進め方と年間計画			第 16 回	後期授業の進め方
	第 2 回	研究テーマの選定①			第 17 回	研究・制作⑥
	第 3 回	研究テーマの選定②			第 18 回	研究・制作⑦
	第 4 回	研究テーマの選定③			第 19 回	研究・制作⑧
	第 5 回	研究テーマの決定・計画			第 20 回	研究・制作⑨
	第 6 回	文献・資料収集①			第 21 回	研究・制作⑩
	第 7 回	文献・資料収集②			第 22 回	研究・制作⑪
	第 8 回	文献・資料収集③			第 23 回	研究・制作⑫
	第 9 回	研究の視点・構成①			第 24 回	研究成果 修正とまとめ①
	第 10 回	研究の視点・構成②			第 25 回	研究成果 修正とまとめ②
	第 11 回	研究・制作①（中間発表）			第 26 回	研究成果 修正とまとめ③
	第 12 回	研究・制作②			第 27 回	研究成果 修正とまとめ④
	第 13 回	研究・制作③			第 28 回	研究成果 発表①
	第 14 回	研究・制作④			第 29 回	研究成果 発表②
	第 15 回	研究・制作⑤（前期まとめ）			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 問題意識を持ちながら積極的に取り組む			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（６０％）、発表（１０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書						
参 考 文 献	必要に応じて案内する。					
注 意 事 項	自分の研究テーマを明確にし、３年間のまとめとして充実した研究となるよう期待している。					

授 業 科 目	総 合 演 習 Ⅱ （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	宮 木 孝 子
講 義 の 内 容	各人が自分の研究テーマを明確にして、研究レポートに完成します。小説・童話の創作を卒業研究にしようと考えている学生もほぼ、同じ授業計画で進めます。 学生毎に研究分野や対象作家が違いますので、基本的には個人指導となります。 作家研究・作品研究、児童文学・文化研究、児童小説創作、漫画研究・創作、絵本研究・創作など。					
到 達 目 標	・計画を立て実行し、目標達成を果たす。 ・自分の思いや考えを口頭発表や文章を通して、できるようになる。 ・児童文学を深く理解するため、名作とよばれる作品に数多く親しむ。					
授 業 計 画	第 1 回	年間授業のすすめ方と各自の課題発表			第 16 回	後期の授業の進め方・研究・制作計画の見直し
	第 2 回	児童文学の歴史 英米の児童文学 1			第 17 回	昔話いろいろ
	第 3 回	作品を読む			第 18 回	ファンタジーの時空 1
	第 4 回	児童文学の歴史 英米の児童文学 2			第 19 回	ファンタジーの時空 2
	第 5 回	研究計画の作成と課題の設定			第 20 回	ファンタジーの時空 3
	第 6 回	児童文学の歴史 英米の児童文学 3			第 21 回	リアリズム 1
	第 7 回	作品を読む			第 22 回	リアリズム 2
	第 8 回	児童文学の歴史 日本の児童文学 1			第 23 回	冒険物語のいろいろ
	第 9 回	作品を読む			第 24 回	歴史物語のいろいろ
	第 10 回	児童文学の歴史 日本の児童文学 2			第 25 回	ノンフィクション
	第 11 回	作品を読む			第 26 回	こどもの詩 わべうたから童謡へ
	第 12 回	児童文学の歴史 日本の児童文学 3			第 27 回	童謡 2
	第 13 回	創作童話のポイント			第 28 回	絵本を読む 1
	第 14 回	創作童話を書く			第 29 回	絵本を読む 2
	第 15 回	創作童話の発表とディスカッション			第 30 回	児童文学の広がり 漫画・ゲームの世界
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 計画をしっかりと、実行する。テキストの指定された範囲をしっかりと読み、具体的な質問を毎回、用意する。			復 習： 計画を定期的に見直し、改善策を考える。 授業の単元ごとの課題と自分の目指す課題とを関連づけ、考える。考えた結果を記録する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート、または作品（70％）、発表（10％）、授業態度（10％） ＊研究レポート提出と作品提出のどちらかで、年間の成果をまとめる。 ＊授業態度は、年間を通しての研究や制作態度を評価するものである。					
教 科 書	『児童文学の教科書』（川端有子、多摩川大学出版部）					
参 考 文 献	授業で適宜紹介する。					
注 意 事 項	・自分の課題に真剣に取り組む姿勢がないと、結果はできません。講義をしっかりと聴き、ノートをとりましょう。 ・講義を進めながら、研究の手順を教授します。 ・自分のペースを考え、研究や創作をしっかりと完成させること。					

授 業 科 目	総 合 演 習 Ⅱ （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	橋 本 洋 子
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成する。講義は、少人数によるゼミナール形式で行われる。また、論文提出後には発表会が行われる。このことを通じ、保育者として必要な専門的知識をさらに深める。研究テーマは食や健康など日常生活全般にわたる。					
到 達 目 標	演習性一人ひとりが、 ①子どもを取り巻く生活環境を理解する ②研究テーマをみつけ様々な角度から情報を収集し検証する力を身につける ③調査結果等から疑問を解決し、まとめる力を身につける ことを主たる目標とする。					
授 業 計 画	第 1 回	講義の方針と進め方について			第 16 回	論文の執筆・フィールドワーク
	第 2 回	各学生により研究テーマの選定・計画①			第 17 回	論文の執筆・フィールドワーク
	第 3 回	各学生により研究テーマの選定・計画②			第 18 回	論文の執筆・フィールドワーク
	第 4 回	各学生により研究テーマの選定・計画③			第 19 回	論文の執筆・フィールドワーク
	第 5 回	文献・資料収集、観察①			第 20 回	論文の執筆・データ解析
	第 6 回	文献・資料収集、観察②			第 21 回	論文の執筆・データ解析
	第 7 回	文献・資料収集、観察③			第 22 回	論文の執筆・データ解析
	第 8 回	先行研究の発表①			第 23 回	論文の執筆・データ解析
	第 9 回	先行研究の発表②			第 24 回	論文の執筆・データ解析
	第 10 回	先行研究の発表③			第 25 回	論文の修正①
	第 11 回	研究内容の方向づけ①			第 26 回	論文の修正②
	第 12 回	研究内容の方向づけ②			第 27 回	論文の修正③
	第 13 回	論文執筆の説明			第 28 回	論文発表
	第 14 回	論文内容の検討①			第 29 回	論文発表
	第 15 回	論文内容の検討②			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 配布資料および収集した論文等は次回の授業までに予め目を通しておく。				復習：	
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 論文（70％）、発表（20％）、授業態度（10％）					
教 科 書	※必要に応じて資料を配布する					
参 考 文 献	※必要に応じて随時紹介する					
注 意 事 項	保育者としての視点から、「食」や「健康」をはじめとした自然科学の分野においてテーマをもち、文献研究や観察研究をすすめ、論文としてまとめていく。演習生それぞれが自分の研究テーマに向かって積極的に取り組むことを期待する。先行論文や白書などを参考に情報を収集し、綿密な計画を立て、取り組んでほしい。					

授 業 科 目	総 合 演 習 Ⅱ （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	加賀谷 崇文
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成する。講義は、少人数によるゼミナール形式で行われる。また、論文提出後には発表会が行われる。このことを通じ、保育者として必要な専門的知識をさらに深める。 研究テーマとしては、臨床心理学に関連する「母子関係」「保育者のメンタルケア」「子育て支援」などを中心とする。					
到 達 目 標	1. 各自の興味に沿った研究テーマを見出すこと。 2. 保育に関する自分なりの視点を持つこと。 自分自身の考えを言語化できるようになること。					
授 業 計 画	第 1 回	講義の方針と年間計画			第 16 回	論文の執筆①
	第 2 回	各学生によるテーマの選定①			第 17 回	論文の執筆②
	第 3 回	各学生によるテーマの選定②			第 18 回	論文の執筆③
	第 4 回	各学生によるテーマの選定③			第 19 回	論文の執筆④
	第 5 回	文献の収集①			第 20 回	論文の執筆⑤
	第 6 回	文献の収集②			第 21 回	論文の執筆⑥
	第 7 回	文献の収集③			第 22 回	論文の執筆⑦
	第 8 回	先行研究の発表①			第 23 回	論文の執筆⑧
	第 9 回	先行研究の発表②			第 24 回	論文の執筆⑨
	第 10 回	先行研究の発表③			第 25 回	論文の執筆⑩
	第 11 回	先行研究の発表④			第 26 回	論文の修正①
	第 12 回	先行研究の発表⑤			第 27 回	論文の修正②
	第 13 回	論文執筆の説明			第 28 回	論文発表会
	第 14 回	論文内容の検討①			第 29 回	論文発表会
	第 15 回	論文内容の検討②			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 学生生活の中で常に自身の興味があるテーマについて模索すること。			復習： 授業中に受けた指導を元に次回の授業までに必ず研究を進めること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（30％）、授業態度（70％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	授業中の作業は卒業研究を行うための補助的なものであり、授業以外の時間帯に研究を行うこと。					

授 業 科 目	総 合 演 習 Ⅱ （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	大輪 公尨
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成する。講義は、少人数によるゼミナール形式で行われる。また、論文提出後には発表会が行われる。このことを通じ、保育者として必要な専門的知識をさらに深める。					
到 達 目 標	1）論文口調で文章を書けるようにする。 2）要約・縮約の技術を身につける。 3）論文の書式（文献表等の書き方）を身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション			第 16 回	中間報告 洋書文献・その他の書式
	第 2 回	音楽領域研究の方法 1 洋楽			第 17 回	論文の推敲 1 論文口調は整っているか
	第 3 回	〃	2	日本音楽	第 18 回	〃 2 各題における全体の配分
	第 4 回	〃	3	その他の音楽	第 19 回	〃 3 要旨を的確に記述しているかどうか
	第 5 回	テーマの設定とグループ分け			第 20 回	最終報告 1 注釈・引用文・引用法
	第 6 回	テーマの決定			第 21 回	〃 2 参考文献の本文中の示し方
	第 7 回	テーマに関する図書研究 1 図書館の機能と検索法			第 22 回	〃 3 従来型の示し方
	第 8 回	〃	2	秋草学園図書館	第 23 回	〃 4 近年型の示し方
	第 9 回	〃	3	外部図書館	第 24 回	卒業論文指導 1 インターネット資料の表記
	第 10 回	資料検索と論文書式	1	資料検索法	第 25 回	〃 2 新聞記事の表記
	第 11 回	〃	2	検索資料の確認	第 26 回	〃 3 書名をどのように表記するか
	第 12 回	〃	3	参考引用資料の書式法	第 27 回	〃 4 引用文献一覧の作成
	第 13 回	中間報告 概要			第 28 回	〃 5 参考文献一覧の作成
	第 14 回	〃	文献について		第 29 回	卒業論文報告
	第 15 回	〃	文献の書式		第 30 回	レジュメ発表
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 新聞の特に社説欄を熟読すること。			復習： 社説の読後、その内容を要約・縮約する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（100％）					
教 科 書	毎時プリントを配布。					
参 考 文 献	『日本語練習帳』（大野晋、岩波新書）					
注 意 事 項	自分の研究テーマを明確にし、積極的に取り組むことを期待する。					

授 業 科 目	総 合 演 習 II （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	土屋 由
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成する。講義は、少人数によるゼミナール形式で行われる。また、論文提出後には発表会が行われる。このことを通じ、保育者として必要な専門的知識をさらに深める。 主な研究テーマとしては、「保育内容」「子どもの生活・遊びや文化に関すること」「育児・家族に関すること」などである。保育所・幼稚園・家庭をフィールドとする質的研究および文献研究を行い、論文としてまとめる。					
到 達 目 標	学生が自らの興味・関心に基づいて研究テーマを設定し、先行研究の検討から問題の所在を明らかにし、インタビューや文献調査などの方法により、必要な資料収集および考察を進め、卒業論文をまとめる。					
授 業 計 画	第 1 回	講義の方針と年間計画			第 16 回	調査の実施に向けた準備①
	第 2 回	フィールドワークの方法①			第 17 回	調査の実施①
	第 3 回	フィールドワークの方法②			第 18 回	調査の実施②
	第 4 回	フィールドワークの方法③			第 19 回	結果の整理①
	第 5 回	研究テーマの選定①			第 20 回	結果の整理②
	第 6 回	研究テーマについて必要な文献を集める①			第 21 回	考察を進める①
	第 7 回	研究テーマについ必要な文献を集める②			第 22 回	考察を進める②
	第 8 回	先行研究の検討①			第 23 回	考察を進める③
	第 9 回	先行研究の検討②			第 24 回	結論および今後の課題の検討①
	第 10 回	問題の所在を明らかにする①			第 25 回	結論および今後の課題の検討②
	第 11 回	問題の所在を明らかにする②			第 26 回	研究のまとめ①
	第 12 回	中間報告①			第 27 回	研究のまとめ②
	第 13 回	中間報告②			第 28 回	論文発表①
	第 14 回	子ども関連施設の見学			第 29 回	論文発表②
	第 15 回	子ども関連施設の見学			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 研究テーマ設定のための下調べをすること、文献や資料に目を通すこと、課題をこなすことが必要である。			復習： 課題についての修正や論文の執筆作業を進めること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 論文（70％）、発表（20％）、授業態度（10％）					
教 科 書	特になし					
参 考 文 献	『大学生のためのレポート・論文術』（小笠原喜康、講談社新書） 『論文の教室』（戸田山和久、NHKブックス）					
注 意 事 項	研究テーマを明確にすること、必要な文献をしっかりと読みこなすことを期待したい。					

授 業 科 目	総 合 演 習 Ⅱ （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	星野 治
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成します。 講義は少人数によるゼミナール形式で行われます。 論文提出後には、各ゼミナール単位での発表会が行われます。					
到 達 目 標	・“保育・幼児教育の専門家”としての将来の自分自身を想定して、「災害サバイバルシミュレーション」を行います。 ・上記シミュレーションの結果に対する各自の見解を、卒業研究として整理します。 ・通年の研究活動を通して、主に防災の観点から、保育者として必要な専門的知識をさらに深めます。					
授 業 計 画	第 1 回	前期ガイダンス (演習の目的、進めかたなど)		第 16 回	後期ガイダンス (研究テーマの選びかた、レポートの書きかた)	
	第 2 回	既存資料の閲覧(1) (資料の検索・選択)		第 17 回	既存資料の閲覧(13) (特定の視点からみた複数資料の検索・選択)	
	第 3 回	既存資料の閲覧(2) (資料の内容の読解)		第 18 回	既存資料の閲覧(14) (複数資料の総合評価)	
	第 4 回	既存資料の閲覧(3) (資料の内容に対する解釈考察)		第 19 回	既存資料の閲覧(15) (複数資料の総合評価の文章化)	
	第 5 回	既存資料の閲覧(4) (資料に関するレポートの作成)		第 20 回	既存資料の閲覧(16) (複数資料の総合評価の発表)	
	第 6 回	既存資料の閲覧(5) (資料に関するレポートの発表)		第 21 回	第 17 週～第 20 週のまとめ (これまでの内容を、箇条書きで整理する)	
	第 7 回	既存資料の閲覧(6) (資料に関するレポートの発表)		第 22 回	卒業研究(1) (研究テーマの決定)	
	第 8 回	第 2 回～第 7 回のまとめ (これまでの内容を、箇条書きで整理する)		第 23 回	卒業研究(2) (研究方針の決定)	
	第 9 回	既存資料の閲覧(7) (類似テーマを扱った複数資料の検索・選択)		第 24 回	卒業研究(3) (研究内容の文章化ほか)	
	第 10 回	既存資料の閲覧(8) (複数資料の内容の読解)		第 25 回	卒業研究(4) (研究内容の中間発表)	
	第 11 回	既存資料の閲覧(9) (複数資料の内容に対する解釈考察)		第 26 回	卒業研究(5) (研究内容の文章化ほか)	
	第 12 回	既存資料の閲覧(10) (複数資料に関するレポートの作成)		第 27 回	卒業研究(6) (レポートの完成および提出)	
	第 13 回	既存資料の閲覧(11) (複数資料に関するレポートの発表)		第 28 回	卒業研究(7) (研究内容の発表)	
	第 14 回	既存資料の閲覧(12) (複数資料に関するレポートの発表)		第 29 回	卒業研究(8) (研究内容の最終修正)	
	第 15 回	第 9 週～第 14 週のまとめ (これまでの内容を、箇条書きで整理する)		第 30 回	全体のまとめ (通年の研究成果を整理する)	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 予習に必要な事項については、担当教員がそのつど説明します。			復習： 復習に必要な事項については、担当教員がそのつど説明します。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（ 7 0 %）、発表（ 2 0 %）、授業態度（ 1 0 %）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	・シミュレーションを主体とする卒業研究の成果物は、「論文」および「作品」の両方の側面をもっています。この授業では、後者の「作品」としての側面を重視します。 ・架空の災害の状況を具体的な事件（バーチャルリアリティ）として頭の中で想起するためには、“各種災害に関する基礎知識”や“豊かなイメージング能力”に加えて、“強い精神力”が必要です。 ・入手困難な資料類（他大学付属図書館が所蔵する学術文献、出版時期の古い一般向け雑誌、その他）が必要となった場合、早めに担当教員へ相談してください。 ・提出締め切り後に担当教員から卒業研究の修正を求められた場合、その修正作業に対する評価は「発表」に含まれます。					

授 業 科 目	総 合 演 習 II （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	伊藤 明芳
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から、学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成する。講義は、少人数によるゼミナール形式で行われる。また、論文提出後には発表会が行われる。このことを通じて保育者として必要な専門的知識をさらに深める。 研究テーマ； １．発達心理学など、子どもや教育に関わる心理学分野 ２．「子育て支援」に関する分野 ３．「保育相談」、「カウンセリング」などの分野					
到 達 目 標	卒業研究(卒業論文)の作成を通して、研究の方法を修得し、学生個々が選んだテーマに関する見識を深めること。					
授 業 計 画	第 1 回	本ゼミの方針と年間計画			第 16 回	論文執筆①
	第 2 回	論文作成についての概説			第 17 回	論文執筆②
	第 3 回	各学生による研究テーマの選定①			第 18 回	論文執筆③
	第 4 回	各学生による研究テーマの選定②			第 19 回	論文執筆④
	第 5 回	各学生による研究テーマの選定③			第 20 回	論文執筆⑤
	第 6 回	各学生による研究テーマの選定④			第 21 回	論文執筆⑥
	第 7 回	文献・資料収集①			第 22 回	論文執筆⑦
	第 8 回	文献・資料収集②			第 23 回	論文執筆⑧
	第 9 回	文献・資料収集③			第 24 回	論文の修正①
	第 10 回	卒論計画の発表①			第 25 回	論文の修正②
	第 11 回	卒論計画の発表②			第 26 回	論文の修正③
	第 12 回	卒論計画の発表③			第 27 回	論文の修正④
	第 13 回	論文執筆の説明			第 28 回	論文発表会
	第 14 回	論文内容の検討①			第 29 回	論文発表会
	第 15 回	論文内容の検討②			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 研究テーマを決定し、卒業研究作成スケジュール等を理解する。			復習： 卒業研究の作成。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（70％）、発表（30％）					
教 科 書	特に指定しない					
参 考 文 献	随時紹介					
注 意 事 項	論文提出の締め切りは 12 月中旬(予定)、論文提出後、指導教員から修正を求められた場合は、その作業も発表に含み評価を行う。					

授 業 科 目	総 合 演 習 Ⅱ （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	越川 葉子
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から、学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成する。講義は少人数によるゼミナール形式で行われる。また、論文提出後には発表会が行われる。このことを通じ、保育者として必要な専門的知識をさらに深める。					
到 達 目 標	・文献講読により受講生のテーマに応じた基礎的知識を身につける。 ・資料収集やフィールドワークを取り入れながら論文執筆の作法を学ぶ。 ・「子どもをめぐる教育問題」「子どもの問題行動」「子ども観の変容」を中心としたテーマについて、自分なりの見解を説得的に論じることができるようになる。					
授 業 計 画	第 1 回	授業の進め方			第 16 回	論文の執筆
	第 2 回	文献による基礎研究①			第 17 回	論文の執筆
	第 3 回	文献による基礎研究②			第 18 回	論文の執筆
	第 4 回	研究テーマの選定および問題関心の検討①			第 19 回	論文の執筆
	第 5 回	研究テーマの選定および問題関心の検討②			第 20 回	論文の執筆
	第 6 回	参考文献の探し方・資料収集の方法			第 21 回	論文の執筆
	第 7 回	引用・注記の仕方・ネット情報の扱い方			第 22 回	論文の執筆
	第 8 回	調査方法の選定			第 23 回	論文の執筆
	第 9 回	先行研究の検討①			第 24 回	中間発表
	第 10 回	先行研究の検討②			第 25 回	論文の修正
	第 11 回	論文の構成①			第 26 回	論文の修正
	第 12 回	論文の構成②			第 27 回	論文の修正
	第 13 回	中間発表			第 28 回	論文発表①
	第 14 回	中間発表			第 29 回	論文発表①
	第 15 回	後期に向けた課題の確認			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 参考文献を通読し、疑問点や質問点を事前にまとめておくこと。 参考文献に関連する書籍・論文を調べ、講義の中で紹介できるよう準備する。			復習： 受講生内での意見交換をもとに、各自のテーマに関連する意見や文献情報を記録していくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 論文（70％）、発表（20％） #提出後、指導教員から修正を求められた場合は、その作業も発表に含み評価を行う、授業態度（10％）					
教 科 書	特になし。					
参 考 文 献	必要に応じて適宜、紹介する。					
注 意 事 項	・自分の研究テーマを明確にし、積極的に取り組むことを期待する。 ・子どもとの関わりを通して疑問に思ったことや悩んだ経験について、日ごろから記録をとっておくことを期待する。受講生が実践経験から得た感覚は、卒業研究の問題関心を見つけるうえで、貴重なヒントになるはずである。					

授 業 科 目	総 合 演 習 Ⅱ （ 卒 業 研 究 ）		単位数	2	担当教員	秋山 展子
講 義 の 内 容	保育、幼児教育に関連する幅広い分野から学生が興味あるテーマを選択し、そのテーマを専門とする専任教員の指導により卒業論文を作成する。研究テーマとしては、「地域における健全育成」、「現代における子どもの居場所」等のキーワードを中心とする。					
到 達 目 標	・ 論文の作成方法を学ぶ。 ・ 少人数のゼミナール形式で協調性を身につける ・ 論文作成を通して、保育者として必要な専門的知識を深める。					
授 業 計 画	第 1 週	授業の進め方			第 16 週	研究論文の執筆 ①
	第 2 週	文献、視聴覚教材による基礎研究 ①			第 17 週	研究論文の執筆 ②
	第 3 週	文献、視聴覚教材による基礎研究 ②			第 18 週	研究論文の執筆 ③
	第 4 週	テーマの設定 ①			第 19 週	研究論文の執筆 ④
	第 5 週	テーマの設定 ②			第 20 週	研究論文の執筆 ⑤
	第 6 週	文献、資料などの収集 ①			第 21 週	研究論文の執筆 ⑥
	第 7 週	文献、資料などの収集 ②			第 22 週	研究論文の執筆 ⑦
	第 8 週	文献、資料などの収集 ③			第 23 週	研究論文の執筆 ⑧
	第 9 週	調査、研究の方法 ①			第 24 週	中間発表
	第 10 週	調査、研究の方法 ②			第 25 週	論文の修正 ①
	第 11 週	論文の執筆について			第 26 週	論文の修正 ②
	第 12 週	中間発表 ①			第 27 週	論文の修正 ③
	第 13 週	中間発表 ②			第 28 週	論文発表 ①
	第 14 週	論文の検討 ①			第 29 週	論文発表 ②
	第 15 週	論文の検討 ②			第 30 週	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 毎週提示される課題に沿って、研究を各自で進めてくること。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 論文（70％）、発表（20％）、授業態度（10％） 提出後、指導教員から修正を求められた場合は、その作業も発表に含み評価を行う。					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	自分の研究テーマを明確にし、積極的に取り組むことを期待する。					

授 業 科 目	地 域 活 動 I		単位数	2	担当教員	越川 葉子
講 義 の 内 容	保育の専門家を目指して入学した 1 年次生が、本学科の理念の一つである「地域のニーズにあった支援をする」保育者を目指し、本学の所在地である所沢市を中心とする地域活動に参加することで、様々な人々と接し、保育者としての役割や地域の社会資源の重要性を理解する。活動後には、省察（振り返り）を行う。					
到 達 目 標	・ 児童館、障害者関係施設、教育関係機関、行政等が実施する活動に年間を通じて参加することで、各種施設の特徴や地域とのつながりを把握する。 ・ 子どもや障害児者、また彼らを取り巻く地域の社会資源への理解を深める。 ・ 子どもや障害児者、保護者への接し方を身につける。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション			第 16 回	後期講義の進め方について
	第 2 回	地域活動の進め方①			第 17 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項①
	第 3 回	地域活動の進め方②			第 18 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項②
	第 4 回	地域活動の進め方③			第 19 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項③
	第 5 回	地域活動の進め方④			第 20 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項④
	第 6 回	活動参加者からの報告①			第 21 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項⑤
	第 7 回	活動参加者からの報告②			第 22 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項⑥
	第 8 回	活動参加者からの報告③			第 23 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項⑦
	第 9 回	活動参加者からの報告④			第 24 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項⑧
	第 10 回	活動参加者からの報告⑤			第 25 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項⑨
	第 11 回	活動参加者からの報告⑥			第 26 回	冬休み中の地域活動の進め方
	第 12 回	夏休み中の地域活動の進め方①			第 27 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項⑩
	第 13 回	夏休み中の地域活動の進め方②			第 28 回	地域活動に関する諸連絡と注意事項⑪
	第 14 回	夏休み中の地域活動の進め方③			第 29 回	報告書の作成
	第 15 回	まとめ			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 活動先の歴史や特色を HP で確認をしておくこと。 活動先までの交通アクセスを調べ、自宅からの経路を把握しておくこと。			復習： 具体的な活動内容や活動で得たことがらをレポートにまとめること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（４０％）、課題（２０％）、授業態度（４０％）					
教 科 書	特になし。					
参 考 文 献	適宜紹介する。					
注 意 事 項	・ 本科目は卒業要件である。 ・ 活動は、土・日・祝日と長期休暇中に行う。 ・ 指定回数の活動への参加と、活動の振り返りのためのレポート提出が求められる。					

授 業 科 目	地 域 活 動 Ⅱ		単位数	2	担当教員	星野治・伊藤明芳
講 義 の 内 容	「地域活動Ⅱ」は「地域活動Ⅰ」での学びと実践を基礎にして第２年次に行う。具体的には、受講生自らが居住地域に活動場所を選定し、活動の依頼を行い、定まった場所(一か所)にて継続して活動を行うことを中心とする。そして、活動で得た記録、反省、気づき等をレポートに丁寧にまとめ、さらに、報告とディスカッションを通じて受講生同士で共有を図り、活動で得たものをより豊かにして全員の糧となるようにする。					
到 達 目 標	「地域のニーズにあった支援をする」保育者を目指し、ⅠとⅡ共通のねらいである①地域の子育ての実態を理解する、②地域の子育てのニーズを学ぶ、をより深く実習し、課題を発見し考察を行える力の養成を目標とする。					
授 業 計 画	第 1 回	イントロダクション(導入)			第 16 回	事前指導⑤(基本マナーや課題の見直し等)
	第 2 回	事前指導①(活動場所の選定等)			第 17 回	事前指導⑥(基本マナーや課題の見直し等)
	第 3 回	事前指導②(活動場所の選定等)			第 18 回	地域活動⑥(受講生の居住地域にて)
	第 4 回	事前指導③(マナーや課題の設定等)			第 19 回	地域活動⑦(受講生の居住地域にて)
	第 5 回	事前指導④(マナーや課題の設定等)			第 20 回	地域活動⑧(受講生の居住地域にて)
	第 6 回	地域活動①(受講生の居住地域にて)			第 21 回	地域活動⑨(受講生の居住地域にて)
	第 7 回	地域活動②(受講生の居住地域にて)			第 22 回	地域活動⑩(受講生の居住地域にて)
	第 8 回	地域活動③(受講生の居住地域にて)			第 23 回	事後指導⑤
	第 9 回	地域活動④(受講生の居住地域にて)			第 24 回	事後指導⑥
	第 10 回	地域活動⑤(受講生の居住地域にて)			第 25 回	事後指導⑦(振り返りとディスカッション等)
	第 11 回	事後指導①			第 26 回	事後指導⑧(振り返りとディスカッション等)
	第 12 回	事後指導②(振り返りとディスカッション等)			第 27 回	事後指導⑨(振り返りとディスカッション等)
	第 13 回	事後指導③(振り返りとディスカッション等)			第 28 回	事後指導⑩(一年生との合同検討会等)
	第 14 回	事後指導④(振り返りとディスカッション等)			第 29 回	事後指導⑪(一年生との合同検討会等)
	第 15 回	前期のまとめと後期の学びへの助言			第 30 回	一年間の総合的まとめと今後の学びへの助言
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 活動場所に選定と依頼等を丁寧にこな い活動に臨む。			復 習： 活動で得た学び等をまとめる。		
成績評価の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（４０％）、課題（６０％） ※課題とは地域活動参加回数や態度である。					
教 科 書	特に指定しない					
参 考 文 献	講義の際に随時紹介する					
注 意 事 項	・本科目(実習)は卒業要件である。 ・活動場所は主に受講生それぞれの居住地域の施設、学校、行政等が実施する活動を受講生自ら選定し、依頼を行い、活動に参加する。 ・活動は、土日祝日と長期休暇中に行う。できるだけ一か所の場所で継続して複数回の活動を行う。					

授 業 科 目	保 育 原 理 II		単位数	2	担当教員	土屋 由
講 義 の 内 容	保育原理Ⅰでの学びを踏まえ、以下の内容を中心に学ぶ。 ① 保育者の専門性として子ども・保護者・保育者同士のかかわりの中で求められるもの ② 乳児保育や延長・夜間保育、特別な配慮を必要とする子どもへの対応 ③ 保育所や幼稚園、認可外保育施設の現状や課題 ④ 子ども、保護者を取り巻く課題					
到 達 目 標	講義を通して、保育者の役割や保育・子どもを取り巻く現状と課題について理解を深めることを到達目標とする。					
授 業 計 画	第1回	オリエンテーション				
	第2回	保育者の専門性①子どもとのかかわりの中で求められるもの				
	第3回	保育者の専門性②保護者とのかかわりの中で求められるもの				
	第4回	保育者の専門性③保育者同士のかかわりの中で求められるもの、保育者の成長と研修				
	第5回	健康・安全と多様な子どもの保育への対応①健康と安全に関する留意事項				
	第6回	健康・安全と多様な子どもの保育への対応②乳児保育への対応				
	第7回	健康・安全と多様な子どもの保育への対応③延長・夜間におよぶ子どもの保育				
	第8回	健康・安全と多様な子どもの保育への対応④特別な配慮を必要とする子どもと保護者への対応				
	第9回	保育の現状と課題①保育所の現状				
	第10回	保育の現状と課題②幼稚園の現状				
	第11回	保育の現状と課題③認可外保育施設の現状				
	第12回	保育の現状と課題④保育の質と評価				
	第13回	保育の現状と課題⑤認定子ども園の設立と今後の展望				
	第14回	保育の現状と課題⑥子ども・保護者を取り巻く課題				
	第15回	まとめ、保育研究の視点				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 次回の授業の範囲について、教科書に目を通すこと。			復 習： 授業で扱った内容について、教科書や配布プリントに記載されている情報についても、ノートに整理して記入しておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、レポート（20％）、課題（10％）					
教 科 書	『よくわかる保育原理』（森上史朗・大豆生田啓友、ミネルヴァ書房）					
参 考 文 献	参考文献は、授業において紹介する。					
注 意 事 項	他の受講生の意見や考えを聞き、自分の考えと相対化することで、学びを深めてほしい。					

授 業 科 目	保 育 の 心 理 学		単位数	1	担当教員	伊藤 明芳
講 義 の 内 容	本講義では、講義「発達心理学」の内容を踏まえて、発達心理学と教育心理学の基礎的知識の拡充と現場で生きる実践的能力の応用を図ることを目的とする。 保育方法の工夫への手立て、家庭や保護者との関わり、保育者自身の心の安定と成長等にもアプローチしたいと考えている。					
到 達 目 標	これまで学んだ基礎的知識を復習し、新たな知見を学び、それらを使って、子どもや大人の心の問題理解と支援にどのように活かせるのか考えられるようになること。					
授 業 計 画	第 1 回	イントロダクション				
	第 2 回	発達を理解するための基礎① [発達理論の復習と応用]				
	第 3 回	発達を理解するための基礎② [理論の活用を考える]				
	第 4 回	知的側面の発達				
	第 5 回	情緒的発達				
	第 6 回	社会的発達				
	第 7 回	子どもの心の問題① [概要]				
	第 8 回	子どもの心の問題② [理解と対応]				
	第 9 回	発達障害① [発達障害の理解]				
	第 10 回	発達障害② [発達障害へのアプローチ]				
	第 11 回	子どもへの関わりと保育方法の工夫				
	第 12 回	家庭、保護者との連携				
	第 13 回	保育者自身の心の健康				
	第 14 回	まとめ				
	第 15 回	今後へのアドバイス				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 毎回、学んだ知識を正確に習得できるようにすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、レポート（40％）					
教 科 書	特に指定しない					
参 考 文 献	講義の際に随時紹介					
注 意 事 項	講義を中心におこなう。実際の事例などをあげ、受講生にわかりやすい内容を心がけたい。その他、事例研究やビデオ視聴等で理解を深め、それを保育の実践に活かすことを考える。 受講者には自ら学び考える意欲をもって授業に参加する態度が求められる。					

授 業 科 目	子 ど も の 食 と 栄 養		単位数	2	担当教員	橋 本 洋 子
講 義 の 内 容	私たちは「食べる」ことでからだに必要な栄養を摂取し、また適切な食生活によって健康を維持している。乳・幼児期の食生活は心身の発育・発達に大きく影響し、幼児期に身についた食生活はその子どもの一生の食習慣を左右する大切なものとなる。食事は単に栄養素を摂取するだけではなく、心身の順調な発育、発達を促し健康な生活を営むための基礎となることを理解し、保育者として必要な食・栄養の知識を身につける。この授業を通して自身の適切な食生活も考えて欲しい。					
到 達 目 標	①健康な食生活を営むための栄養の知識と生活リズムを理解する ②ただ「食べる」だけでなく、美味しく味わう、よく噛むことの大切さを学ぶ ③子どもの心身の発達段階にふさわしい栄養と食生活を理解する					
授 業 計 画	第 1 回	子どもの健康と食生活 健康・栄養とは		第 16 回	児童福祉施設における食事と栄養	
	第 2 回	子どもを取り巻く食環境① 子どもの心身の健康と食生活		第 17 回	配慮が必要な子どもの食と栄養① 疾病・体調不良など	
	第 3 回	子どもを取り巻く食環境② 子どもの食生活の現状と課題、食品の安全性		第 18 回	配慮が必要な子どもの食と栄養② アレルギー	
	第 4 回	からだと栄養① からだのはたらきと栄養、栄養素の基礎知識		第 19 回	配慮が必要な子どもの食と栄養③ 障がいのある子どもへの対応	
	第 5 回	からだと栄養② 食べ物のゆくえ～消化・吸収のいとなみ～(ビデオ)		第 20 回	こどもを取り巻く食環境③ いま子どもに必要な食環境を考える	
	第 6 回	からだと栄養③ からだのはたらきと栄養 まとめ・小テスト		第 21 回	献立作成：食品の選び方、栄養バランス	
	第 7 回	からだと栄養④ 食事摂取基準と献立作成・調理の基本		第 22 回	食育① 食育の基本と内容：食育基本法、食育計画	
	第 8 回	子どもの発育・発達と食生活① 妊娠、胎児期の栄養		第 23 回	食育② 保育者としての食育を考える：実践例から学ぶ	
	第 9 回	子どもの発育・発達と食生活② 乳児期：乳汁栄養（母乳、人工栄養）、排泄		第 24 回	食育③ 食育計画の立案	
	第 10 回	子どもの発育・発達と食生活③ 乳児期：哺乳動作の発達（ビデオ）		第 25 回	子どもの栄養と食生活 まとめ・小テスト	
	第 11 回	子どもの発育・発達と食生活④ 離乳の意義と進め方		第 26 回	食育演習① 食育媒体とは：食育計画と媒体制作	
	第 12 回	子どもの発育・発達と食生活⑤ 摂食機能の発達 まとめ		第 27 回	食育演習② 媒体製作	
	第 13 回	子どもの発育・発達と食生活⑥ 幼児期の特徴と食生活		第 28 回	食育演習③ 媒体制作	
	第 14 回	子どもの発育・発達と食生活⑦ 学童期の特徴と食生活		第 29 回	食育媒体発表①	
	第 15 回	子どもの発育・発達と食生活⑧ まとめ・小テスト		第 30 回	食育媒体発表②	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： シラバスおよび授業内での指示にしたがい、事前にテキストに目を通しておく。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（70％）、課題・発表（20％）、授業態度（10％）					
教 科 書	『子どもの食と栄養 - 演習 - 』（岡崎光子編、同文書院）					
参 考 文 献	『子どもの食と栄養塩演習書』（小川雄二編、医歯薬出版株式会社）他、授業内で随時紹介する					
注 意 事 項	テキストを中心にビデオ・配布資料等の教材を使用した講義が中心となるが、献立作成、食育媒体制作等も含む演習科目である。授業での指示にそって事前学習がひつようとなる。子どもだけでなく自身の食生活・健康も振り返り、保育者として求められている食教育に積極的に取り組み、課題作成・発表を通して今求められている食指導の大切さを考えて欲しい。					

授 業 科 目	子 ども の た め の 食 育 実 習	単 位 数	1	担 当 教 員	橋 本 洋 子
講 義 の 内 容	子どもは、乳・幼児期の短期間にめざましい摂食機能の発達を遂げる。この食育実習では、1年次の「子どもの食と栄養」で学んだ知識をもとに、子どもの発達過程に応じた食事を実際に調理し試食することにより咀嚼機能の発達を理解し、乳幼児に関わる専門職としての適切な食指導・食支援の方法を学ぶ。基本的な調理の知識・技術を習得する。				
到 達 目 標	①子どもの月齢と咀嚼機能に合った食品の選び方、調理方法を理解する ②「美味しく」「楽しい」かつ「安全な」食事を提供するための環境整備を学ぶ ③たんに「空腹を満たす食事」ではない適切な食事内容と食事量を理解する				
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション：調理室の使い方、調理の基本			
	第 2 回	調乳および離乳食（準備期）			
	第 3 回	離乳食（初期・中期）			
	第 4 回	離乳食（後期）			
	第 5 回	離乳食（完了期）			
	第 6 回	幼児の食事（1～2才、3～5才）			
	第 7 回	幼児のおべんとう①			
	第 8 回	幼児のおべんとう②			
	第 9 回	幼児の間食			
	第 10 回	幼児の間食：食物アレルギーを考える			
	第 11 回	行事食			
	第 12 回	食育を考える			
	第 13 回	まとめ、レポート提出（第 13 週で終了）			
	第 14 回				
	第 15 回				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 毎実習前にオリエンテーション時の配布資料、前実習内容に目を通しておく。			復 習： レポート作成により、実習内容の理解を深めておく。	
成 績 評 価 の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（60％）、実技（20％）、授業態度（20％）				
教 科 書	資料を配布する				
参 考 文 献					
注 意 事 項	毎回2時限連続で行う。デモンストレーション・説明の後、4～5人のグループに分かれて実習を行う。必要に応じてビデオ等の教材も使用する。毎実習毎に試食しながら各自でレポートを作成し、子どもの食事のあり方について考察する。レポートは最後にまとめて提出する。グループ毎の実習となり欠席は他の学生に迷惑をかける。授業中の私語は円滑な実習のために禁止する。エプロン、三角巾を着用すること。調理、試食後にまとめるレポートは、子どもの発達をふまえて考察すること。				

授 業 科 目	社 会 的 養 護		単位数	2	担当教員	小室 泰治
講 義 の 内 容	社会的養護の基礎知識の習得を目的とし、各児童福祉施設の目的、職員の職務を理解する。また、家庭的養護、施設養護や障害者施設の状況を理解する。さらに、社会的養護の歴史、法律、制度について理解し、児童虐待防止についても学ぶ。					
到 達 目 標	1 社会的養護を必要とする子どもたちや利用者について理解が深まる。 2 社会的養護の制度や施策について説明ができる。 3 施設職員の専門性について説明ができる。					
授 業 計 画	第 1 回	社会的養護について概要説明 家庭や子どもを取り巻く社会環境の変化について理解する				
	第 2 回	現代社会における社会的養護の意味 社会的養護とは何かについて学び、社会的養護を必要とする子どもたちを理解する				
	第 3 回	社会的養護の歴史的変遷と今日的課題 ヨーロッパの児童養護、日本の児童養護の変遷について理解する				
	第 4 回	社会的養護の制度と実施体系 社会的養護の養護活動を支えるために必要とされる制度や支援のあり方を学ぶ				
	第 5 回	社会的養護の仕組み 児童福祉に係る制度や児童相談所の役割を学ぶ				
	第 6 回	児童の権利ノート 児童の権利擁護に関する社会的方策や児童虐待の予防策について理解する				
	第 7 回	施設養護の理念と援助 児童福祉施設で支援活動に携わる職員が持つべき基本姿勢・基本理念について考える				
	第 8 回	家庭的養護 里親・ファミリーホームなどの家庭的養護について理解する				
	第 9 回	施設養護 乳児院・児童養護施設・障害者施設などの施設養護について理解する				
	第 10 回	施設養護の実践 現場での実践のあり方や将来を見据えた支援のあり方について事例を通して理解する				
	第 11 回	自立支援と家庭支援 進学や就職に向けた自立支援と家庭が抱える課題に対して支援のあり方を学ぶ				
	第 12 回	社会的養護の実践に求められる専門性と援助技術 社会的養護に携わる職員の倫理、ソーシャルワークなどの専門性について考える				
	第 13 回	施設運営管理と財政 施設の設備基準や施設の運営費について学ぶ				
	第 14 回	社会的養護の現状と課題 社会的養護に係る現状を整理し、今後のあり方について学ぶ				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 授業では事例を多く取り入れる。日ごろからニュースや新聞報道などに目をとおしておき、積極的に発言することを期待する。			復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、課題（40％）					
教 科 書	『子どもたちの生活を支える社会的養護』（小野澤昇・田中利則・大塚良一編著、ミネルヴァ書房.2013年）					
参 考 文 献	『子どもたちの生活を支える社会的養護内容』（小野澤昇・田中利則・大塚良一編著、ミネルヴァ書房.2013年） 適宜プリントを配布する					
注 意 事 項	授業中の私語は慎み、スマートフォン等はカバンの中に入れておくこと。					

授 業 科 目	相 談 援 助		単位数	1	担当教員	為石 摩利夫
講 義 の 内 容	家庭の抱える問題は多様化しており、その背景も含めて理解することが相談者を受け止め、信頼関係を構築することにつながっていく。また、問題が複雑に絡み合っている場合には、専門機関との連携した取り組みも必要である。相談援助の実践において信頼される援助者となるための知識・技術を学ぶ。					
到 達 目 標	保育現場における相談援助機能について学び、その必要性と事例を通じて対象者の理解を深める。 ・相談援助の必要性について理解する ・相談援助の対象者の理解と受け止め、専門機関との連携の必要性を理解する ・アセスメントの重要性と計画の見直しの必要性を理解する					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション 授業の進め方と評価について				
	第 2 回	保育士の相談援助 保育士として専門性を持って行う相談支援の必要性について理解する				
	第 3 回	ソーシャルワーク ソーシャルワークの定義				
	第 4 回	相談援助とソーシャルワーク 相談援助の基本的技術				
	第 5 回	相談援助の原則 バイステックの原則Ⅰ				
	第 6 回	相談援助の原則 バイステックの原則Ⅱ				
	第 7 回	相談援助のプロセスⅠ 相談援助の進め方				
	第 8 回	相談援助のプロセスⅡ アセスメントと計画				
	第 9 回	相談援助のプロセスⅢ 記録、評価、見直し				
	第 10 回	連携機関 専門機関との連携				
	第 11 回	自己の価値観 専門職の価値観と自己覚知				
	第 12 回	コミュニケーション 面接と受け止め（虐待、障害のある子）				
	第 13 回	グループワークⅠ グループワークの原則				
	第 14 回	グループワークⅡ グループワークのプロセス				
	第 15 回	ケアマネジメント 相談援助のまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 事前に教科書の内容を確認する。			復 習： 疑問点を明確にし、基本原則とその応用について考察する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、レポート（20％）、授業態度（10％）					
教 科 書	『相談援助』（大嶋 恭二・金子 恵美 編著、建帛社）					
参 考 文 献	授業中に適宜紹介する。					
注 意 事 項						

授 業 科 目	家 庭 支 援 論		単位数	2	担当教員	北澤 明子
講 義 の 内 容	家族、家庭のあり方が変化し、多様化した現在、保育者は家庭や地域と連携しながら、子育てを支援していくことが求められている。本講では、子育てにおける「家庭支援」の背景や目的、方法について講義及びグループワーク等を通して学ぶとともに家族、家庭のあり方や保育者として必要な家庭支援について考えていく。					
到 達 目 標	① 家族の意義とその機能について理解する。 ② 現在の子育て家庭を取り巻く環境について理解する。 ③ 子育て支援の公的根拠や支援政策について理解する。 ④ 子育て支援の実際について理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーションー授業の進め方・参考文献の紹介等ー				
	第 2 回	家庭の意義と機能				
	第 3 回	子育て家庭の歴史				
	第 4 回	現代家族をめぐる子育て環境				
	第 5 回	子育て家庭支援の必要性				
	第 6 回	子育て支援の法的根拠				
	第 7 回	わが国の子育て支援政策				
	第 8 回	保育の場における相談・援助について				
	第 9 回	子育て支援サービスの種類と役割				
	第 10 回	子育て支援の実際①ー保育所・幼稚園における子育て支援の取り組みー				
	第 11 回	子育て支援の実際②ー地域子育て支援センターにおける子育て支援の取り組みー				
	第 12 回	子育て支援の実際③ー諸外国の子育て支援、その他多様な子育て支援の場についてー				
	第 13 回	子育て支援の実際④ー子育て支援の実際を企画するー				
	第 14 回	企画発表・相談事例検討				
	第 15 回	まとめと振り返り				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 出された課題は授業の予習・復習をかねるので真摯に取り組むこと。			復習： 授業で配布された資料を整理し、前回の授業内容を復習すること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、レポート（10％）、課題（10％）、授業態度（10％）					
教 科 書	適宜必要な資料を配布する。					
参 考 文 献	『子どもを知る 家庭支援論【新版】』（小田豊 他編、北大路書房）					
注 意 事 項	適宜、必要な資料を授業内に配布するので、配布された資料はファイリングして毎回授業に持参するようにすること。					

授 業 科 目	保 育 内 容 総 論		単位数	1	担当教員	石河 信雅
講 義 の 内 容	保育内容は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」そして「養護」の領域があり、専門的にはそれぞれの領域を別々に学んでいる。しかし、保育実践（教育）の場面ではそれらが当然のごとく、遊びや・生活の中で一体的に進められるのである。ですから、保育内容総論は実際の保育場面で、各領域が統合して行われる實際を理解し、保育実践にいかにか臨むかを事例に基づきながら学んでいく。					
到 達 目 標	1 保育所・幼稚園（幼保連携型認定こども園）に関する基本的事項を理解する。 2 子どもの発達と保育内容との関連について理解する。 3 各領域と保育内容について理解し、実際の保育場面での在り方を理解する。 4 保育の實際を総合的に理解し、今後の学びへの目標設定を再度見直す。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション：保育内容総論の学びの意義を理解する。また、講義についての受講態度や講義内容について理解し各自意欲化を図る。幼稚園・保育園の概要を知る。				
	第 2 回	幼稚園教育要領・保育園保育指針（幼保連携型認定こども園保育要領）に基づく基本的な内容「5 領域や養護」などについて概観し、「論」と「実践」の在り方を考察する。				
	第 3 回	保育の実際・遊びを中心とした生活。実際の保育場面を想定し、環境構成の重要性と遊びを通して子供は成長し様々な学びをすることを学ぶ。				
	第 4 回	発達と保育内容。子どもの発達と保育内容との関連性を実践例を通して学ぶ。そのことにより、子どもの発達を認識し実践の場面でどのように活用するかを理解し、認識しておくことの重要性を理解する。				
	第 5 回	年齢相当の保育 2・3 歳児。各年齢の成長・発達を確認し発達にあった保育内容についてこれまでの学びを統合して考え、理解する。				
	第 6 回	年齢相当の保育 4・5 歳児。各年齢の成長・発達を確認し発達にあった保育内容についてこれまでの学びを統合して考え、理解する				
	第 7 回	環境と保育について学ぶ。保育は環境をとおして行うことが基本となることを理解し、環境構成の重要性を実際の例を通して学び、理解する。				
	第 8 回	絵本と保育。保育場面での紙芝居や絵本の読み聞かせ・素話の方法などを実体験することにより、その在り方を学び保育場面での活かし方を考察する。				
	第 9 回	望ましい保育者像。保育や保育者の質について考察し、どのような保育者を目指すかを考えていく。その際、共同的な学びを行い学生同士が他のものの考え方などを知り、お互いの学びを深める。				
	第 10 回	保育をめぐる最近の動向。特に少子化や地域社会の在り方の変容など子どもが育つ環境は大きく変貌し、今後も社会環境の変化は続いていく。そのような変化の動向を知る方法や変化への対応について考察する。				
	第 11 回	多様な保育ニーズ・・特に、気になる子の保育について学ぶ。近年幼児の社会も様々な外的要因から幼児の育ちに大きな影響が見受けられる。気になる子への保育の在り方を実践例をとおして学ぶ。				
	第 12 回	保幼小の連携について学ぶ。近年、小1プロブレムなどの課題が見受けられる。子どもたちは育ちの環境の変化に大きな戸惑いを見せている。子どもの育ちの環境や育ちの連続性について再考し、保幼小の連携について考察を深めていく。				
	第 13 回	保護者支援・地域との連携について学ぶ。核家族化などにより保護者の子育てへの支援が非常に重要になっている。支援の方法について事例をとおして学ぶ。また、地域社会との連携の在り方について事例をとおして学ぶ。				
	第 14 回	これからの保育に求められるもの。未来を生きる子どもたちを想像し、いまどのような保育を行うことが必要なのかをこれまでの学びから考察し、保育の在り方を探求する。				
	第 15 回	まとめ・・学び続ける保育者へ・・保育環境は常に流動している。保育者はその流動性を感知し、常に学び、その学びを保育に活かしていかなければならない。今何をなすべきかを考え、行動できる保育者となれるよう自分自身を見直す。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 講義内容について再度見直し自身で身に付けるようにする。また、関連内容について様々な方法を駆使して学びを深めるようにすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（50％）、課題（30％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針』＜原本＞ （内閣府・文部科学省・厚生労働省、チャイルド本社）					
参 考 文 献	講義の中で随時提示する					
注 意 事 項	教科書については、教育・保育要領や教育要領、保育指針の原本を所持していれば、それを使用する。 特にチャイルド本社のものである必要はない。					

授 業 科 目	保 育 内 容（健 康）		単位数	1	担当教員	石河 信雅
講 義 の 内 容	幼児期は生涯にわたる学びの基礎を培う重要な時期である。この重要な時期である乳幼児が「健康な心と身体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出そうとする力を養う」ために、乳幼児の発育発達の状態に対する援助の基本や保育者としての在り方などの基礎を学ぶことを目的とする。					
到 達 目 標	1 子どもの健全な心身の発達のために「遊び」は重要な要素を担っていることを理解する。 2 子どもの食生活や基本的生活習慣の各年齢に合わせた発達過程を理解する。 3 子どもの健康及び安全の確保について保育の実態から学び理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション。保育にとって、保育内容・健康若しくは健康の領域の重要性について理解する。また、講義についての受講態度や講義内容について理解し各自の意欲化を図る。				
	第 2 回	幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を参考として、健康の領域で何を学ぶべきかを概観する。				
	第 3 回	子どもの身体と発達。子どもの身体の発達過程を学び理解する。乳幼児期は、発達において後戻りすることのできない重要な時期である、その重要な時期の保育を担うことの重要性を理解する。				
	第 4 回	子どもと遊び。子どもの遊びは、人格形成や脳の機能さらに人間関係作りそして健康な身体を形成するうえで非常に重要である。特に幼児期における遊び方について、実践をととして学ぶ。				
	第 5 回	子どもの遊び。子どもの遊びと開放感について実践をととして学び、今後の学びに結び付け家庭でも体を動かすことの重要性を実感し遊びの重要性を理解する。				
	第 6 回	遊びのお便りの作成。幼児期に遊びで形成される心身の形成、人間関係作り、脳の発達などを保護者にわかりやすく伝えるお便りを作成する。その中で、自分自身の学びを振り返り、学びの深さを理解する。				
	第 7 回	子どもの遊びとコミュニケーション能力について。子どもの遊びは、その後のコミュニケーション能力の発達に欠かせない重要な面を持っている。コミュニケーションの在り方や遊びの中での育ちについて理解する。				
	第 8 回	子どもの食事について。乳幼児と食は非常に重要なテーマ（食育等）である。「子どもの貧困」が叫ばれる昨今、子どもの食生活に目を向けることは子どもの心身の健康保持にとって重要であることを理解する。				
	第 9 回	子どもの健康観察について。保育実践の中で、朝の子どもとの出会いは、子どもの心身の状態を観察するのに非常に重要な時間である。子どもの健康観察の方法そして、それを保育にいかにかに生かすか等を事例をととして学び理解する。				
	第 10 回	子どもの基本的生活習慣について。子どもの基本的生活習慣は、年齢相応に発達をしていく。（個人差があることも含めて）基本的な発達の段階を学び、発達について理解する。				
	第 11 回	児童虐待等について。子どもの心身の健康状態の把握において、児童虐待の疑いも併せて観察する必要がある。不適切な養育・虐待等は早期に発見し適切な対応をとることが重要であることを事例をととして学び理解する。				
	第 12 回	安全への配慮と事故防止について。園児を保育する場合の基本として安心・安全な環境を整えることがある。園の瑕疵による事故はあってはならない。そのための、安全のあり方や保育者の目線等について理解する。				
	第 13 回	疾病及び衛生管理について。子どもたちは園では集団での生活になる。集団での生活では、様々な疾病への対応やけがの防止等配慮しなければならない事項が出てくる。その配慮事項や配慮についての留意点について理解する。				
	第 14 回	家庭との連携について。健康で安全な子どもの生活を見守るためには、家庭との連携は不可欠である。常に密接な連携を心がけるような取組の在り方を事例を通して学び理解する。				
	第 15 回	まとめ。子どもの健康は、生活の基盤であり、将来への投資にもなる。子どもたちが心身ともに健康な生活が送れるよう保育することが重要である。これまでの学びから、保育者を目指す学生がこれからどのような学びが必要かを理解する。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 講義内容について再度見直し自分自身で身に付けるようにする。また、学びを広げることも重要である。自身の学びを深めるようにしたい。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（５０％）、課題（３０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	『幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針』＜原本＞ （内閣府・文部科学省・厚生労働省、チャイルド本社）					
参 考 文 献	講義の中で随時提示する。					
注 意 事 項	教科書については、教育・保育要領や教育要領、保育指針の原本を所持していれば、それを使用する。 特にチャイルド本社のものである必要はない。					

授 業 科 目	保 育 内 容（人 間 関 係）		単位数	1	担当教員	土屋 由
講 義 の 内 容	保育所保育指針や幼稚園教育要領の領域の一つに、人とかかわりに関する領域「人間関係」が設けられている。講義では、以下の内容を中心に学ぶ。 ① 領域「人間関係」に関連する社会学や発達心理学などの理論をベースとした基礎知識 ② 乳児期、3 歳児、4 歳児、5 歳児とそれぞれの発達過程において、どのように人とかかわりが育つのか ③ 保護者対応や保育者同士の連携も含めた保育者の果たす役割					
到 達 目 標	領域「人間関係」を理解するのに必要な基礎知識を身につけるとともに、単に人とうまく付き合えとか、既成の集団にうまく順応していけるということではなく、人と人とのこころが深いところで結びつき、豊かなかかわりがもてるような集団の育ちがめざされる必要があることや、一人一人が十分に生かされる集団であることの大切さといった「人間関係」を捉えるのに必要な視点をもつことが目標である。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション				
	第 2 回	自己理解と自己概念 「自分を知る」ところからはじめよう				
	第 3 回	社会・文化に生きる子ども				
	第 4 回	領域「人間関係」がめざすもの				
	第 5 回	領域「人間関係」の基礎知識				
	第 6 回	0・1・2 歳児 乳児の保育における人とかかわり				
	第 7 回	3 歳児 保育者が居場所 ものを「欲張る」ことにも意味がある				
	第 8 回	4 歳児 自己主張と自己抑制 幼児期のなかよしとは？				
	第 9 回	5 歳児 園生活の充実感を支えるもの				
	第 10 回	かけがえのない一人一人の存在				
	第 11 回	保護者とかかわり				
	第 12 回	保育者同士のかかわり				
	第 13 回	かかわりの育ちを「みる」				
	第 14 回	親しい人との体験が原動力になる				
	第 15 回	授業のまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 次回の授業の範囲について、教科書に目を通すこと。			復習： 授業で扱った内容について、教科書や配布プリントに記載されている情報についても、ノートに整理して記入しておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、レポート（20％）、課題（10％）					
教 科 書	『体験する・調べる・考える 領域 人間関係』（田宮 緑、萌文書林）					
参 考 文 献	授業において紹介する。					
注 意 事 項	他の受講生の意見や考えを聞くこと、また自分自身の体験とつなげて考えることで、学びを深めてほしい。					

授 業 科 目	保 育 内 容（環 境）		単位数	1	担当教員	北澤 明子
講 義 の 内 容	本講では、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」の基本的な考え方について学ぶ。また、様々な環境とかかわる子どもの具体的な事例から、子どもの環境とのかかわり方について考え、環境と主体的に関わっていくための保育者の役割について考えていく。					
到 達 目 標	① 環境を通して行う保育（教育）について理解する。 ② 幼稚園教育要領、保育所保育指針が示す「環境」の意味、ねらいや内容について理解する。 ③ 乳幼児期の発達の特性を踏まえ、子どもが身近な環境とどのように出会い、かかわっていくのかについて学ぶ。 ④ 子どもが身近な「環境」と主体的にかかわっていくための保育者の役割について学ぶ。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーションー授業の進め方・参考文献等紹介ー				
	第 2 回	保育の基本と保育内容				
	第 3 回	領域「環境」のねらいと内容				
	第 4 回	子どもの発達と領域「環境」				
	第 5 回	領域「環境」の変遷と現代社会における子どもと環境				
	第 6 回	身近な環境とのかかわり①ー身近なものとかかわりについてー				
	第 7 回	身近な環境とのかかわり②ー身近なもので実際に遊んでみようー				
	第 8 回	身近な環境とのかかわり③ー身近な自然とかかわりについて考えるー				
	第 9 回	身近な環境とのかかわり④ー自然とかかわる実践について学ぶー				
	第 10 回	身近な環境とのかかわり⑤ー身近な人とかかわりについてー				
	第 11 回	身近な環境とのかかわり⑥ー文字や記号、数量、形とかかわりについてー				
	第 12 回	身近な環境とのかかわり⑦ー情報と生活、行事、地域とかかわりについてー				
	第 13 回	教育課程、保育課程と領域「環境」				
	第 14 回	環境構成と領域「環境」ー環境構成と保育者の役割について考えるー				
	第 15 回	まとめと振り返りー授業のまとめと振り返りの中で子どもにとって環境と関わる意義について確認するー				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』を読んでくこと。			復 習： 前回の内容を確認して授業に臨むこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（８０％）、レポート（１０％）、授業態度（１０％）					
教 科 書	『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、フレーベル館） 『保育所保育指針解説』（厚生労働省、フレーベル館）					
参 考 文 献	『事例で学ぶ保育内容 領域 環境』（無藤隆監修・福元真由美 他編、萌文書林）					
注 意 事 項	必要な資料やレジュメは適宜、配布する。配布されたものを１冊にファイリングして授業の際に持参するように。					

授 業 科 目	保 育 内 容（言 葉）		単位数	1	担当教員	高原 典子
講 義 の 内 容	この教科では、乳幼児の言葉の獲得過程について学ぶと同時に、乳幼児の生活における遊びや人とのかかわりが言葉の発達と相互的にどのように影響し合うかについて、さまざまな事例を通して理解する。また、子ども及び保護者への適切な援助ができるように肯定的な言葉かけの演習を行なう。子どもの豊かな言葉を育むための児童文化財についても、保育実技力の向上を目指し演習の機会をつくる。					
到 達 目 標	①乳幼児の言葉の獲得過程を理解し、保育者としての援助の力を養う。 ②保育者として、子どもや保護者への適切な言葉かけと表現力を培う。 ③子どもの言葉を豊かに育む児童文化財（絵本・手あそび・紙芝居・素話・わらべうたなど）について学び、保育実技力を磨く。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーションおよび乳幼児の言葉を育む児童文化財について				
	第 2 回	乳幼児の生活における言葉の機能について				
	第 3 回	「領域 言葉」について、及び音声言語以外の言葉について				
	第 4 回	乳幼児の言葉の発達① 満 1 歳頃までの乳幼児の言葉の獲得について				
	第 5 回	乳幼児の言葉の発達② 満 1 ～ 2 歳頃までについての乳幼児の言葉の獲得について				
	第 6 回	乳幼児の言葉の発達③ 満 3 ～ 4 歳の子どもの言葉の獲得について				
	第 7 回	乳幼児の言葉の発達④ 就学前までの子どもの言葉や文字の獲得について				
	第 8 回	DVD「せんせいにもきかせて」を視聴し、園生活での子どもと保育者の言葉について考察する。				
	第 9 回	乳幼児の言葉の獲得についての復習				
	第 10 回	保育実践における事例を通して、保育者の言葉かけと援助のしかたを学ぶ①				
	第 11 回	保育実践における事例を通して、保育者の言葉かけと援助のしかたを学ぶ②				
	第 12 回	保育実践における事例を通して、保育者の言葉かけと援助のしかたを学ぶ③				
	第 13 回	保育者の言葉を育む演習				
	第 14 回	言葉の障害を持つ子どもへの援助について				
	第 15 回	言葉についての総括				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 次回のための予習については、前回の授業時に課題を出します。			復 習： 授業中のワークシートを復習しておくこと。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（３０％）、レポート（３０％）、実技（２０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	指定なし。教材については、授業中、必要に応じて印刷物を配布します。					
参 考 文 献	『演習 保育内容 言葉』（戸田雅美編著、建帛社）、『保育内容 言葉』（秋田喜代美ほか著、光生館） 『事例で学ぶ保育内容＜領域＞言葉』（無藤 隆監修、萌文書林）、『子どもとことば』（岡本夏木著、岩波新書） 幼稚園教育要領、保育所保育指針					
注 意 事 項	本教科では定期試験は行いませんが、単元終了ごとに小テストあるいは小レポートを行います。また第４週以降一人ひとり紙芝居の実演をしてもらいますので、各自よく練習して臨んでください。発表当番時に無断欠席した場合は減点になりますので、注意してください。					

授 業 科 目	保 育 内 容 （ 音 楽 表 現 I ）		単位数	1	担当教員	二藤 宏美
講 義 の 内 容	保育や幼児教育の現場ですぐに使える、年齢別の歌と身体表現、合奏表現を学習します。同時に自らのリズム感や音感、歌唱力、楽典の知識を磨きます。まとめとして、ものがたりの表現劇を制作し、発表します。美しい音楽表現の規範を示せること、子どもとともに柔軟に音楽活動ができる感性を身につけることが目標です。					
到 達 目 標	授業で扱う全ての歌と遊戯、合奏を覚え正しく表現できること。それぞれの曲に施された身体表現や合奏アレンジの特徴や意図を理解すること。					
授 業 計 画	第 1 回	発声、視唱、リズム反応、読譜の基本練習（以降、適宜扱う）				
	第 2 回	3 歳児の合奏 1 楽曲の分析と実践				
	第 3 回	3 歳児の合奏 2 楽曲の分析と実践				
	第 4 回	3 歳児の合奏 3 楽曲の分析と実践				
	第 5 回	4 歳児の合奏 1 楽曲の分析と実践				
	第 6 回	4 歳児の合奏 2 楽曲の分析と実践				
	第 7 回	4 歳児の合奏 3 楽曲の分析と実践				
	第 8 回	5 歳児の合奏 1 楽曲の分析と実践				
	第 9 回	5 歳児の合奏 2 楽曲の分析と実践				
	第 10 回	5 歳児の合奏 3 楽曲の分析と実践				
	第 11 回	3 拍子の楽曲、歌を伴わない身体表現				
	第 12 回	実技テスト 絵本をもとに表現 1 歌作り				
	第 13 回	絵本をもとに表現 2 合奏アレンジ				
	第 14 回	絵本をもとに表現 3 身体表現とグループ演出				
	第 15 回	グループ発表とまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 授業で扱う曲の楽譜を確認しておくこと。			復習： 授業で扱った内容はその日のうちに完全に覚えましょう。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（４０％）、発表（３０％）、実技（２０％）、授業態度（１０％）					
教 科 書	『リトミックであそぼう 器楽合奏編』（定成淡紅子、全音楽譜出版社）					
参 考 文 献	『きょうはみんなでクマがりだ』（マイケル ローゼン再話、評論社） 『はじめての楽典ブック』（長沼由美、二藤宏美、ヤマハミュージックメディア）					
注 意 事 項	グループ作業や討論が中心です。協力し合い、学び合う態度をもちましょう。笑顔で積極的に自分を表現できるよう心がけ、この領域における自分の特技を何か一つ体得しましょう。					

授 業 科 目	保 育 内 容 （ 造 形 表 現 I ）		単位数	1	担当教員	稲葉 恭子
講 義 の 内 容	幼児の造形表現を意欲的に展開させるために必要な基礎知識や技能と、幼児の成長発達にあわせた造形表現遊びを通して、幼児の豊かな感性を育む筋道を学びます。					
到 達 目 標	1．制作活動を主体的に取り組む事ができる。 2．制作過程を大切にしながら、固定観念にとらわれない自分らしい造形表現活動が出来る。 3．基礎的知識や技能を元に、応用できる力を身につける。					
授 業 計 画	第1回	造形表現活動の取り組み方について				
	第2回	描く－1 点と線をあそぶ・点描				
	第3回	描く－2 点と線をあそぶ・クレヨンと色鉛筆				
	第4回	描く－3 点と線をあそぶ・絵の具				
	第5回	描く－4 よく見て描く・クレヨンと絵具のコラボレーション				
	第6回	立体－1 生活素材で手作りおもちゃ制作（紙筒・紙皿・紙コップ）				
	第7回	立体－2 生活素材で手作りおもちゃ制作（牛乳パック）				
	第8回	立体－3 生活素材でアナログゲーム制作				
	第9回	自然とふれあう－1 木の実・葉っぱのアート				
	第10回	自然とふれあう－2 木の実・葉っぱのアート				
	第11回	自然のめぐみ－1 光とあそぶ・ステンドグラス				
	第12回	自然のめぐみ－2 光とあそぶ・ステンドグラス				
	第13回	織む・織る－1 リリアン編み				
	第14回	織む・織る－2 指編み・蜘蛛の巣織り				
	第15回	造形表現活動のまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 次回の授業の準備物を揃える			復習： 授業ふり返りレポート作成		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（20％）、課題（20％）、作品（40％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『楽しい造形表現』（子ども造形表現研究会、圭文社）					
参 考 文 献	授業中に随時紹介。					
注 意 事 項	①作品等の提出期限を守ること。②授業に必要な道具や材料は各自責任を持って準備すること。 ③制作に要する材料費は本人負担とします。					

授 業 科 目	音 楽 I（ピ ア ノ）		単位数	2	担当教員	大輪 公壺 他
講 義 の 内 容	この授業では、幼児教育または保育の現場で必要となる基本的なピアノの演奏技術と表現力を習得する。					
到 達 目 標	1.後期試験で、練習曲 25 番以降またはそのレベルに準ずる曲を 1 曲演奏する。 2.後期試験で、童謡曲集から 3 曲を提出し当日指定された 1 曲を演奏する。 3.上記 1.2.をクリアした者に単位が与えられる（1 年で単位修得できない者は再履修する）。 4.童謡は数曲～10 曲程、学習することが望ましい。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション		第 16 回	曲目番号 15～17	
	第 2 回	曲目番号 1		第 17 回	〃 18～20（童謡テキスト併用）	
	第 3 回	〃 2		第 18 回	〃 21～23（童謡テキスト併用）	
	第 4 回	〃 3		第 19 回	〃 24～26（童謡テキスト併用）	
	第 5 回	〃 4		第 20 回	〃 27～29（童謡テキスト併用）	
	第 6 回	〃 5		第 21 回	〃 30～32（童謡テキスト併用）	
	第 7 回	〃 6		第 22 回	〃 33～35（童謡テキスト併用）	
	第 8 回	〃 7		第 23 回	〃 36～38（童謡テキスト併用）	
	第 9 回	〃 8		第 24 回	〃 39～41（童謡テキスト併用）	
	第 10 回	〃 9		第 25 回	〃 42～44（童謡テキスト併用）	
	第 11 回	〃 10		第 26 回	〃 45～48（童謡テキスト併用）	
	第 12 回	〃 11		第 27 回	追加曲 1	
	第 13 回	〃 12		第 28 回	追加曲 2, 3	
	第 14 回	〃 13		第 29 回	追加曲 4, 5	
	第 15 回	〃 14		第 30 回	テストのリハーサル	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 一定の拍子を取りながらの練習曲のリズム打ち（片手ずつ～両手）を鍵盤外で行う。一定の拍子を取りながらのドレミ読みを行う。			復習： 学習曲の再練習。なるべく鍵盤を見ずに出されている音と楽譜が一致しているかどうかを確認しながら遅いテンポ（1 拍＝60 以下）で弾く。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 実技（80％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『幼稚園教諭・保育士を目指す人のための新しいピアノ教則本』（田口・高崎・大輪編、カワイ出版） 『実用こどものうた』（田口・高崎編、カワイ出版）					
参 考 文 献	授業内で指示					
注 意 事 項	個人レッスンが原則である。与えられた課題を次のレッスンまでに十分練習しておくこと。 学生の進度に応じて後期は童謡曲集を併用する。1 年間で終了不可な学生は 2 年次に残りを続けて履修する。					

授 業 科 目	音 楽 II（ピ ア ノ）		単位数	2	担当教員	大輪 公壺 他
講 義 の 内 容	音楽Ⅰ（ピアノ）で習得したピアノの基本奏法の上に、更に高度な演奏技術と応用力を身につける。 授業では、童謡をはじめ保育の現場で役に立つレパートリーを学びまた、コードネームの学習も通して歌や合奏のピアノ伴奏が余裕を持ってできるよう、主に『実用こどものうた』をベースに授業を進めていく。					
到 達 目 標	1. テキスト中、使用頻度の高い楽曲から学習することが望ましい。 2. 後期試験ではテキスト中から 5 曲を提出し、中 1 曲を各自選択、2 曲は試験官が指定し、全 3 曲を暗譜で弾き歌いする。 3. 声楽の試験ではないので、伴奏の技能を高め、試験に臨むことが望ましい。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション			第 16 回	『実用こどものうた』 p35-37
	第 2 回	『実用こどものうた』 P8-9			第 17 回	『実用こどものうた』 p38-40
	第 3 回	『実用こどものうた』 p10-11			第 18 回	『実用こどものうた』 p41-43
	第 4 回	『実用こどものうた』 p12-13			第 19 回	『実用こどものうた』 p44-46
	第 5 回	『実用こどものうた』 p14-15			第 20 回	『実用こどものうた』 p47-49
	第 6 回	『実用こどものうた』 p16-17			第 21 回	『実用こどものうた』 p50-52
	第 7 回	『実用こどものうた』 p18-19			第 22 回	『実用こどものうた』 p53-55
	第 8 回	『実用こどものうた』 p20-21			第 23 回	『実用こどものうた』 p56-58
	第 9 回	『実用こどものうた』 p22-23			第 24 回	『実用こどものうた』 p59-61
	第 10 回	『実用こどものうた』 p24-25			第 25 回	『実用こどものうた』 p62-64
	第 11 回	『実用こどものうた』 p25-26			第 26 回	『実用こどものうた』 p65-67
	第 12 回	『実用こどものうた』 p27-28			第 27 回	『実用こどものうた』 p68-70
	第 13 回	『実用こどものうた』 p29-30			第 28 回	『実用こどものうた』 p71 及び他楽曲の復習
	第 14 回	『実用こどものうた』 p31-32			第 29 回	『実用こどものうた』 前後期の復習
	第 15 回	『実用こどものうた』 p33-34(まとめ)			第 30 回	試験のリハーサル
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 各楽曲の旋律線及び伴奏パートのリズム打ち及びドレミによる声楽パートの歌唱練習。			復習： 声楽パートの旋律を書き取る練習を行うことが望ましい。 伴奏パート、特にへ音記号が確実に読め、鍵盤と一致しているかを確認しながら再練習。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 実技（80％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『実用こどものうた』（田口・高崎編、カワイ出版）					
参 考 文 献	授業内で指示					
注 意 事 項	電子キーボードでの演習が中心となるため、毎日の練習の積み重ねが上達のポイントとなる。コードネーム等に関する参考文献は、その場に応じてサブテキストとしてコピーを配布する。 授業中の私語・飲食は厳しく注意する。キーボードの上に飲食物を置かないこと。これらの注意に従わない者は学生証を提示の上、退室を命ずることがある。					

授 業 科 目	図 画 工 作		単位数	2	担当教員	染谷 哲夫
講 義 の 内 容	子どもたちの造形活動（あそぶ・えがく・つくる）を理解し展開するために、保育者として必要な基礎的な知識や技術を学ぶことをねらいとする。					
到 達 目 標	①造形についての基礎的な知識や技術を理解する。 ②制作活動では、自分らしい表現をめざして主体的に取り組む。 ③子どもたちとともに造形活動を楽しめる感性豊かな保育者を目指す。					
授 業 計 画	第 1 回	授業の主旨説明 出席カードの作成			第 16 回	平面表現（技法）のいろいろ①
	第 2 回	スケッチブックに記名（文字のデザイン）			第 17 回	平面表現（技法）のいろいろ②
	第 3 回	造形活動の意義と目的			第 18 回	石ころアート（着色）
	第 4 回	子どもの造形表現について理解			第 19 回	石ころアート（着色と表面仕上げ）
	第 5 回	形のとらえ方と表現①			第 20 回	ポップアップカードの仕組みについて
	第 6 回	形のとらえ方と表現②			第 21 回	ポップアップカードの制作（試作）
	第 7 回	色彩について（三原色・混色を中心に）			第 22 回	ポップアップカードの制作（本制作）
	第 8 回	自分を見つめて描く（線描き）			第 23 回	ポップアップカードの制作（本制作）
	第 9 回	自分を見つめて描く（線描き・着色）			第 24 回	切り紙（雪の結晶・星など）
	第 10 回	自分を見つめて描く（着色）			第 25 回	版画について
	第 11 回	立体（彫塑）について			第 26 回	スチレン版画（版をつくる）
	第 12 回	紙粘土で動物をつくる（成形①）			第 27 回	スチレン版画（刷り）
	第 13 回	紙粘土で動物をつくる（成形②）			第 28 回	スチレン版画（刷り）
	第 14 回	紙粘土で動物つくる（着色）			第 29 回	段ボール額縁の制作
	第 15 回	前期まとめ			第 30 回	まとめと自己評価
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 課題に対して資料等の準備及び構想を考える。			復習： 納得できる自己表現とするためには授業外での取り組みも必要。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 作品（５０％）、授業態度（５０％）					
教 科 書	『楽しい造形表現』（子ども造形表現研究会、圭文社）					
参 考 文 献	必要に応じて案内する。					
注 意 事 項	・ 創作活動が中心となるため、自ら考えて手を動かさない限り何も生まれこない。作品重視ではないが誠実で完成度の高い作品づくりをめざす。提出期日を守る。 ・ 制作に関する用具や材料費は個人負担 アクリル絵の具・筆・パレット等は学校で一括購入予定（約３，５００円）、その他必要な物は自分で用意する。					

授 業 科 目	体 育 （ 幼 児 体 育 を 含 む ）		単 位 数	2	担 当 教 員	塩 崎 みづほ
講 義 の 内 容	子どもの生活は遊びが中心にあるといわれるくらい遊びによって成長し、生きていくのに必要なことを真似し学んでいきます。本講義では、子どもの発育発達の特徴を理解し、それに即した運動遊びについて学び、さらには指導法について学びます。					
到 達 目 標	① 子どもの発育発達段階に応じた運動遊びの意義とその内容を理解する ② 運動遊びの指導法について理解する ③ 幼児教育者として自ら動ける身体づくりと、体力の維持・向上の実践					
授 業 計 画	第 1 回	乳幼児期の運動遊びの意義			第 16 回	運動遊びの実際
	第 2 回	鬼ごっこについて考えよう			第 17 回	幼児体操
	第 3 回	豆袋を使った遊び			第 18 回	ボールを使った遊び
	第 4 回	フープを使った遊び			第 19 回	巧技台を使った遊び
	第 5 回	縄を使った遊び			第 20 回	とび箱を使った遊び
	第 6 回	マットを使った遊び			第 21 回	サーキット遊び
	第 7 回	乳幼児の運動発達の特徴			第 22 回	運動遊び・表現遊びの指導案を作成してみよう
	第 8 回	表現遊び① ーリズムカルな表現遊びを体験しようー			第 23 回	運動遊び・表現遊びの指導を実際に行ってみよう
	第 9 回	表現遊び② ーシンメトリーの動きを体験しようー			第 24 回	フリスビーを作って遊ぼう
	第 10 回	表現遊び③ ー群の動きを創ってみようー			第 25 回	身近なものを使った遊び
	第 11 回	表現遊び④ ーだんだんできあがり体験しようー			第 26 回	絵本を使った表現遊び①
	第 12 回	表現遊び⑤ ー小作品を創ろうー			第 27 回	絵本を使った表現遊び②
	第 13 回	表現遊び⑥ ー小作品の踊りこみをしようー			第 28 回	絵本を使った表現遊び③
	第 14 回	表現遊び⑦ ー発表会ー			第 29 回	絵本を使った表現遊び④
	第 15 回	発表会の振り返り 授業のまとめ			第 30 回	幼児期の運動遊びの必要性についてディスカッションしよう
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 次回に備え教科書の該当する箇所を熟読してくる。 ストレッチ等を日々の生活に取り入れ、実践する。				復 習： 本時行った活動内容をノートにまとめる。	
成 績 評 価 の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（２０％）、課題（２０％）、作品（１０％）、発表（１０％）、実技（２０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	『子どもの運動・表現遊び』（宮下恭子、大学図書出版）					
参 考 文 献	『保育と幼児期の運動あそび』（岩崎洋子編、萌文書林）『０歳からはじめるうごきづくり』（太田昌秀他著、幻冬舎ルネサンス）『保育の中の運動あそび』（石井美晴他編、萌文書林） 『０～５歳児のたのしい運動あそび』（黒い信隆・山本秀人編著、いかだ社）					
注 意 事 項	実技の際は、学校指定の体操着を必ず着用すること 出席を重視する 意欲をもって積極的に取り組む姿勢を評価する					

授 業 科 目	乳 児 保 育		単位数	2	担当教員	伊能 恵子
講 義 の 内 容	乳幼児期における、発達の姿を心・体・生活等といった細かい項目に分けて明確に捉えることを目標とする。 特に保育現場における援助方法の概要を提供することにより、乳幼児期の大切さと保育の重要性の実感を高め、理論と実践を結びつけることを本講義のねらいとする。そのため、乳幼児期の心・体の発達と、その発達を支える保育援助の実践との理解を以下の授業計画に沿って深めていきたい。 また、保育士の専門性が求められている昨今、保育士資質向上へ向けて、学生個人個人が目標に照らし合わせて次の学びの第一歩として活用できるよう、講義内容を個別の添削指導により支援していく。					
到 達 目 標	乳幼児の発達を支える理論と、乳幼児期を支える保育現場の実践とを結びつけることを、本講義の到達目標に据える。そのため、学生には毎回の講義におけるレポートを義務付け、毎回の講義において定めた各内容を受講者全員に理解していただくことを到達目標とする。					
授 業 計 画	第 1 回	生涯発達という捉え方			第 16 回	発達のながれ
	第 2 回	乳幼児期（１）			第 17 回	人との関わりの発達と保育援助
	第 3 回	乳幼児期（２）			第 18 回	保育所保育指針と保育援助
	第 4 回	乳幼児期（３）			第 19 回	「養護」と保育援助（１）
	第 5 回	乳幼児期（４）			第 20 回	「養護」と保育援助（２）
	第 6 回	発達の姿			第 21 回	「教育」と保育援助
	第 7 回	睡眠の発達と保育援助			第 22 回	乳児期の母子相互作用
	第 8 回	視覚の発達の保育援助			第 23 回	乳児期の重要性（１）
	第 9 回	聴覚の発達と保育援助			第 24 回	乳児期の重要性（２）
	第 10 回	知覚の発達と保育援助			第 25 回	乳児期の保育援助（１）
	第 11 回	情緒の発達と保育援助			第 26 回	乳児期の保育援助（２）
	第 12 回	言葉の発達と保育援助（１）			第 27 回	保護者支援
	第 13 回	言葉の発達と保育援助（２）			第 28 回	保育者としての資質（１）
	第 14 回	認知の発達と保育援助			第 29 回	保育者としての資質（２）
	第 15 回	まとめ（１）			第 30 回	まとめ（２）
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 毎回の講義の際に、次回の講義における予習課題を明示し、次回の講義の際提出を求める。			復習： 講義終了後、講義の理解を深め、理解の度合いを学生個人個人が確認でき、習得に役立てるための復習課題を課す。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、課題（５０％）、					
教 科 書	授業中に追って指示する					
参 考 文 献	『保育士養成講座：発達心理学』（全国社会福祉協議会）、『実習育児学』（吉岡毅著、日本小児医事出版） 『保育と保健』（日本保育保健協議会）、『幼児教育と脳』（澤口俊之著、文芸春秋）、 『子どもの脳の発達臨界期・敏感期』（榎原洋一著、講談社）					
注 意 事 項						

授 業 科 目	障 害 児 保 育		単位数	2	担当教員	小林 ますみ
講 義 の 内 容	WHO（世界保健機関）が求める I C F（国際生活機能分類）の共生の理念のもと、保育所や幼稚園において苦手をもった障害児が一般的に在籍するようになり、ともに育ち学び合う保育環境が重要になっている。保育者としての基礎的な知識や具体的な対応方法、そして関係機関との連携システム、国の障害者施策や子育て支援政策の理解が必要になっている。その内容を資料や事例を通して分かりやすく講義する。					
到 達 目 標	・ 障害児保育とは何かが分かる。 ・ 個々の障害（知的・視覚・聴覚・肢体不自由・病弱）の支援方法を知る。 ・ 近年注目される発達障害のアセスメントや支援方法について保育の場で対応できるようにする。 ・ 児童福祉法や障害者総合支援法、発達支援センター・市町村相談支援事業所等、支援方法について知る。					
授 業 計 画	第 1 回	ガイダンス 障害児保育とは何か 授業の進め方や約束事について確認する			第 16 回	視覚障害の理解と支援について知る
	第 2 回	保育に関わる現状の理解を進める （日本の人口と出生率 障害者統計 障害者の定義）			第 17 回	聴覚障害の理解と支援について知る
	第 3 回	障害児保育の歴史と考え方の変遷と今を知る			第 18 回	肢体不自由児の理解と支援について知る
	第 4 回	障害者福祉の全体像と子育て支援制度を学ぶ			第 19 回	医療的ケアの理解と支援について知る
	第 5 回	児童福祉法と障害者総合支援法について学ぶ			第 20 回	心のケアと情緒の発達について知る
	第 6 回	障害の種別と特別支援学校について知る			第 21 回	気になる子どものケアと方法①発達障害の事例
	第 7 回	障害のアセスメントや診断基準について知る			第 22 回	気になる子どものケアと方法②虐待の事例
	第 8 回	知的障害への対応と支援について知る			第 23 回	障害のある子どもの保育と指導計画
	第 9 回	自閉症の特性に応じた指導法を知る			第 24 回	障害のある子どもの保育実践と評価
	第 10 回	ADHD の特性に応じた指導法を知る			第 25 回	障害のある子どもの就学指導と連携
	第 11 回	LD（学習障害）の特性に応じた指導法を知る			第 26 回	保護者への障害受容支援
	第 12 回	虐待児の増加と保育者としての対応を知る			第 27 回	保護者への育児支援と今日的課題
	第 13 回	乳幼児への共感的係わりの意味について知る			第 28 回	世界の障害児保育について知る
	第 14 回	保護者への対応とカウンセリング：実技			第 29 回	障害児の子育て支援と新しい施策の動向
	第 15 回	前期のまとめ			第 30 回	これからの障害児の保育者に求められるもの
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： シラバスの内容を教科書や参考文献やインターネットで調べ、あらかじめ把握して授業に参加する。			復 習： 毎回、要点をまとめる提出課題をだす。資料を整理し、授業の内容を再確認してほしい。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、課題（３０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	最新保育講座 15 第 2 版『障害児保育』（鯨岡峻編著 田中康雄他、ミネルヴァ書房）					
参 考 文 献	『原初的コミュニケーションの諸相』（鯨岡峻著、ミネルヴァ書房） 『発達障害のアセスメントとケーススタディ 7』（坂爪一幸編著、学文社） 『保育者の地平』（津守真著、ミネルヴァ書房）					
注 意 事 項	・ 出欠席については、学生便覧に則る。 ・ 授業中の私語や携帯の使用を禁ずる。 ・ 遅刻・早退の場合は時間と理由を書面にて申し出る。 ・ 決められた座席で授業を受ける。					

授 業 科 目	社 会 的 養 護 内 容		単位数	1	担当教員	佐藤 千代子
講 義 の 内 容	本講義では、社会的養護の基本的仕組み、実施体系、社会的養護を担う主な児童福祉施設の概要、そこでの子どもの暮らしを知るとともに、職員の日常生活支援、治療的支援、自立支援等について学ぶ。また、社会的養護における児童の権利擁護やその仕組み、保育士の倫理と責務についても学ぶ。					
到 達 目 標	・ 児童福祉施設の概要と施設で行われている支援の実際について学ぶ。 ・ 援助を行う際に必要となる知識や技術を身につける。 ・ 児童の権利擁護や保育士の倫理および責務について学ぶ。 ・ 社会的養護が必要となる背景について理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	社会的養護の基本的な仕組み ― 社会的養護とは何か				
	第 2 回	社会的養護の実施体系				
	第 3 回	社会的養護の決定に関する基本的仕組み ― 児童相談所				
	第 4 回	施設養護の特性および実際 ― 乳児院				
	第 5 回	施設養護の特性および実際 ― 児童養護施設 ①				
	第 6 回	施設養護の特性および実際 ― 児童養護施設 ②				
	第 7 回	施設養護の特性および実際 ― 母子生活支援施設				
	第 8 回	施設養護の特性および実際 ― 児童自立支援施設				
	第 9 回	里親制度の特性および実際 ― 里親制度と養子縁組制度				
	第 10 回	支援の計画と内容 ― 子どもの自立支援の過程				
	第 11 回	支援の計画と内容 ― 自立支援計画の作成の実際				
	第 12 回	日常生活支援				
	第 13 回	治療的支援				
	第 14 回	子どもの権利を守る仕組み				
	第 15 回	保育士の倫理と責務				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 難しい用語が頻繁に出てくるので、必ず予習をして講義に臨むこと。			復習： 理解を深めるために、毎回復習をすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、レポート（２０％）、授業態度（３０％）					
教 科 書	プリントを配布する。					
参 考 文 献	適宜紹介する。					
注 意 事 項	プリントや資料を使って分かり易い講義を行うが、分からない点があればそのままにしないで質問すること。 プリントは、ファイルにきちんと保管すること。複数回、復習を兼ねたレポートの提出を求める。 授業中の私語、飲食、携帯電話の使用は厳禁。					

授 業 科 目	保 育 所 実 習 I	単位数	2	担当教員	土屋 由
講 義 の 内 容	保育所実習Ⅰは、保育所実習のうち前期実習にあたり、実習の段階としては「見学・観察実習」となる。前期実習では、保育所の役割と機能を理解する、子どもの発達や援助への理解を深める、保育内容や環境への理解を深める、保育の計画や記録・省察による保育の実際への理解を深めるといった内容を中心に学ぶ。				
到 達 目 標	保育が具体的に展開される場に身をおき、子どもたちや保育者と生活を共にし、自らの直接体験や実習日誌での省察を通して、保育の意義や保育者の役割を学ぶことが目標である。				
授 業 計 画	前期保育所実習は、原則として第2学年の2月に実施する（2週間）。 見学・観察実習の主な内容 1. 保育所の役割と機能 (1) 保育所の生活と一日の流れ (2) 保育所保育指針の理解と保育の展開 2. 子ども理解 (1) 子どもの観察とその記録による理解 (2) 子どもの発達過程の理解 (3) 子どもへの援助やかかわり 3. 保育内容・保育環境 (1) 保育の計画に基づく保育内容 (2) 子どもの発達過程に応じた保育内容 (3) 子どもの生活や遊びと保育環境 (4) 子どもの健康と安全 4. 保育の計画、観察、記録 (1) 保育課程と指導計画の理解と活用 (2) 記録に基づく省察・自己評価 5. 専門職としての保育士の役割と職業倫理 (1) 保育士の業務内容 (2) 職員間の役割分担や連携 (3) 保育士の役割と職業倫理				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 実習に向けて、必要な準備を行うこと。		復習： 実習の内容を振り返り、課題を明確にすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実習施設による実習評価（50％）、実習日誌（30％）、実習課題（20％）				
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会） 『保育所保育指針』				
参 考 文 献	授業において紹介する。				
注 意 事 項	実習に参加する学生は、心身ともに健康であり、学内における教科の履修状況・出席・学習態度が良好でなければならない。常に自分自身を見つめ直し、保育者になるための努力を続けることが求められる。				

授 業 科 目	施 設 実 習 I	単位数	2	担当教員	近喰晴子・秋山展子
講 義 の 内 容	施設実習Ⅰは、保育所以外の児童福祉施設と知的障がい者施設で行われる実習である。本学の主な実習施設として、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、知的障がい者支援施設などがある。原則として、１１日間施設に宿泊又は通勤し、利用者と生活をともにしながら実習を行う。				
到 達 目 標	・事前準備をしっかりと行い、実習施設について理解しておく。 ・利用者一人一人への適切な支援のあり方を学ぶ。 ・施設の機能を学ぶ。				
授 業 計 画	・実習施設の一日の生活の流れを知る。 ・保育者の一日の職務を知る。 ・利用者の一日の過ごし方や活動内容を学ぶ。 ・自由時間の過ごし方やレクリエーションについて学ぶ。 ・衣食住に関する支援の実際や配慮事項について学ぶ。 ・日中活動における支援のあり方について学ぶ。 ・福祉施設における保育者の役割について学ぶ。 ・福祉施設内のチームワークのあり方について学ぶ。 ・施設の機能について多様な視点から学ぶ。 ・福祉事務所、児童相談所など他機関との連携について学ぶ。 ・利用者や施設について総合的に学び、実習を振り返る。 以上１１日間の学外実習をする。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 事前指導の受講が必須。		復習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実習園評価（５０％）、実習記録（３０％）、実習課題（２０％）				
教 科 書					
参 考 文 献					
注 意 事 項	施設実習派遣には、「福祉施設実習研究Ⅰ」の履修が必要条件である。				

授 業 科 目	保 育 所 実 習 II	単位数	2	担当教員	土 屋 由
講 義 の 内 容	保育所実習Ⅱは、保育所実習Ⅰでの学びを踏まえ、保育者として必要な資質・能力・技術を習得すること、さらには子どもの保育及び保護者・家庭への支援について総合的に学ぶ。実習の段階としては「参加・責任実習」であり、子どもの生活や発達へのかかわりを更に深め、保育者として職務内容や職業倫理についても理解を深めることが必要である。				
到 達 目 標	子どもの生活や発達、保育者の役割へのより一層の理解を深めること、指導計画の作成・実践・省察・評価から保育の過程を理解することを到達目標とする。				
授 業 計 画	後期保育所実習は、原則として第3学年の9月（2週間）に実施する。 参加・責任実習の主な内容 1. 保育所の役割や機能の具体的展開 (1) 養護と教育が一体とな行われる保育 (2) 保育所の社会的役割と責任 2. 観察に基づく保育理解 (1) 子どもの心身の状態や活動の観察 (2) 保育者の動きや実践の観察 (3) 保育所の生活の流れや展開の把握 3. 子どもの保育及び保護者・家庭への支援と地域社会などとの連携 (1) 環境を通して行う保育、生活や遊びを通して総合的に行う保育の理解 (2) 入所している子どもの保護者支援と地域の子育て家庭への支援 (3) 地域社会との連携 4. 指導計画の作成、実践、観察、記録、評価 (1) 保育課程に基づく指導計画の作成・実践・省察・評価と保育の過程の理解 (2) 作成した指導計画に基づく保育実践と評価 5. 保育士の業務と職業倫理 (1) 多様な保育の展開と保育士の業務 (2) 多様な保育の展開と保育士の職業倫理 6. 自己の課題の明確化				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 実習に向けて、指導案の作成など必要な準備を行うこと。		復習： 実習の内容を振り返り、課題を明確にすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実習施設による評価（50％）、実習日誌（30％）、実習課題（20％）				
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会） 『保育所保育指針』				
参 考 文 献	授業にて紹介する。				
注 意 事 項	保育に関連する教科書・参考文献を読む、また遊びの具体例などについて情報を集めて習熟しておくなど、実習に向けて積極的に自己学習のプランを立て実行すること。				

授 業 科 目	施 設 実 習 II	単位数	2	担当教員	秋山 展子
講 義 の 内 容	施設実習Ⅱは、児童福祉法第 40 条に規定される児童厚生施設の児童館における実習である。児童館は、子どもへの遊びの提供だけでなく、地域の子育て支援、児童健全育成事業の実施場所でもあり、母親クラブの活動支援、児童を取り巻く地域社会の組織化への取り組み等の児童厚生員としての職務を、実際の活動を通して学ぶ。				
到 達 目 標	・ 児童館の役割、意義について実践を通じて理解する。 ・ 一日の活動プログラムを理解する。 ・ 活動へ参加して経験を積む。 ・ 職員、児童の家族、地域社会との関係を学ぶ。				
授 業 計 画	児童館実習の内容 ① 児童館の役割、意義について実践を通じて理解 ② 一日の活動プログラムの理解 ・ 母親クラブの活動について ・ 館全体のプログラム ・ 放課後児童クラブのプログラム ③ 活動への参加 ・ 指導職員の助手の立場に立って、参加実習から、実習後半では部分指導実習、責任担当実習にはいる。 ④ 職員、児童の家族、地域社会との関係の学習 ・ 職員集団等専門家集団のチームワーク ・ 児童の家庭、地域との関わり方 ・ 児童館と高齢者・ボランティア等の関わりを学ぶ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 事前指導の受講が必須。			復習：	
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実習評価（８０％）、実習日誌（２０％）				
教 科 書					
参 考 文 献					
注 意 事 項	児童館実習派遣には、「児童館の機能と運営」と「福祉施設実習研究Ⅱ」の履修が必要条件である。				

授 業 科 目	保 育 所 実 習 研 究 I		単位数	1	担当教員	土屋 由
講 義 の 内 容	保育所実習研究は、前期保育所実習（２年次２月）の事前事後指導である。事前指導では、保育所実習の意義や目的を理解する、実習課題を明確にする、実習記録の意義や記録方法・指導計画を学ぶなど、実習に関する必要な知識と心構えを身につけることを目的とする。事後指導では、実習に対する自己評価・反省を求め、後期保育所実習に向けての課題を明らかにし、前期実習から後期実習へと保育についての学びを深めていけるよう必要な準備を行っていく。					
到 達 目 標	実習に関する必要な知識と心構えを身につけ、心身ともに実習に向けての準備を行うことが目標である。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション				
	第 2 回	保育所実習の意義・目的の理解				
	第 3 回	前期実習の内容の理解				
	第 4 回	保育所についての理解				
	第 5 回	実習の心構え				
	第 6 回	実習に必要な書類の作成①				
	第 7 回	実習に必要な書類の作成②				
	第 8 回	実習課題を明らかにする				
	第 9 回	実習記録の意義の理解				
	第 10 回	実習記録の実際と方法①				
	第 11 回	実習記録の実際と方法②				
	第 12 回	実習に必要な実技の確認				
	第 13 回	オリエンテーションと実習中の心得				
	第 14 回	実習内容の振り返りとまとめ				
	第 15 回	後期保育所実習への課題を明確にする				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 実習に向けて、必要な準備を行うこと。			復習： 実習の内容を振り返り、課題を明確にすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート・課題（６０％）、授業態度（３０％）、手続き（１０％）					
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会） 『保育所保育指針』					
参 考 文 献	授業において紹介する。					
注 意 事 項	授業では、保育園での子どもの生活や実際の実習内容のイメージがもてるように、視聴覚教材やワーク・シートを活用する。実習に関する知識を身につけ、必要な準備を進めるために、原則として欠席はしないこと。					

授 業 科 目	福 祉 施 設 実 習 研 究 I		単位数	1	担当教員	近喰晴子・秋山展子
講 義 の 内 容	保育所を除く児童福祉施設を中心とした実習準備のための授業である。実習の目的や意義、実習内容等福祉施設実習に必要な知識や技能を学ぶ。また、福祉施設利用者の権利擁護、施設職員としての倫理観、実習生としての勤務のあり方についても学ぶ。実習に必要な書類の提出のほか実習施設から届けられる様々な情報も授業時に伝える。					
到 達 目 標	不安なく効果的な実習ができるよう万全の準備をすることがこの授業の到達目標である。そのためには、授業を休むことなく出席することも目標としたい。					
授 業 計 画	第 1 回	施設実習の位置づけ、意義について 実習申込書（誓約書）の配布				
	第 2 回	実習の要件、実習の形態、実習中に必要とされる事項 実習申込書の提出				
	第 3 回	養育を必要とする福祉施設における実習				
	第 4 回	障がいをもつ人たちのための福祉施設での実習				
	第 5 回	実習希望調査 配当資料の提出				
	第 6 回	養護系福祉施設における実習内容				
	第 7 回	障がいをもつ方が利用する福祉施設における実習内容				
	第 8 回	実習課題について				
	第 9 回	実習書類の記入と提出				
	第 10 回	実習施設におけるオリエンテーションについて				
	第 11 回	実習施設研究				
	第 12 回	実習日誌の書き方				
	第 13 回	実習書類の確認 細菌検査、実習施設に提出するレポートや誓約書等				
	第 14 回	実習直前指導、各種報告書の準備				
	第 15 回	実習評価、個別面談				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習：	生活支援に必要とされる生活技術の確認 実習施設研究 障がいや病気に対する知識 養護を必要とする乳幼児の実態や社会の状況			復 習：	福祉系、養護系テキスト等の熟読 児童福祉法や関連法規の復習
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（５０％）、課題（２０％）、授業態度（２０％）、実習書類提出（１０％）					
教 科 書	『福祉施設実習ハンドブック』（内山元夫、みらい）					
参 考 文 献						
注 意 事 項						

授 業 科 目	保 育 所 実 習 研 究 Ⅱ		単位数	1	担当教員	土屋 由
講 義 の 内 容	保育所実習研究Ⅱは、後期保育所実習（３年次９月）の事前事後指導である。事前指導では、後期保育所実習の目的や内容を理解すること、実習課題を明確にすること、指導計画の作成や実習に必要な実技を確認することを行っていく。事後指導では、実習の総括と自己評価を求め、実習報告会などの振り返りの場を通して、保育についての課題を明確にしていく。					
到 達 目 標	実習に関する必要な知識と心構えを身につけ、心身ともに実習に向けての準備を行うとともに、実習終了後に実習での学びの総括と評価を行い、保育についての課題を明確にすることが目標である。					
授 業 計 画	第１回	後期実習の目的・内容の理解				
	第２回	実習に必要な書類の作成①				
	第３回	実習に必要な書類の作成②				
	第４回	実習課題を明らかにする				
	第５回	指導案作成上の基本の確認				
	第６回	指導案の立案①幼児クラス主活動				
	第７回	指導案の立案②幼児クラス生活場面				
	第８回	指導案の立案③未満児クラスの場合				
	第９回	指導案の立案④未満児クラスの場合				
	第１０回	実習に必要な実技の確認				
	第１１回	実習記録の実際と方法				
	第１２回	実習内容の振り返りとまとめ				
	第１３回	実習報告会の準備				
	第１４回	実習報告会				
	第１５回	実習の総括				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 実習に向けて、必要な準備を行うこと。			復習： 実習の内容を振り返り、課題を明確にすること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート・課題（６０％）、授業態度（３０％）、手続き（１０％）					
教 科 書	『実習の手引き』（実習委員会） 『保育所保育指針』					
参 考 文 献	授業において紹介する。					
注 意 事 項	指導案の作成にあたり、様々な授業を通して学んできた遊びや造形表現のアイデアが必要になる。子どもとの活動に際して、役に立ちそうなものをノートにまとめておくなど、学びに対する主体的な態度をもつよう心掛けてほしい。実習について必要な準備を進めるため、原則として欠席はしないこと。					

授 業 科 目	福 祉 施 設 実 習 研 究 Ⅱ	単 位 数	1	担 当 教 員	秋 山 展 子
講 義 の 内 容	施設実習Ⅱである児童館実習を履修する学生は必ず履修しなければならない。授業は実習の前後にわたって実施される。実習前の授業では、児童館の実際の活動内容を理解するため、先輩の実習報告を参考に理解を深め、実習への動機付けを図る。その上で実習調査書の作成をはじめ、実習の目的やねらいの理解、オリエンテーション、日誌の記入方法、実習手続き書類の作成等の指導を行う。				
到 達 目 標	・児童館実習の意義を理解する。 ・社会性を養う。 ・自身の課題を探究する。				
授 業 計 画	第 1 回	児童厚生員一資格の説明と取得までの手順の説明			
	第 2 回	児童館実習参加申込書の配布と申込書の提出			
	第 3 回	児童館実習の意義、目的の理解			
	第 4 回	児童館実習参加者の体験談を聞き、その感想文を通して、文章の書き方を学ぶー1			
	第 5 回	児童館実習参加者の体験談を聞き、その感想文を通して、文章の書き方を学ぶー2			
	第 6 回	調査書の作成ー下書き			
	第 7 回	調査書の作成ー下書き			
	第 8 回	調査書の作成ー清書			
	第 9 回	実習日誌の記入の意義について			
	第 10 回	実習日誌の記入方法(例示)			
	第 11 回	オリエンテーションについて			
	第 12 回	指導案の概要と作成			
	第 13 回	細菌検査の方法とその方法			
	第 14 回	実習後の対応・礼状等ーについて			
	第 15 回	実習直前指導（実習への心構え、緊急時への対応の確認等々）			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習：	実習後に、児童館からの評価を土台に、良かった点、反省点や今後の課題を明確にし、次の実習へとつなげていく。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（30％）授業態度（70％）				
教 科 書	授業でプリントを配布				
参 考 文 献					
注 意 事 項	児童館実習派遣には、本授業の他に「児童館の機能と運営」の履修が必要条件である。				

授 業 科 目	国 語 教 育	単位数	2	担当教員	宮木 孝子
講 義 の 内 容	初等教育における、国語教育のねらいを「小学校学習指導要領」から理解し、児童への国語教育の目的を明確に理解すること。また、その実践に必要な国語表現の基礎（読む・書く・伝える・感じる）を学習する。				
到 達 目 標	・ 国語教育の目的と必要性、重要性を理解する。 ・ 日本語の文章の種類に応じた読みを、意識的に行うことができるようになる。 ・ 幼稚園教諭や保育者は、国語を正しく次の世代に伝える立場であることを理解する。 ・ 幼稚園教育期間は、初等教育への大切な導入期間であり、基礎を築く期間であることを理解する。				
授 業 計 画	第 1 回	授業案内と導入 国語とはなにか、国語教育の目的			
	第 2 回	小学校学習指導要領・国語科			
	第 3 回	小学校学習指導要領			
	第 4 回	学年毎のポイント 1 ～ 2 年	教材を考える		
	第 5 回	学年毎のポイント 3 ～ 4 年	教材を作ろう		
	第 6 回	学年毎のポイント 5 ～ 6 年	教材の発表		
	第 7 回	事実を書く・考えを書く・感じたことを書く		200字でまとめる	
	第 8 回	読むこと・読み取る力	要旨をまとめる・簡潔な文の必要性		
	第 9 回	児童詩を読む	理解・鑑賞		
	第 10 回	童謡詩を読む	〃		
	第 11 回	童話を読む	〃		
	第 12 回	小説読む	〃		
	第 13 回	伝統的言語文化	低学年の学習		
	第 14 回	伝統的言語文化	高学年の学習		
	第 15 回	国語教育の現在			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 毎回課題を出すので、その下調べや、準備をする。		復 習： 毎時間、ノートを取り、その記述を確認し、質問や疑問を見つける。5回毎に、復習テストを行う。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（70％）、課題（20％）、作品（5％）、発表（5％） ＊授業態度は悪い場合、減点します。				
教 科 書	『小学校学習指導要解説』（文部科学省、東洋館出版社）				
参 考 文 献	『絵本のせかい こどもの世界』（松岡享子 、ニホンエディタースクール出版部） など、授業中に紹介。				
注 意 事 項	学習した内容をノートすること。（自分で作成したノートは、筆記試験の時、持ち込み可。コピーは不可。） 復習と確認を行うことで、理解が深まり、質問も出てくる。質問歓迎。 ＊授業時間内の私語は、厳禁です。携帯電話などは、OFF に。飲食禁止。				

授 業 科 目	数 量 教 育		単位数	2	担当教員	星野 治
講 義 の 内 容	この授業では、身の回りのあらゆる事象を「数」・「量」・「形」の観点から見つめ直すことを通して、「数」・「量」・「形」の意味するものや、「数」・「量」・「形」の取り扱い方を、改めて確認します。					
到 達 目 標	・ 私たちの社会は、「数」・「量」・「形」を抜きにしては成り立たないことを、再確認していただきます。 ・ 子供たちが幼少時から「数」・「量」・「形」に慣れ親しんでいくことは、彼らの社会感覚の形成過程に際して重要な鍵の一つとなるであろうことを、各人なりに理解していただきます。 ・ 幼児の将来の学校活動（例：算数授業への参加など）や社会活動（例：買い物など）に無理なく結び付けられるような、数量教育指導のありかたを考えていただきます。					
授 業 計 画	第 1 回	数の面白さ・不思議さ “数” のもつ魅力を概観します。				
	第 2 回	言葉としての数 “数” が言葉の一種であることを再確認します。				
	第 3 回	数の種類 実際に使われている、いろいろな“数”を概観します。				
	第 4 回	数量と図形との関係 “かず” と “かたち” との対応を概観します。				
	第 5 回	生活の中の数・量・形 日常の諸活動の中に登場する“数”を概観します。				
	第 6 回	遊びの中の数・量・形① いろいろな遊びの中に垣間見られる“数”を概観します。				
	第 7 回	数・量に関する先人の知恵① 実用されている様々な“単位”の意味を概観します。				
	第 8 回	数・量に関する先人の知恵② これまでに考案されてきた、実用的な数値処理手法について概観します。				
	第 9 回	文芸作品の中の数・量・形① “数” の観点から、往年の名作（主に文章作品）を鑑賞し直します。				
	第 10 回	文芸作品の中の数・量・形② “数” の観点から、往年の名作（主に映画作品）を鑑賞し直します。				
	第 11 回	小・中学校の算数・数学① 文部科学省の学習指導要領のうち、小学校の算数に関する内容を概観します。				
	第 12 回	小・中学校の算数・数学② 文部科学省の学習指導要領のうち、中学校の数学に関する内容を概観します。				
	第 13 回	遊びの中の数・量・形② 数遊びそのものを通して、“数” の面白さを概観します。				
	第 14 回	幼児教育における数・量・形 未就学児にとって必要な“数” とは何かを、改めて見直します。				
	第 15 回	全体のまとめ 「数」・「量」・「形」に対する教育のありかたを、各自なりに整理します。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 予習が必要とされる事項については、担当教員がそのつど説明します。			復習： 復習が必要とされる事項については、担当教員がそのつど説明します。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（８０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書						
参 考 文 献	『幼稚園教育要領』（文部科学省）、『小学校学習指導要領』（文部科学省）、『中学校学習指導要領』（文部科学省）					
注 意 事 項	・ 授業は講義形式ですが、解題一辺倒だけではなく、算数（・数学）に関する話題や文芸作品についても取り扱います。 ・ 小学校レベルの算数問題は、一見単純そうですが、いざ解こうとすると手こずることが多いものです。決して油断しないでください。 ・ 他の授業で使用する教科書や参考文献を、この授業でも使用する場合があります。 ・ この授業で取り扱う話題は、数学上の話題とは異なり、解答が一つだけであるとは限りません。また、個々の話題の内容を理解するには、幅広い背景知識が求められます。“自分自身ならばこう考える” という能動的な態度で、授業に参加してください。					

授 業 科 目	保 育 者 論		単位数	2	担当教員	石河 信雅
講 義 の 内 容	少子化、高齢化、情報化社会、知識基盤社会などと現代は表現されている。この様な、社会の変化に伴い保育や保育者の役割が変化しつつある。しかし、保育者はいつでも子どもと共に「過去」「現在」「未来」を生きていかなければならない。子どもと共に、保護者と共に、同僚や地域社会と共に生きることが重要である。そのためにも専門家としての職務、資質、専門性、現代社会における保育者の在り方等について、理解を深める。					
到 達 目 標	1 保育の「質」について自分自身の考えが持てる。 2 保育者を目指す身として「今」自分は何をしなければならないかをしっかり見据え、分析し、学びに取り組む姿勢をつくる。 3 保育者とは常に学び続けなければならない存在である、そのためにも学びの手法を身に付ける。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション 本講義の到達目標をしっかりと確認し、これからの学びについての心構えを持つようにする。また、講義についての受講態度や講義内容について理解し各自の意欲化を図る。				
	第 2 回	保育の質について。 保育の質について、各種の「論」を考察し、これから目指すべき幼稚園や保育園等での保育の質について様々な考えがあることを理解する。				
	第 3 回	保育者の質について。保育の質について理解し、その保育を実践する保育者とはどの様であるべきか、その質とはどのようなものかを理解し、これからの学びを自分自身の成長に資するよう意欲化を図る。				
	第 4 回	先人の教えに学ぶ。先人の教えなどにより保育のあるべき姿について考察し、保育者としてあるべき姿を描き、実践者としての質を高めるための方法を理解する。				
	第 5 回	保育の基礎。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型 認定こども園教育・保育要領」を参考に、保育の実際や保育の基本について理解する。				
	第 6 回	保育者として行うべき仕事について。保育者として、実際に行うべき仕事について実践事例から学ぶ。特に、幼稚園前期実習前でもあるので実習において何を学ぶべきかを理解する。				
	第 7 回	保育者として身に付けておきたい資質について。保育者として身に付けておきたい資質の一つとして、コミュニケーション能力がある。コミュニケーション能力とは何かを実践をとおして学び理解する。				
	第 8 回	保育者として、育てたい幼児像を描く。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型 認定こども園教育・保育要領」を参考にしながら、育てたい幼児像に迫り考察する。				
	第 9 回	保育実践の実際。子どもたちの実態さらに保護者の願い、社会の様々な要求に応える保育とはどの様であるべきかを分析し、考察する。理想とすべき保育実践を各自のなかで明らかにする。				
	第 10 回	保育者として「理想」の保育を行うために「今」何を学び、何を身に付ければよいか。理想とする保育実践を行うために「今」何を学び、どのような資質を身に付けておくべきかを理解する。				
	第 11 回	子どもの発達と保育内容。子どもの発達について専門領域で学んだ内容を保育の実践に活かす方法について、事例をもとに学び理解する。				
	第 12 回	子育て支援、地域との連携について。子育て支援の実際や地域との連携の実際について事例を通して学び理解する。特に、子育て支援は核家族化における現代社会において重要な事柄であることを理解する。				
	第 13 回	保幼小連携について。保育園、幼稚園、認定こども園と小学校との連携は「今」非常に重要な課題である。特に、小学校での小1プロブレムなどの課題解決のためにもその重要性を理解しておかなければならない。				
	第 14 回	現代社会の情勢について。保育は、社会情勢の在り方に大きく左右される側面を持つ。社会情勢を様々な視点から観られる様になることは保育者として身に付けておきたい資質である。中庸な目での情報収集の在り方について理解する。				
	第 15 回	保育者の成長と同僚性、そしてまとめ。保育者は常に学び続けなければならない。そのためにも、学び方を身に付け同僚との学びの重要性について実践事例から学び理解する。いつまでも自分を磨き成長させる保育者となることの重要性を理解する。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 講義内容について自分自身で見直し、身に付けるようにする。また、関連事項を自分なりに掘り起こし、学びを広げるようにする。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（５０％）、課題（３０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	『幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針』＜原本＞ （内閣府・文部科学省・厚生労働省、チャイルド本社）					
参 考 文 献	講義の中で随時提示する。					
注 意 事 項	教科書については、教育・保育要領や教育要領、保育指針の原本を所持していれば、それを使用する。 特にチャイルド本社のものである必要はない。					

授 業 科 目	教 育 社 会 学		単位数	2	担当教員	越川 葉子
講 義 の 内 容	本講義では、教育という身近な営みを、社会学という学問的立場からアプローチすることで、受講生がこれまでに自明視してきた教育観や子ども観を捉えなおし、保育実践に応用可能なものの見方や考え方の獲得を目指す。					
到 達 目 標	・ 子どもの社会化過程を具体的な事例に即して理解する。 ・ 日常生活における他者・社会との関わりおよび自己形成のメカニズムを理解する。 ・ 保育者として実践場面に応用可能な社会学的なものの見方を獲得する。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーションー教育社会学とは何かー				
	第 2 回	教育現象の捉え方ー「概念装置」を使ってモノを見る方法ー				
	第 3 回	子どもと社会化①ー「重要な他者」との出会いー				
	第 4 回	子どもと社会化②ー「一般化された他者」と規範の獲得ー				
	第 5 回	子どもと社会化③ー制度化された「ことば」の獲得ー				
	第 6 回	子どもと社会化④ー子どもの「遊び」と社会化ー				
	第 7 回	社会の中の子ども①ー社会からみた「子ども」という存在ー				
	第 8 回	社会の中の子ども②ー選抜・配分装置としての学校ー				
	第 9 回	社会の中の子ども③ー性別役割分業と隠れたカリキュラムー				
	第 10 回	社会の中の子ども④ー役割取得と感情の社会化ー				
	第 11 回	保育者と子ども①ー生活形式を共有する他者としての保育者ー				
	第 12 回	保育者と子ども②ー教師としての保育者ー				
	第 13 回	子どもと問題行動①ー子どもの問題行動を捉える視点①ー				
	第 14 回	子どもと問題行動②ー子どもの問題行動を捉える視点②ー				
	第 15 回	子どもと問題行動③ー子どもの問題行動を理解するー				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 特になし。			復 習：	講義で配布したプリントを再読し、疑問点をまとめておくこと。 講義で紹介した資料や参考文献を手にとり、自分の目で再読すること。	
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（５０％）、課題（３０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	特になし。					
参 考 文 献	必要に応じて適宜、紹介する。					
注 意 事 項	・ 授業中の私語や不要物の持込は認めない。 ・ 授業毎にプリントを配布する。配布プリントはファイルにまとめて保管しておくこと。 ・ 授業毎に課題を出す。課題は授業時間内に作成・提出すること。 ・ 授業内に受講生に意見を求める予定である。受講生が積極的に質問・意見を表明することを期待する。					

授 業 科 目	保 育 課 程 論		単位数	2	担当教員	鯛谷 和代
講 義 の 内 容	関係法令、保育所保育指針、認定こども園、幼稚園教育要領の趣旨を理解し、全在所、全園期間を見通した資料による保育構想から、長期（年間・期・月など）、短期（週・日・特定の活動など）の指導計画の全体像を学び取り、指導計画をたてながら保育課程について学んでいく。					
到 達 目 標	・ 保育者は何を基準に保育を行なうのか説明できるようになる。 ・ ねらいや子どもの姿から、経験させたい具体的な活動がすぐに思い浮かぶようになる。 ・ 自分の園を作るならどのような方針目標をかかげるかを考え、それを実現するための保育室・園庭の設計図を作成する。					
授 業 計 画	第 1 回	子どもの生活の連続性、および発達や学びの連続性の関係性について				
	第 2 回	関係法令（教育基本法・学校教育法・児童福祉法・児童福祉施設の基準など）について				
	第 3 回	保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領について				
	第 4 回	保育の全体計画と保育計画の必要性について				
	第 5 回	保育は何を基準に保育をするのか、保育課程の独自性について				
	第 6 回	発達、季節を考えた遊びの一覧表を作成する（グループワーク）				
	第 7 回	発表・評価				
	第 8 回	園の方針、目標を考え、保育室・園庭を設計する（グループワーク）				
	第 9 回	園の方針、目標と設計図の発表、評価				
	第 10 回	保育課程の編成の基本的な考え方について				
	第 11 回	保育課程と指導計画の関係について				
	第 12 回	保育課程の理論がどのように計画として具現化されていくのかについて				
	第 13 回	保育課程から長期指導計画の作成について				
	第 14 回	長期指導計画から短期指導計画の作成について				
	第 15 回	保育の評価と保育要録の書き方について				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： ・ 次回の資料に書き込み、質問事項を記録しておく。 ・ 課題の作成			復 習： ・ 毎回の資料を整理しておく。 （14 回目にまとめた資料を提出） ・ 課題の作成		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（50％）、作品（10％）、発表（20％）、授業態度（20％）					
教 科 書	『保育所保育指針解説書』 『幼稚園教育要領解説』					
参 考 文 献	『幼稚園教育指導資料第1集「指導計画の作成と保育の展開」』（文部科学省） 『幼稚園教育指導資料第2集「幼児理解と評価」』（文部科学省）					
注 意 事 項						

授 業 科 目	保 育 内 容 （ 音 楽 表 現 II ）		単位数	1	担当教員	二藤 宏美
講 義 の 内 容	日本や諸外国の音楽、音楽遊び、西洋音楽の歴史を学習します。乳幼児の音楽知覚や歌獲得の姿を観察し、音楽の起源についても考えを深めます。これらをもとに、音楽を保育実践に活かすアイディアを磨きます。					
到 達 目 標	身近な材料やきっかけから、領域を超えた音楽や音に関わる遊びを創造し、子どもの健康的で美的な体験を支援できる技術や感性を身につけることが目標です。					
授 業 計 画	第 1 回	私の音楽履歴 どんな音や音楽が好き？				
	第 2 回	音と音楽、リズムと拍				
	第 3 回	環境の探索 身近な音・リズム地図作り				
	第 4 回	グループ発表				
	第 5 回	古今東西の音楽を知り、活用しよう 集団遊び				
	第 6 回	古今東西の音楽を知り、活用しよう クラシック音楽				
	第 7 回	古今東西の音楽を知り、活用しよう さまざまな民族の音楽				
	第 8 回	赤ちゃん研究の紹介 赤ちゃんは音楽がわかる？				
	第 9 回	赤ちゃんと養育者研究の紹介 歌表出までの道筋				
	第 10 回	音楽や音をきいて描いてみよう 絵をみて音表現してみよう				
	第 11 回	絵からお話を考えて、音楽や身体で表現してみよう				
	第 12 回	オノマトペを使った歌遊びを作ろう				
	第 13 回	手作り楽器の紹介と発表準備				
	第 14 回	グループ発表				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 全員が持ち回りで授業の中で手遊び歌を紹介 します。宿題を呈示する場合があります。			復 習： 授業のまとめとノートの作成。		
成績評価の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（３０％）、発表（５０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	特に指定しない。					
参 考 文 献	『大人の楽器入門』（長沼由美、二藤宏美、ヤマハミュージックメディア） 『大人の音楽史入門』（長沼由美、二藤宏美、ヤマハミュージックメディア）					
注 意 事 項	ノートを用意してください。授業はグループ作業が中心です。協力し合い、学び合う態度をもちましょう。普段から沢山の音楽や表現芸術に触れ、自らの表現の引き出しを豊富にするよう留意して下さい。授業と無関係な行動は人に迷惑をかけます。互いに協力しあいましょう。					

授 業 科 目	保 育 内 容 （ 造 形 表 現 Ⅱ ）		単位数	1	担当教員	稲葉 恭子
講 義 の 内 容	子どもの発達段階を踏まえた造形表現について理解を深めながら、子どもの表現意欲を引き出す言葉かけや関わり方を学びます。素材の持ち味を活かした表現を考え、子ども達が心を解放し活き活きと表現出来る行動計画の構成を学びます。					
到 達 目 標	１．保育者として豊かな感性および創造性と表現力を身につけ、子どもの表現を多様な方面から受けとめ支援できる保育者をめざします。 ２．子どもの発達に応じた造形表現の行動計画を考え、構成できる力を身につけます。					
授 業 計 画	第 1 回	授業のねらいと進め方について 子どもの造形活動の保育環境設定について				
	第 2 回	感性・イメージを豊かにする－ 1 スタンピング				
	第 3 回	感性・イメージを豊かにする－ 2 スタンピング				
	第 4 回	感性・イメージを豊かにする－ 3 素材を活かした楽器制作				
	第 5 回	感性・イメージを豊かにする－ 4 素材を活かした楽器制作				
	第 6 回	感性・イメージを豊かにする表現活動の指導計画				
	第 7 回	あそびを豊かにする－ 1 牛乳パックボール制作				
	第 8 回	あそびを豊かにする－ 2 牛乳パックボール制作				
	第 9 回	あそびを豊かにする－ 3 紙袋でごっこ遊び制作				
	第 10 回	あそびを豊かにする－ 4 紙袋でごっこ遊び制作				
	第 11 回	あそびを豊かにする造形表現活動の指導計画				
	第 12 回	環境・行事を豊かにする－ 1 四季を彩る壁面構成				
	第 13 回	環境・行事を豊かにする－ 2 四季を彩る壁面構成				
	第 14 回	環境・行事を豊かにする造形表現活動の指導計画				
	第 15 回	造形表現活動のまとめと自己評価				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 次回授業の準備物を揃える			復習： 自己制作活動のふり返し		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（２０％）、課題（２０％）、作品（４０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	『楽しい造形表現』（子ども造形表現研究会、圭文社）					
参 考 文 献	授業中に随時紹介。					
注 意 事 項	①作品の提出期日を守ること。②授業に必要な道具や材料は各自責任を持って準備すること。 ③制作に要する材料費は本人負担とします。					

授 業 科 目	保 育 指 導 法		単位数	2	担当教員	當麻 祐子
講 義 の 内 容	・ 基本的な知識と保育教材研究を通して実践的に学ぶ ・ 様々な教育・保育場面を想定し、ビデオやグループ討論など交えながら学んでいく					
到 達 目 標	「子どもの姿から学ぶ」という姿勢の大切さを理解し、培う。 実践につながる力を養う。 グループでの話し合いを通し、多種多様な捉え方・考え方があること、話し合うことの意義を知る。					
授 業 計 画	第 1 回	保育指導法とは何か		第 16 回	基本的生活習慣の指導	
	第 2 回	子ども・子育てを取り巻く環境と課題		第 17 回	道具の安全性と管理	
	第 3 回	乳幼児の発達について（１）		第 18 回	園行事について（１）	
	第 4 回	乳幼児の発達について（２）		第 19 回	園行事について（２）	
	第 5 回	乳幼児の「遊び」について（１）		第 20 回	園外の環境を取り入れた保育活動	
	第 6 回	乳幼児の「遊び」について（２）		第 21 回	教育課程・指導計画について	
	第 7 回	乳幼児の「遊び」について（３）		第 22 回	保育教材研究　～絵本・月刊誌～	
	第 8 回	保育形態について		第 23 回	指導案と実践・評価	
	第 9 回	保育教材研究　～運動～		第 24 回	実習エピソードから学ぶ（１）	
	第 10 回	保育教材研究　～造形～		第 25 回	実習エピソードから学ぶ（２）	
	第 11 回	保育教材研究　～自然（１）～		第 26 回	特別支援教育について	
	第 12 回	保育教材研究　～自然（２）～		第 27 回	地域との連携・保育者とのかかわり	
	第 13 回	保育教材研究　～音楽～		第 28 回	幼小連携と小学校への接続	
	第 14 回	保育教材研究　～言葉～		第 29 回	保育者の資質の向上	
	第 15 回	まとめ		第 30 回	まとめ	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習：　次回の講義のおおまかな内容を伝えるので意欲を持って臨む			復 習：　授業で使用したプリントで各自復習をする		
成績評価の方法	試験期間における定期試験：　実施（○）する／（　）しない 筆記試験（６０％）、課題（２０％）、発表（　５％）、授業態度（１５％）					
教 科 書	オリジナルのパワポスライドを使用（適宜配布） 参考：『幼稚園教育要領・保育所保育指針』（チャイルド本社）					
参 考 文 献	授業の中で必要に応じて紹介する。					
注 意 事 項	積極的に授業に臨み、実践に結びつける意識を持って学んでほしい。					

授 業 科 目	教 育 方 法 ・ 技 術 論		単位数	1	担当教員	越川 葉子
講 義 の 内 容	幼児教育における教育方法と技術に関する基本的な事柄について学ぶ。また、情報機器やそれらを活用した教材の活用、教材作成の技術と方法について学び、実際に教材を作成し、プレゼンテーションを行う。					
到 達 目 標	・ 保育者の立場にたって具体的な教育方法について考察することができる。 ・ 子どもや保護者を想定して、保育者の実践のねらいを適切に伝える方法を習得する。 ・ 具体的な情報機器や情報メディアを通じて、教育目標に即した教材を作成できる。 ・ 学生相互が発表する機会を持ち、プレゼンテーション能力や聞く態度を養成する。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション—教育方法とは何か—				
	第 2 回	教育方法の基本原理—教育の目的と手段の関係—				
	第 3 回	幼児教育における方法と技術①—教材としての絵本—				
	第 4 回	幼児教育における方法と技術②—出来事をどのように伝えるか—				
	第 5 回	幼児教育におけるメディアの活用①—写真・映像の読み方・使い方—				
	第 6 回	幼児教育におけるメディアの活用②—写真を使った記録—				
	第 7 回	ワープロを活用した教材作成①—作図機能の基礎—				
	第 8 回	ワープロを活用した教材作成②—作図機能と描画の活用—				
	第 9 回	プレゼンテーションソフトの活用①—教材作成の目標設定と計画設計—				
	第 10 回	プレゼンテーションソフトの活用②—プレゼンテーションソフトを用いた発表方法—				
	第 11 回	プレゼンテーションソフトの活用③—発表資料の制作—				
	第 12 回	プレゼンテーションソフトの活用④—発表資料の制作—				
	第 13 回	プレゼンテーションの技法①—発表および意見交換—				
	第 14 回	プレゼンテーションの技法②—発表および意見交換—				
	第 15 回	プレゼンテーションの技法③—発表および意見交換—				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習：	幼保施設や児童館で配布される「おたより」などを日ごろから集めておくこと。 幼稚園や保育園の HP で用いられている文章や写真に目を通しておくこと。			復 習：	授業時間外を利用して、各自の進捗に応じて課題の制作を進めておくこと。
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（60％）、発表（40％）					
教 科 書	特になし。					
参 考 文 献	必要に応じて適宜、紹介する。					
注 意 事 項	・ 適宜プリントを配布する。 ・ 毎時間、課題にきちんと取り組むこと。 ・ 課題の提出期限は厳守すること。					

授 業 科 目	教 育 相 談		単位数	2	担当教員	伊藤 明芳
講 義 の 内 容	教育相談は、保育者が相談者（主に保護者）に対して、家庭や幼稚園における子どもの教育上の問題について、その望ましい解決に向けて助言や援助指導をおこなう実践活動である。 背景に発達や環境の要因があると推測される子どもの問題行動から保護者の養育不安まで、相談内容は多岐にわたる。これからの保育者には保護者の心へのサポートもより意識的に求められるようになると考えられる。 本講義では、教育相談の基礎的知識の習得と現場で活きる教育相談の実践的能力の育成を図る。さらに、保育者自身の心の安定と成長にもアプローチしたいと考えている。					
到 達 目 標	カウンセリングの基本を学び、保育の実践に活かすことを考え、保育者として、多様な子どもや保護者の問題を理解して、相談者の心に寄り添う相談実践を勇気を持っておこなえるようになること。					
授 業 計 画	第 1 回	1. イントロダクション 教育相談とは何か				
	第 2 回	2. 体験から学ぶ相談に必要なこと ロールプレイ(1) [相談を受ける時の基本姿勢]				
	第 3 回	ロールプレイ(2) [意思を通じあうこと]				
	第 4 回	3. 相談実践の基本と応用 教育相談の基礎(1) [概要]				
	第 5 回	教育相談の基礎(2) [実践へのヒント]				
	第 6 回	教育相談のためのカウンセリング活用				
	第 7 回	教育相談のための心理アセスメント				
	第 8 回	教育相談のプロセス				
	第 9 回	4. 事例から学ぶ教育相談 子どもの心の発達・心の問題(1) [登園渋り]				
	第 10 回	子どもの心の発達・心の問題(2) [落ち着きなし]				
	第 11 回	子どもの心の発達・心の問題(3) [保護者の心]				
	第 12 回	5. 保育者の心の健康を育む カウンセリングの理論				
	第 13 回	エンカウンター実習				
	第 14 回	まとめ				
	第 15 回	今後へのアドバイスと試験				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 知識の定着をおこない、学んだことを実際の場面でどう活かすか考える。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（８０％）、課題（２０％）					
教 科 書	特に指定しない					
参 考 文 献	講義の中で必要に応じて適宜紹介する					
注 意 事 項	講義を中心におこなう。実際の事例などをあげ、受講生にわかりやすい内容を心がけたい。その他、ロールプレイ、エンカウンター等も取り入れ、相談やカウンセリング等の体験的な学習もおこないたい。 相談を受けて人に関わるとき、保育者には人間的かつ専門的な総合力が必要になる。そこで、受講者には積極的に授業に参加し、自ら学び考える意欲を持つことが求められる。					

授 業 科 目	幼 児 教 育 実 習		単位数	4	担当教員	近喰 晴子
講 義 の 内 容	授業を通して学んだ知識や技能が、幼児教育の場でいかに活かされ応用することができるかということを実践を通して学び、保育の営みを総合的に理解する。また、保育の様子を観察する、子どもの活動に参加する、保育者の助手的立場をとるなどの経験を通し保育者の職務理解に勤める。観察・参加実習を中心とした前期実習を２年次 11 月に、参加・責任実習を３年次 6 月に実施する。					
到 達 目 標	子どもの発達を体験的に学び、子どもの実態に合った保育の営みについて学ぶ。 保育者の職務理解に努め、責任実習を通し指導方法、指導技術などを体得する。 幼稚園の役割や機能について理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	前期実習			第 16 回	後期実習
	第 2 回	実習園の概要を知る			第 17 回	幼稚園の特徴、機能や役割を学ぶ
	第 3 回	実習園の日課を理解する			第 18 回	配属クラスの特徴をつかみ子どもとかかわる
	第 4 回	配属クラスの子どもの名前を覚える			第 19 回	個々の子どもの特性を把握し、一人ひとりに合ったかわりをする
	第 5 回	子どもの遊びに参加する			第 20 回	保育者の保育の進め方や指導方法を学ぶ
	第 6 回	保育の進め方を観察する			第 21 回	保育の多様な活動の部分を担当する
	第 7 回	環境構成のあり方を学ぶ			第 22 回	教材研究をする
	第 8 回	絵本の読み聞かせ、紙芝居、手遊び等保育の営みの一部分を担当する			第 23 回	部分実習、責任実習などの指導案を作成し実践する
	第 9 回	子どもの興味・関心、思考傾向など子どもの実態を知る			第 24 回	登園時、降園時の保育者と保護者のかかわり方を観察する
	第 10 回	保育者の職務について学ぶ			第 25 回	幼稚園と他機関との連携、子育て支援などについて学ぶ
	第 11 回	前期実習を振り返り自己評価をする			第 26 回	実習全般の振り返りを行う
	第 12 回	自己課題を明確にし後期実習にむけた準備をする			第 27 回	保育者としての自己課題を明確にする
	第 13 回				第 28 回	
	第 14 回				第 29 回	
	第 15 回				第 30 回	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 絵本や紙芝居等の教材研究をする 指導案を作成する 子どもに提供できる遊びを身に付ける ピアノの練習をする			復習： 実習概要報告書をまとめる 実習を振り返り自己課題を明確にする 学んだ保育技術を明確にする ピアノの練習をする		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実習園の評価（５０％）、実習日誌評価（５０％）					
教 科 書	『幼稚園教育実習』（浅見均・田中正浩、大学図書出版）					
参 考 文 献	『幼稚園教育要領』（文部科学省）					
注 意 事 項						

授 業 科 目	幼 児 教 育 実 習 研 究		単位数	1	担当教員	近喰晴子・永井めぐみ
講 義 の 内 容	教育実習に必要な知識や技能を総合的に学び、実習園において効果的な学びが持てるよう準備をするための実習単位と連動した授業である。実習に必要な書類の作成、マナーや態度、記録の書き方などを学ぶとともに子どもの遊びや制作活動などの教材研究、指導計画の作成も行う。また、実習後の評価、反省、個人面談も行う、自己課題も明確にしていく。					
到 達 目 標	実習に必要な知識、技能を身に付ける。 記録文の書き方を知る。 幼稚園保育の基本的事項を理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	教育実習の目的や意義、前期実習のねらい			第 16 回	後期実習のねらい
	第 2 回	幼稚園の目的や目標			第 17 回	責任実習に向けて
	第 3 回	幼稚園の一日の生活			第 18 回	指導計画の作成について
	第 4 回	幼稚園の保育内容			第 19 回	教材研究と指導案の作成①
	第 5 回	実習書類の作成①			第 20 回	教材研究と指導案の作成②
	第 6 回	実習書類の作成②			第 21 回	幼稚園教育要領と保育内容
	第 7 回	保育者の仕事			第 22 回	後期実習における実習課題
	第 8 回	実習課題の作成			第 23 回	実習課題とその考察
	第 9 回	観察の視点			第 24 回	全実習の振り返り…指導技術、指導方法
	第 10 回	実習園のオリエンテーション 意義、訪問時のマナー、学びの内容			第 25 回	保育者から学んだこと方
	第 11 回	実習日誌の書き方			第 26 回	子どもとのかかわりを通して学んだこと
	第 12 回	実習時のマナーや留意点			第 27 回	自己課題
	第 13 回	前期実習のまとめ			第 28 回	実習報告会準備①
	第 14 回	実習の振り返りと実習評価			第 29 回	実習報告会準備②
	第 15 回	後期実習に向けて…自己課題			第 30 回	実習報告会
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 幼稚園教育要領を熟読する 手遊びや折り紙等の教材研究 指導案の作成			復習： 多くの授業で学んだことを振り返り、実習で活用できるようにしておく。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（５０％）、課題（２０％）、授業態度（２０％）、実習書類の提出（１０％）					
教 科 書	『幼稚園教育実習』（浅見均・田中正浩、大学図書出版）					
参 考 文 献	『幼稚園教育要領』（文部科学省）					
注 意 事 項						

授 業 科 目	保育・教職実践演習（幼稚園）		単位数	2	担当教員	高原・土屋・伊藤・越川
講 義 の 内 容	将来の教員像を描けるように、教職の意義を実践的な演習体験を通して学び直し、自己の課題を自覚し、教職生活が円滑にスタートできるようにする。以下の4つの具体的なテーマを中心に履修する。 ① 使命感や責任感、教育的愛情に関する事項 ② 社会性や対人関係能力に関する事項 ③ 幼児理解や学級経営に関する事項 ④ 教科・保育内容に関する事項					
到 達 目 標	演習体験を通して、教職生活についての具体的なイメージを持つこと、他の学生とのディスカッションなどの経験から、視野を広げて子どもとのかかわりを捉えられるようになることが目標である。					
授 業 計 画	第1回	オリエンテーション				
	第2回	子ども一人ひとりに応じる保育とは①				
	第3回	子ども一人ひとりに応じる保育とは②				
	第4回	保育者の視点で考える①				
	第5回	保育者の視点で考える②				
	第6回	今日的教育課題への理解を深める①子どもの権利に関する条約				
	第7回	今日的教育課題への理解を深める②事例作成				
	第8回	今日的教育課題への理解を深める③ポスター発表に向けて製作				
	第9回	今日的教育課題への理解を深める④ポスター発表				
	第10回	保護者同士の人間関係にアプローチする				
	第11回	保育者の悩みと対応について考える				
	第12回	現職幼稚園教諭による講話（クラス運営や職業生活の実際）				
	第13回	保育実践に向けて①児童文化				
	第14回	保育実践に向けて②児童文化				
	第15回	授業全体のまとめと振り返り				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 次回の授業に関して、課題が示された場合にしっかりと取り組むこと。			復習： 配布資料を読み直し、ディスカッション等で話し合った内容をノートに整理する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 課題（40％）、発表（60％）					
教 科 書	特になし					
参 考 文 献	授業において紹介する。					
注 意 事 項	他の受講生の意見や考えを聞き、自分の考えと相対化することで、学びを深めてほしい。					

授 業 科 目	保 育 相 談 支 援		単位数	1	担当教員	加賀谷 崇文
講 義 の 内 容	保育現場において、保護者や子ども達の相談を受けることは現代の保育者にとって必須となる。従って、保育者を志す者は相談をどのように受ければよいのかを知っておく必要がある。 この授業では、これまで学んできた心理カウンセリングの知識などを確認するとともに、実際の保育相談支援の現場を知ることで、実践的な保育相談を学んでいく。					
到 達 目 標	保護者対応について学ぶこと。 保護者の悩みについて理解すること。 就職してすぐに行う保護者支援についての具体的イメージを作ること。					
授 業 計 画	第 1 回	保育相談支援の意義				
	第 2 回	保育相談支援の原則				
	第 3 回	ケースワークの原則とカウンセリング				
	第 4 回	保護者の支援				
	第 5 回	保育相談の基本的な方法				
	第 6 回	保育相談で扱われる事例 1				
	第 7 回	保育相談で扱われる事例 2				
	第 8 回	保育相談で扱われる事例 3				
	第 9 回	保育相談で扱われる事例 4				
	第 10 回	保育所以外の場所での保育相談				
	第 11 回	他機関との連携				
	第 12 回	保育者の専門性と保育所の特性を考える				
	第 13 回	実際の事例を検討する 1				
	第 14 回	実際の事例を検討する 2				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 保育所保育指針を読んでおくこと。			復 習： 授業内容の振り返り。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（90％）、授業態度（10％）					
教 科 書	『事例で学ぶ保育のための相談援助・支援 その方法と実際』（須永進編著 同文書院）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	保育相談では、悩んでいる人の発言に耳を傾けその心情を理解する謙虚な態度が不可欠である。その姿勢を身につけるためにも授業をしっかりと聴き取るという構えを求める。					

授 業 科 目	臨 床 心 理 学		単位数	2	担当教員	加賀谷 崇文
講 義 の 内 容	現代社会では、不登校やいじめ・摂食障害など、こころの問題が原因と思われる現象が様々な場面で見られている。臨床心理学とは、このような問題を、どのように理解し、どのように援助していくかを考える学問である。このような視点を紹介した上で、我々が生活の中で、臨床心理学的な考えをどう活かしていくか考えていきたい。また、臨床心理学では幼少時の母子関係や発達課題などが数多く論じられている。それらを紹介し、幼少時の子どもとのつき合い方を考えていきたい。					
到 達 目 標	臨床心理学という学問分野を理解すること。 保育と臨床心理学の接点を考えていくこと。 人の心の動きを知ること。					
授 業 計 画	第 1 回	臨床心理学の定義		第 16 回	心理カウンセリングの定義	
	第 2 回	臨床心理学の実践		第 17 回	クライアント中心療法	
	第 3 回	臨床心理学の歴史（古代～メスメル）		第 18 回	クライアント中心療法の実践	
	第 4 回	臨床心理学の歴史（精神分析 1）		第 19 回	心理アセスメントの定義	
	第 5 回	臨床心理学の歴史（精神分析 2）		第 20 回	心理アセスメントの方法	
	第 6 回	ユングの童話分析		第 21 回	言語によるアセスメント	
	第 7 回	臨床心理学の歴史（心理学の技法）		第 22 回	非言語によるアセスメント	
	第 8 回	乳児期の母子関係 1		第 23 回	心理テスト	
	第 9 回	乳児期の母子関係 2		第 24 回	アセスメントと 4 つの水準	
	第 10 回	乳児期の母子関係 3		第 25 回	精神分析の技法 1	
	第 11 回	幼児期の母子関係 1		第 26 回	精神分析の技法 2	
	第 12 回	幼児期の母子関係 2		第 27 回	催眠療法	
	第 13 回	児童期以降の発達		第 28 回	認知行動療法	
	第 14 回	前期の復習		第 29 回	リラクセーションとイメージ療法	
	第 15 回	まとめ		第 30 回	まとめ	
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 1 年次の心理学関連科目の内容を思い出しておくこと。			復習： 授業内容を振り返ること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（90％）、授業態度（10％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	単に知識として学ぶのではなく、自分自身の心理や体験をふまえながら、臨床心理学を学べるように進めていきたい。					

授 業 科 目	地 域 子 育 て 支 援 論		単位数	2	担当教員	加賀谷・土屋・越川
講 義 の 内 容	現代社会において、子育て支援は子育てをする家庭にとって非常に大きな力となっている。一方で、これらの取り組みが始まってからある程度の時間がたち、より地域に根差した新たな支援も考慮しなければならない。本講義では、地域における保育活動や子育て支援活動について諸説を学ぶとともに、実際の支援活動を行うことで「地域子育て支援」のあり方について学んでいくこととする。					
到 達 目 標	1.子育て支援の具体的方法について理解すること 2.二歳・三歳児と保護者への関わり方を学ぶこと。 3.子育て支援の効果を理解すること。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション			第 16 回	親子活動準備③
	第 2 回	支援活動内容についての説明			第 17 回	チラシの配布
	第 3 回	親子活動内容についての検討①			第 18 回	活動役割分担
	第 4 回	親子活動内容についての検討②			第 19 回	直前準備
	第 5 回	親子活動内容についての検討③			第 20 回	親子活動①
	第 6 回	親子活動内容についての検討④			第 21 回	親子活動②
	第 7 回	親子活動内容についての検討⑤			第 22 回	親子活動③
	第 8 回	親子活動内容についての検討⑥			第 23 回	親子活動④
	第 9 回	親子活動内容についての検討⑦			第 24 回	親子活動⑤
	第 10 回	親子活動の広報に関する検討			第 25 回	活動振り返り①
	第 11 回	ポスターの製作			第 26 回	活動振り返り②
	第 12 回	チラシの製作			第 27 回	活動振り返り③
	第 13 回	HP の製作			第 28 回	活動振り返り④
	第 14 回	親子活動準備①			第 29 回	次年度に向けた意見交換
	第 15 回	親子活動準備②			第 30 回	まとめ
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 活動に関して各自で準備すること。			復 習： 活動内容を振り返ること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 授業態度（100％）					
教科書						
参考文献						
注 意 事 項	20 名までの受講とする。					

授 業 科 目	カ ウ ン セ リ ン グ 論	単位数	2	担当教員	加賀谷 崇文
講 義 の 内 容	心の悩みを解決する方法の一つとしてカウンセリングが挙げられる。カウンセリングの場面で重要なことは、悩んでいるクライアントの話しを如何に聴き、如何に理解するかである。そこで本授業では、精神分析やロジャーズなどのカウンセリング理論を取りあげ、実習を交えながら、クライアントの悩みの聞き方を考えていく。 <u>この授業でピアヘルパーの資格受験対策も行う。</u>				
到 達 目 標	カウンセリングの方法を知ること。 ピアヘルピングについて理解すること。 カウンセリング的援助の実践を学ぶこと。				
授 業 計 画	第 1 回	カウンセリングの定義			
	第 2 回	カウンセリングの初期の流れ			
	第 3 回	実際のカウンセリング			
	第 4 回	構成的グループ・エンカウンター			
	第 5 回	ピアヘルピングの方法 1			
	第 6 回	ピアヘルピングの方法 2			
	第 7 回	ピアヘルピングの方法 3			
	第 8 回	ピアヘルピングの方法 4			
	第 9 回	ピアヘルピングの方法 5			
	第 10 回	ピアヘルピングの方法 6			
	第 11 回	カウンセリングで起こりやすい問題点			
	第 12 回	様々な症例に対するカウンセリング			
	第 13 回	カウンセリングと保育			
	第 14 回	カウンセリングと子育て支援			
	第 15 回	まとめ			
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 教科書を熟読すること。			復習： 教科書を読み直すこと。	
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない レポート（１００％）				
教 科 書	『ピアヘルパー・ハンドブック』（日本教育カウンセラー協会編、図書文化社） 『ピアヘルパー・ワークブック』（日本教育カウンセラー協会編、図書文化社）				
参 考 文 献					
注 意 事 項	カウンセリングの理論の中から、人の悩みや話の聴き方を学んでいく。				

授 業 科 目	児 童 館 の 機 能 と 運 営		単位数	2	担当教員	秋山 展子
講 義 の 内 容	児童館（含児童センター）は、子どもに健全な遊びを与えてその健康を増進し、情操を豊かにすることを目的とする児童福祉法による児童厚生施設である。授業では、児童館の歴史、目的、役割、利用状況、民営化(指定管理)の現状・課題を学んでいく。また実習で活用できる遊び等も紹介する。					
到 達 目 標	・児童館の種類別機能や児童館の地域における役割を理解する。 ・児童館における子育て支援や児童の健全育成を理解する。 ・児童館が小学生及び中・高生の居場所づくりなど、地域の核となる児童福祉施設として重要な役割を担っていることを理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	児童厚生員とその資格の説明				
	第 2 回	児童館の説明				
	第 3 回	現代の子どもたちの遊び環境				
	第 4 回	「健全育成」とは				
	第 5 回	児童厚生施設とは				
	第 6 回	児童館の種別及び機能				
	第 7 回	小型児童館の設置及び運営				
	第 8 回	児童センターの設置及び運営				
	第 9 回	大型児童館の設置及び運営				
	第 10 回	これからの児童館の機能と役割				
	第 11 回	児童館活動を支える人々				
	第 12 回	児童館活動の実践―活動内容及び利用状況から				
	第 13 回	放課後児童健全育成事業の概要と実態				
	第 14 回	児童厚生員のあり方と児童館を支える団体				
	第 15 回	これまでのまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 配布した資料、教科書を再読し、毎回の復習を各自で行い、理解を深めること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（60％）、課題（10％）、授業態度（30％） ※講義の中で必要に応じて小テストをおこなう。					
教 科 書	『健全育成論』（一般財団法人 児童健全育成推進財団、一般財団法人 児童健全育成推進財団）					
参 考 文 献						
注 意 事 項	提出物の期限は厳守すること。					

授 業 科 目	福 祉 施 設 の 現 状		単位数	2	担当教員	小室 泰治
講 義 の 内 容	福祉施設の利用者は、社会的養護を必要とする子どもたちや障害をもった子どもたち（成人施設を含む）である。その利用者はどのような生活をし、将来自立した生活を行うために職員はどのような支援を行っているのか、事例を通して自立支援のあり方を理解する。					
到 達 目 標	1 福祉施設の入退所に係る児童相談所や福祉事務所などの措置や支援について説明ができる。 2 各福祉施設の支援内容について説明ができる。 3 福祉施設職員として支援のあり方について理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	社会的養護の必要な子どもの現状 福祉施設は各種ある。それぞれの施設はどのような役割を担っているかを学ぶ				
	第 2 回	福祉施設の入所から退所までの手続き 児童相談所、福祉事務所との措置関係について理解する				
	第 3 回	社会的養護が必要な子どもたちの施設と生活① 乳児院での保育士の役割や愛着関係の形成について理解する				
	第 4 回	社会的養護が必要な子どもたちの施設と生活② 児童養護施設での保育士の役割や被虐待児への支援、自立に向けた支援のあり方について理解する				
	第 5 回	社会的養護が必要な子どもたちの施設と生活③ 情緒障害児施設での保育士の役割や家族への支援のあり方について学ぶ				
	第 6 回	社会的養護が必要な子どもたちの施設と生活④ 児童自立支援施設の現状と課題を学び、虐待と非行の関係について理解する				
	第 7 回	社会的養護が必要な子どもたちの施設と生活⑤ 母子生活支援施設の生活や子どもたちへの支援について理解する				
	第 8 回	社会的養護が必要な子どもたちの施設と生活⑥-1 障害者生活支援施設の現状と利用者の社会参加について理解する				
	第 9 回	社会的養護が必要な子どもたちの施設と生活⑥-2 福祉的就労と地域社会について理解する				
	第 10 回	社会的養護が必要な子どもたちの施設と生活⑦ 重症心身障害児施設の現状と課題について学ぶ				
	第 11 回	里親制度 被虐待児の増加と里親養育の意義について理解する				
	第 12 回	新しい動き 施設生活から地域生活重視へ ～グループホーム・ファミリーホーム				
	第 13 回	福祉施設の倫理 児童養護施設や障害児者施設での体罰事例を通して職員の倫理を考える				
	第 14 回	認可外保育施設の現状と課題 民間事業者参入に伴う認可外保育施設の増加と課題について考える				
	第 15 回	福祉施設のリスクマネジメント まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 施設の種別ごとにレポートをし発表してもらうので、日ごろからニュースや新聞報道に目を通して関心を持つておくこと。			復 習：		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（60％）、レポート（20％）、課題（20％）					
教 科 書	使用しない 適宜プリントを配布					
参 考 文 献	『子どもたちの生活を支える社会的養護内容』（小野澤昇・田中利則・大塚良一編著、ミネルヴァ書房、2013年）					
注 意 事 項						

授 業 科 目	地 域 福 祉		単位数	2	担当教員	秋山 展子
講 義 の 内 容	本講義では地域福祉の発展過程を踏まえながら、将来の展望を示し、社会福祉に必要な知識を学ぶことを目的としている。					
到 達 目 標	・地域福祉の基本的な考え方とシステムを理解する。 ・行政組織と民間組織の役割を理解する。 ・現代における地域福祉の課題を理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	新しい社会福祉システム				
	第 2 回	地域福祉の基本的な考え方				
	第 3 回	地域福祉の主体と福祉教育				
	第 4 回	行政組織と民間組織の役割と実際				
	第 5 回	コミュニティソーシャルワークと専門職の役割				
	第 6 回	住民の参加と方法				
	第 7 回	ソーシャルサポートネットワーク				
	第 8 回	地域における社会資源活用・調整・開発				
	第 9 回	地域における福祉ニーズの把握方法				
	第 10 回	地域トータルケアシステムの構築と実際				
	第 11 回	民生委員とは				
	第 12 回	地域における福祉サービスの実際				
	第 13 回	日本の地域福祉に影響を与えた海外の考え方				
	第 14 回	福祉によるまちづくりとソーシャルアクション				
	第 15 回	これまでのまとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：			復習： 配布した資料を再読し、毎回の復習を各自で行い、理解を深めること。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 筆記試験（60％）、課題（10％）、授業態度（30％） ※講義の中で必要に応じて小テストをおこなう。					
教 科 書	授業でプリント配布					
参 考 文 献						
注 意 事 項	提出物の期限は厳守すること。					

授 業 科 目	保 育 施 設 経 営 論		単位数	2	担当教員	伊能 恵子
講 義 の 内 容	保育所を経営するということは、保育実践による“価値”を生み出し続けることである。そのためには、経営の条件を知り、「何のために」「何を大事にして」「どうあるべきか」を考え尽くすことが経営者の義務であり、為すべきことである。本講義において、この経営の本質を「経営品質」の視点から考察し、現場において活用できるように細分化する。また、保育所施設経営の重要性に対する実感を本講義のねらいとしたい。					
到 達 目 標	本講義の到達目標として、本講義終了時には、学生一人一人が経営者として立つ倫理観を習得することとしたい。また、保育所施設経営の観点から、実践を磨いていく具体的な方法を学生一人一人が修得することも同時に到達目標としたい。					
授 業 計 画	第 1 回	保育所経営の条件				
	第 2 回	価値を生み出す保育所経営活動				
	第 3 回	保育所におけるリーダーシップ				
	第 4 回	保育所における社会的責任				
	第 5 回	保育業界市場の理解と対応				
	第 6 回	保育所戦略の策定と展開				
	第 7 回	保育士の能力向上				
	第 8 回	保育所の能力向上				
	第 9 回	保育現場という職場環境				
	第 10 回	保育価値創造のプロセス				
	第 11 回	情報マネジメント				
	第 12 回	保育所経営活動結果分析				
	第 13 回	人事・労務管理				
	第 14 回	施設・整備管理				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 毎回の授業時に、講義内容を踏まえた予習課題を明示する。			復 習： 毎回の授業後に、講義内容の理解を図るための復習課題を課し、添削指導を行い必ず理解につなげ発展できるよう指導する。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（５０％）、課題（５０％）					
教 科 書	授業中において指示する					
参 考 文 献	『社会福祉施設・事業者の為の経営ハンドブック』（東京都社会福祉協議会） 『日本経営品質賞アセスメント基準書』（日本経営品質委員会）、日本経営品質学会機関紙					
注 意 事 項						

授 業 科 目	児 童 文 化 （ 感 受 性 開 発 を 含 む ）		単 位 数	2	担 当 教 員	高 原 典 子
講 義 の 内 容	児 童 文 化 活 動 と は、 子 ど も の 生 命 と 周 囲 の 事 物 や 生 命 が 相 互 に 生 き 生 き と か か わ る 活 動 で あ る。 本 教 科 で は 子 ど も の 文 化、 お よ び 絵 本 ・ 児 童 文 学 ・ 人 形 劇 ・ 玩 具 ・ 折 り 紙 ・ 手 あ そ び な ど 児 童 文 化 財 の 内 容 や 歴 史 を 学 ぶ。 ま た、 そ れ ら が 世 代 や 状 況 に か か わ ら ず、 一 生 を 通 じ て 人 の 生 活 や 人 間 関 係 に ゆ と り を 与 え、 楽 し み と 潤 い を 与 え る こ と を 理 解 す る。					
到 達 目 標	① 子 ど も の 文 化 と 児 童 文 化 財 に つ い て 楽 し み な が ら 学 び、 保 育 実 技 や 表 現 力 を 身 に つ け る。 ② 日 本 に 根 づ い て い る 年 中 行 事 や 伝 承 文 化 を 理 解 し、 そ れ ら を 子 ど も に わ か り や す く 伝 え る 表 現 力 を 養 う。 ③ 児 童 文 化 財 の 制 作、 実 演 を 通 し て、 自 分 な ら で は の 感 性 や 想 像 力 を 磨 く。					
授 業 計 画	第 1 回	< 子 ど も 観 の 変 遷 と 児 童 文 化 > 教 科 書 『 児 童 文 化 』 P9 ～ 15 P42 ～ 43			第 16 回	前 期 の 復 習 と 絵 本 の 読 み 語 り 演 習
	第 2 回	< 児 童 文 化 財 と し て の 絵 本 に つ い て ① > 絵 本 の 歴 史、 特 色、 種 類 に つ い て。 教 科 書 P67 ～ 71			第 17 回	パ ネ ル シ ア タ ー 絵 人 形 の 点 検 （ 絵 人 形 を 持 参 す る ）
	第 3 回	< 児 童 文 化 財 と し て の 絵 本 に つ い て ② > 絵 本 の 読 み 語 り に つ い て 学 び、 ペ ア に な っ て 読 み 合 う 演 習。			第 18 回	< 人 形 劇 エ プ ロ ン シ ア タ ー の 理 論 と 演 じ 方 > 実 演 と ビ デ オ。 教 科 書 P159 ～ 163
	第 4 回	< 絵 本 の 読 み 語 り 演 習 （ グ ル ー プ ワ ー ク ） > 小 集 団 の 前 で 絵 本 を 読 み 合 う 演 習 を 行 な う。			第 19 回	< 春 の 子 ど も の 生 活 と 年 中 行 事 > 教 科 書 P47 ～ 53。 春 に 因 む 風 物 の 折 り 紙 も 制 作 す る。
	第 5 回	< 児 童 文 化 財 と し て の 玩 具 に つ い て > 玩 具 の 歴 史、 子 ど も の 発 達 と 玩 具、 玩 具 の 選 び 方。 教 科 書 P89 ～ 95			第 20 回	< 夏 の 子 ど も の 生 活 と 年 中 行 事 > 教 科 書 P54 ～ 57。 夏 に 因 む 風 物 の 折 り 紙 も 制 作 す る。
	第 6 回	< 手 づ く り 玩 具 に つ い て > 手 づ く り 玩 具 の 意 義 と 制 作。 教 科 書 P95 ～ 112			第 21 回	< 秋 の 子 ど も の 生 活 と 年 中 行 事 > 教 科 書 P58 ～ 62 秋 に 因 む 風 物 の 折 り 紙 も 制 作 す る。
	第 7 回	< 児 童 文 化 財 と し て の 折 り 紙 に つ い て > 折 り 紙 の 歴 史 を 学 び、 制 作 す る。 P171 ～ 174			第 22 回	< 冬 の 子 ど も の 生 活 と 年 中 行 事 > 教 科 書 P63 ～ 66 冬 に 因 む 風 物 の 折 り 紙 も 制 作 す る。
	第 8 回	< 児 童 文 化 財 と し て の 紙 芝 居 > D V D も 使 い、 紙 芝 居 の 歴 史 と 演 じ 方 を 学 ぶ。 教 科 書 143 ～ 147			第 23 回	四 季 の 遊 び や 年 中 行 事 の 復 習、 子 ど も へ の 行 事 の 伝 え 方
	第 9 回	絵 本 の 読 み 語 り 演 習			第 24 回	< 児 童 文 化 財 と し て の 児 童 文 学 ① > 子 ど も に 知 っ て ほ し い 日 本 の 昔 話 に つ い て
	第 10 回	< 人 形 劇 パ ネ ル シ ア タ ー の 理 論 と 演 じ 方 ① > デ モ ン ス ト レ ー シ ョ ン、 ビ デ オ、 教 科 書 P163			第 25 回	< 児 童 文 化 財 と し て の 児 童 文 学 ② > グ リ ム の 昔 話 に つ い て
	第 11 回	< 人 形 劇 パ ネ ル シ ア タ ー の 理 論 と 演 じ 方 ② > デ モ ン ス ト レ ー シ ョ ン、 ビ デ オ、 教 科 書 P163			第 26 回	< 児 童 文 化 財 と し て の 児 童 文 学 ③ ア ン デ ル セ ン 童 話 に つ い て。 教 科 書 114 ～ 117
	第 12 回	パ ネ ル シ ア タ ー の 絵 人 形 制 作 ①			第 27 回	< ク リ ス マ ス を め ぐ る 児 童 文 化 財 > ク リ ス マ ス の 絵 本、 ビ デ オ、 ペ ー プ サ ー ト な ど の 紹 介 と 分 析
	第 13 回	パ ネ ル シ ア タ ー の 絵 人 形 制 作 ②			第 28 回	< 児 童 文 化 財 と し て の ア ニ メ に つ い て > 「 と な り の ト ト ロ 」 を 視 聴 す る。 教 科 書 P176 ～ 181
	第 14 回	パ ネ ル シ ア タ ー の 絵 人 形 制 作 ③			第 29 回	< と な り の ト ト ロ に 観 る 子 ど も の 文 化 > 「 と な り の ト ト ロ 」 の 背 景 と 子 ど も の 遊 び に つ い て 学 ぶ。
	第 15 回	児 童 文 化 財 に つ い て の ま と め			第 30 回	児 童 文 化 の 総 括
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習： 教 科 書 の 次 回 学 習 箇 所 を あ ら か じ め 読 ん で お い て く だ さ い			復 習： ワ ー ク シ ー ト プ リ ン ト の 復 習 を し、 特 に 手 あ そ び は 覚 え る ま で 練 習 し て く だ さ い。		
成 績 評 価 の 方 法	試 験 期 間 に お け る 定 期 試 験： 実 施 （ ） す る ／ （ ○ ） し な い 筆 記 試 験 （ 3 0 % ）、 レ ポ ー ト （ 3 0 % ）、 実 技 （ 2 0 % ）、 授 業 態 度 （ 2 0 % ）					
教 科 書	『 児 童 文 化 』 （ 三 上 利 秋 編 著、 保 育 出 版 社 ）、 『 み ん な で 手 あ そ び ワ ン ・ ツ ー ・ ト ン 』 （ 妹 尾 美 智 子 ・ 市 川 恭 子 著、 ド レ ミ 出 版 ）					
参 考 文 献	『 児 童 文 化 』 （ 皆 川 美 恵 子 ほ か 著、 保 育 出 版 社 ）、 『 演 習 児 童 文 化 』 （ 小 川 清 実 編、 萌 文 書 林 ）、 『 昔 話 の 深 層 ユ ン グ 心 理 学 と グ リ ム 童 話 』 （ 河 合 隼 雄 著、 講 談 社 プ ラ ス ア ル フ ァ 文 庫 ）					
注 意 事 項	本 教 科 で は 定 期 試 験 は 行 い ま せ ン が、 単 元 終 了 時 に 小 テ ス ト ま た は 小 レ ポ ー ト を 行 い ま す。 ま た 前 期 は 5 週 目 以 降、 絵 本 の 読 み 語 り 発 表 を 行 い、 後 期 に は パ ネ ル シ ア タ ー の 個 人 発 表 を 行 い ま す。 発 表 当 番 時 に 無 断 欠 席 を し な い こ と。 ま た 授 業 に 必 要 な 教 材 は 忘 れ な い よ う に し て く だ さ い。					

授 業 科 目	イ ン タ ー ン シ ッ プ I		単位数	2	担当教員	宮木孝子・星野治
講 義 の 内 容	この授業では、地域保育学科が提供する学外実習の一つ、「インターンシップ実習」のための準備を行います。『インターンシップⅠ』は、本学入学後初めてインターンシップ実習に参加する人向けの授業です。単なる「職業体験」学習にとどまらない、インターンシップのありかたを考えます。					
到 達 目 標	・長期休業期間等を利用して、実際の就業活動を疑似的に体験します。 ・事業体での実務経験を通して、自身のうちにしっかりした職業意識を育てます。 ・本番の就職活動の開始に先立ち、自分が目指す就職とはどういうものかを認識するように努めます。 ・本番の就職活動の開始に先立ち、本学の代表学生としての自覚および責任を、意識できるようにします。					
授 業 計 画	第1回	ガイダンス（１） 地域保育学科におけるインターンシップ実習の意義、今後の予定、その他。				
	第2回	ガイダンス（２） インターンシップ実習事後報告会（前回実習参加者による体験発表）の聴講、その他。				
	第3回	事業体研究 インターンシップ実習の受け入れを表明した事業体（変動あり）の職種や業務内容等について、理解を深めます。				
	第4回	実習申し込み 第一志望の職種だけにこだわらず、いろいろな職種での体験就業に挑戦することを推奨します。				
	第5回	選考試験 地域保育学科専任教員による学内面接を行います。この面接によって、実習参加の可否等が判定されます。				
	第6回	実習先事業体の決定 必ずしも第一志望どおりとは限りません。他学科（文化表現学科）のインターンシップ実習実施分と併せて告知されます。				
	第7回	事前指導（１） 学外向け書類（誓約書、身上書）の作成および提出を行います。				
	第8回	事前指導（２） 実習全体を通した諸注意事項、必要な事務手続きの説明、社会人としての基本マナーの学習などを行います。				
	第9回	体験学習（現場実習） ・現場実習は、長期休業期間（夏季、春季）や週末、土休日を利用して実施します。				
	第10回	・実習日数は、原則として 10 営業日です。 事業体によっては、実習日数が増減する場合があります。				
	第11回	・実習期間が他の実習や行事と重複する場合、事前に日程調整を行います。 原則として、資格・免許の取得に必要な実習のほうが最優先されます。				
	第12回	ただし、インターンシップ実習は『地域活動Ⅰ』『地域活動Ⅱ』の学外実習よりも優先されます。 ・事業体によっては、独自の必要な審査や研修等を、実習開始前に行う場所があります。				
	第13回	・実習中の活動内容は、本学所定の実習日誌に記述していただきます。 実習日誌は実習終了後、事業体からの評価を経て、本学へ返戻されます。				
	第14回	事後指導（１） 実習日誌の記載内容（事業体からの評価を含む）に基づいて担当教員と個別面談を行い、実習状況の評価を行います。				
	第15回	事後指導（２） インターンシップ実習事後報告会の実施（日時・場所は別途通知します）。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習：過去のインターンシップ実習参加者が記した実習日誌(本学キャリアセンターにて保管)に随時、目を通してください。 その他、予習（事前準備）が必要な事項については、指導教員が指示します。			復習：復習が必要な事項については、指導教員が指示します。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験：実施（ ）する／（○）しない 実技（８０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	・履修登録者の多少に応じて、授業日時や授業教室を変更する場合があります。 ・『インターンシップⅡ』との合同授業になる場合があります。 ・学内授業でも学外実習中でも、“無断～”のたぐいの行動（無断欠席、無断遅刻、無断私語、無断内職、無断早退、その他）はすべて厳禁です。 ・「事前指導（２）」を欠席した場合（理由不問）、実習参加辞退と見なされて、単位を取得できない場合があります。					

授 業 科 目	イ ン タ ー ン シ ッ プ Ⅱ		単位数	2	担当教員	宮木孝子・星野治
講 義 の 内 容	この授業では、地域保育学科が提供する学外実習の一つ、「インターンシップ実習」のための準備を行います。『インターンシップⅡ』は、『インターンシップⅠ』を履修した人向けの授業です。『インターンシップⅠ』と同様に、単なる「職業体験」学習にとどまらない、インターンシップのありかたを考えます。					
到 達 目 標	・長期休業期間等を利用して、実際の就業活動を疑似的に体験します。 ・前回のインターンシップ実習の経験や、事業体での新たな実務経験を通して、自身のうちにしっかりした職業意識を育てます。 ・本番の就職活動の開始に先立ち、自分が目指す就職とはどういうものかを認識するように努めます。 ・本番の就職活動の開始に先立ち、本学の代表学生としての自覚および責任を、意識できるようにします。					
授 業 計 画	第1回	ガイダンス（１） 地域保育学科におけるインターンシップ実習の意義、今後の予定、その他。				
	第2回	ガイダンス（２） インターンシップ実習事後報告会（前回実習参加者による体験発表）の聴講、その他。				
	第3回	事業体研究 インターンシップ実習の受け入れを表明した事業体（変動あり）の職種や業務内容等について、理解を深めます。				
	第4回	実習申し込み 第一志望の職種だけにこだわらず、いろいろな職種での体験就業に挑戦することを推奨します。				
	第5回	選考試験 地域保育学科専任教員による学内面接を行います。この面接によって、実習参加の可否等が判定されます。				
	第6回	実習先事業体の決定 必ずしも第一志望どおりとは限りません。他学科（文化表現学科）のインターンシップ実習実施分と併せて告知されます。				
	第7回	事前指導（１） 学外向け書類（誓約書、身上書）の作成および提出を行います。				
	第8回	事前指導（２） 実習全体を通した諸注意事項、必要な事務手続きの説明、社会人としての基本マナーの学習などを行います。				
	第9回	体験学習（現場実習） ・現場実習は、長期休業期間（夏季、春季）や週末、土休日を利用して実施します。				
	第10回	・実習日数は、原則として 10 営業日です。 事業体によっては、実習日数が増減する場合があります。				
	第11回	・実習期間が他の実習や行事と重複する場合、事前に日程調整を行います。 原則として、資格・免許の取得に必要な実習のほうが最優先されます。				
	第12回	ただし、インターンシップ実習は『地域活動Ⅰ』『地域活動Ⅱ』の学外実習よりも優先されます。 ・事業体によっては、独自の必要な審査や研修等を、実習開始前に行う場所があります。				
	第13回	・実習中の活動内容は、本学所定の実習日誌に記述していただきます。 実習日誌は実習終了後、事業体からの評価を経て、本学へ返戻されます。				
	第14回	事後指導（１） 実習日誌の記載内容（事業体からの評価を含む）に基づいて担当教員と個別面談を行い、実習状況の評価を行います。				
	第15回	事後指導（２） インターンシップ実習事後報告会の実施（日時・場所は別途通知します）。				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 『インターンシップⅠ』の場合と同じく、過去の实習日誌をよく読んでください。 その他、予習（事前準備）が必要な事項については、指導教員が指示します。			復習： 復習が必要な事項については、指導教員が指示します。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 実技（８０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	・履修登録者の多少に応じて、授業日時や授業教室を変更する場合があります。 ・『インターンシップⅠ』との合同授業になる場合があります。 ・学内授業でも学外実習中でも、“無断～”のたぐいの行動（無断欠席、無断遅刻、無断私語、無断内職、無断早退、その他）はすべて厳禁です。 ・「事前指導（２）」を欠席した場合（理由不問）、実習参加辞退と見なされて、単位を取得できない場合があります。					

授 業 科 目	レ ク リ エ ー シ ョ ン 論		単位数	2	担当教員	新戸 信之
講 義 の 内 容	過去の経験により形成された「レクリエーション」の概念を検証するとともに、レクリエーション運動の歴史を紐解きながら、様々な領域・場面におけるレクリエーション活動の意義や効果・必要性について、企画方法・実技とも連動させ、体系的に学習する。					
到 達 目 標	・レクリエーションの本質を理解する。 ・レクリエーション支援の企画から事後評価に係る、一連のプロセスについて理解する。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション 自由とレクリエーション				
	第 2 回	レクリエーションとは何か レクリエーション略史				
	第 3 回	レクリエーション支援の構造				
	第 4 回	領域別レクリエーション				
	第 5 回	ライフスタイルとレクリエーション				
	第 6 回	健康スポーツとレクリエーション				
	第 7 回	セラピューティックレクリエーション APIE プロセス				
	第 8 回	レクリエーションの価値とニーズ 財の分類				
	第 9 回	レクリエーション事業とは				
	第 10 回	レクリエーション事業計画				
	第 11 回	レクリエーション行動のメカニズム				
	第 12 回	コミュニケーションスキルとホスピタリティ				
	第 13 回	レクリエーションワーカーの資質 安全管理				
	第 14 回	支援プログラム案の作成方法				
	第 15 回	まとめ				
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予 習：	各回のテーマから、内容を予想、イメージする。			復 習：	授業の内容と、自己の経験を照らし合わせてみる。
成 績 評 価 の 方 法	試験期間における定期試験： 実施（○）する／（ ）しない 筆記試験（８０％）、授業態度（２０％）					
教 科 書	『レクリエーション支援の基礎―楽しさ・心地よさを活かす理論と技術』（日本レクリエーション協会）					
参 考 文 献	『レクリエーション活動援助法』（福祉士資格講座編集委員会、中央法規）					
注 意 事 項	初回のオリエンテーションで配布					

授 業 科 目	レ ク リ エ ー シ ョ ン 実 技		単位数	2	担当教員	新 戸 信之
講 義 の 内 容	前期は、様々なレクリエーション財を体験し、それぞれの持つおもしろさや効果を感じることを目的とし、後期は、日時・場所・対象など、支援現場に即した状況でロールプレイをすることにより、現場対応力を身につけることを目的とする。 1年を通して、レクリエーションを学んだ者のスペシャリティとなり得るスキルを習得することを目的とする。					
到 達 目 標	・ 事前情報に即した支援プログラムを作成する。 ・ 支援現場の状況に応じた対応をする。					
授 業 計 画	第 1 回	オリエンテーション コミュニケーション・ワーク（個人→グループ）			第 16 回	支援プログラム評価の視点について 携帯メールによる他者評価の方法について
	第 2 回	動的グループ・ゲーム			第 17 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験の準備・リハーサル
	第 3 回	静的グループ・ゲーム			第 18 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ①
	第 4 回	イニシアティブ・ゲーム			第 19 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ②
	第 5 回	グループ・ワーク・トレーニング			第 20 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ③
	第 6 回	レクリエーション・スポーツ①			第 21 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ④
	第 7 回	レクリエーション・スポーツ②			第 22 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ⑤
	第 8 回	身近な物を利用して遊ぶ			第 23 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ⑥
	第 9 回	知的レクリエーション財			第 24 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ⑦
	第 10 回	スポーツ①			第 25 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ⑧
	第 11 回	スポーツ②			第 26 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ⑨
	第 12 回	創造的レクリエーション財（絵画）			第 27 回	ロールプレイによるレクリエーション支援体験：グループ⑩
	第 13 回	創造的レクリエーション財（造形）			第 28 回	レクリエーション支援のポイント
	第 14 回	レクリエーションプログラム案の作成			第 29 回	まとめ
	第 15 回	レクリエーションプログラム案の作成			第 30 回	チャレンジ・ザ・ゲーム
授 業 に 対 す る 予 習 ・ 復 習	予習： 後期の「ロールプレイによるレクリエーション支援体験」については、ネット上に掲載された過去の他者評価を参考にし、臨む。リハーサルは必須。			復習： 後期の「ロールプレイによるレクリエーション支援体験」については、発表後、自己評価と他者評価を基に指導案を修正し、完成させる。		
成績評価の方法	試験期間における定期試験： 実施（ ）する／（○）しない 発表（70％）、授業態度（30％）					
教 科 書						
参 考 文 献						
注 意 事 項	初回のオリエンテーションで配布					